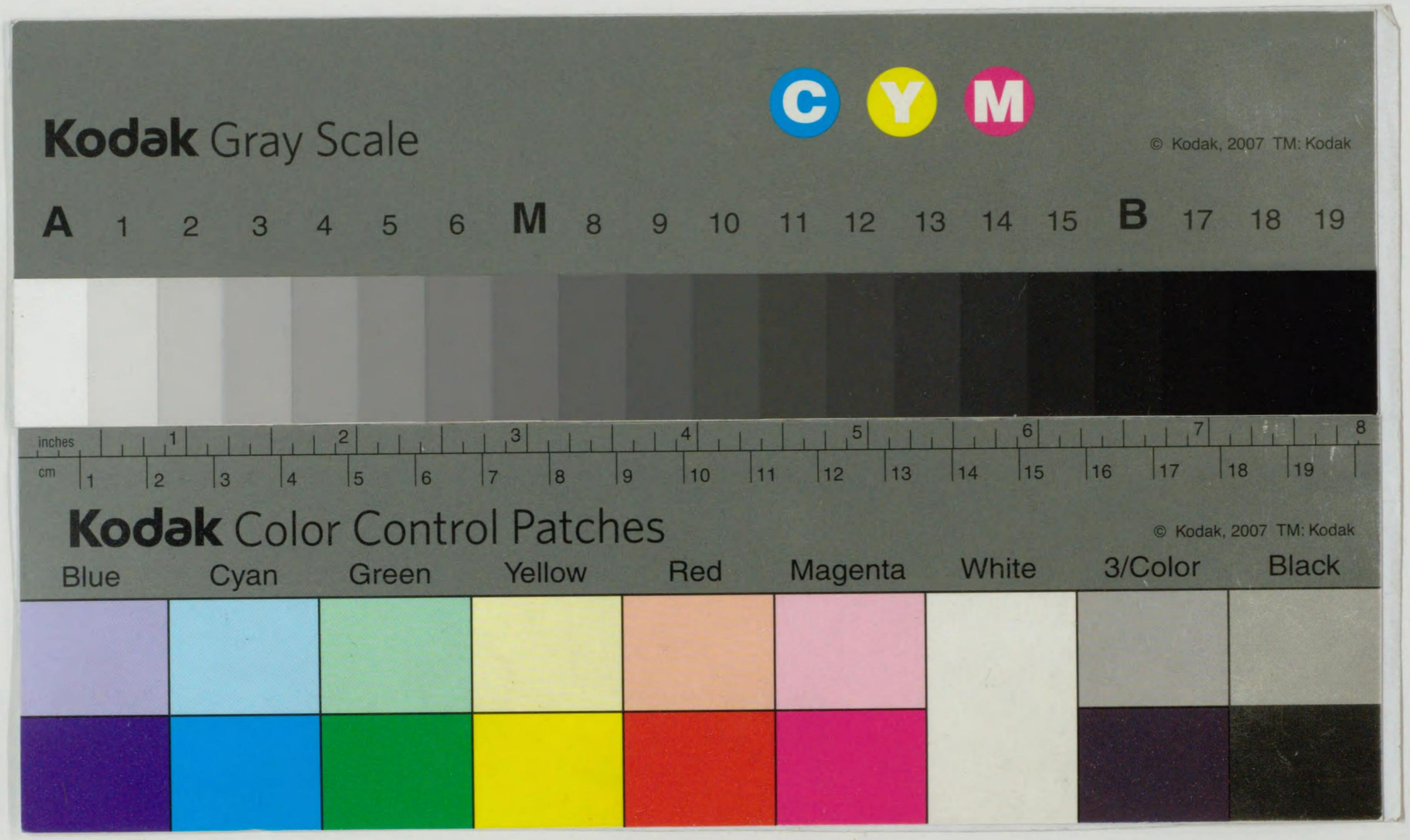
Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

160 224

孫過庭書譜衍釋

一名藝術書論

雪竹富壽題

160
224

160/
224

孫過庭書諡衍釋

一名藝術書論

大正
13. 12. 4
内交

160-224

孫過庭書譜衍釋

（藝術書論）

樋口銅牛著

序說

漢字廢すべきか、將た廢すべからざるか。毛筆廢すべきか、將た廢すべからざるか。此れおのづから根本の大問題なるに違ひないけれども、吾人は今此處に多くを言ふまい。又多く言ふべき必要もあるまい。唯吾人は劈頭に於て斷言して置く。漢字設令ひ廢せられたりとも、漢字の一切を吾人の眼中より奪ひ去らむことは、絶對的不可能なると同時に、毛筆設令ひ廢せられたりとも、毛筆を以て書を學ぶ者の存在は、永久無限であると。

漢字の初めて製作せられた際には、刀を以て竹木に刻書したらしい。故に曰く。倉頡書契を造つて結繩の政に代ふと。書契の契字は、刀に從つて製作せられて居る。刀を以て文字を刻書したのは、歷々明白である。が、書契の書の字も亦聿に從ひ者の省聲て、聿は即ち筆の字《竹旁は秦人の加ふる所》なること明白爭ふべからざる以上は、毛筆の製作も、漢字の製作後間もなきことであるらしい。無論

文字が書として大いに發達するに至つたのは、毛筆の力に負ふこと頗る大で、若し毛筆といふものが發明せられなかつたならば、或は文字が書としての發達は不可能であつたかも知れない。苟くも書といふからには、それが藝術的でなくてはならぬ。字を書けば即ち書であるにはあらうけれども、それは吾人の謂はゆる書ではない。世に書家といふ語がある。此の語の意味は、汎く文字を筆にて書く人といふのであらうか。將た普通の人より以上に文字を筆にて達者巧者に書く人といふ限定せられたる狹義の意味であらうか。若し前者であるとしたならば、天下一般の人は、猫も杓子も皆書家を以て呼ばるべき筈であるけれども、書家といふ語が特定の名詞で、狹義に用ひらるべきものだとしたならば、學童が毛筆を以て書を學ぶことは廢せられたりとも、社會一般が萬年筆、鷲ペン、鉛筆のみを使用することゝなりたりとも、何處かの隅には毛筆の運用によつて書の上達を遂げた人があつて、其れが頻りに社會に持て囃され尊敬せらるゝといふ現象の存在を認めねばなるまい。此れは少ないものは珍重せらるゝといふ簡單の理由でなくて、書が大いに發達し進歩し、全く藝術的のものとなつたといふ書學の歴史に鑑みて是非さうなくてはならない事象であらう。

文字は唯文字としての形が寫し出されすれば、それにて用は足る、目的は達せらるといふのは、如何にも分り切つた明白の理論のやうで、實は沒分曉不徹底の似是非理窟である。食は以て飢を療すれば足ると言つても、飢を凌ぐ以上に美味を欲するのは、人の性であらうではないか。渴を醫すれば

足る筈である所の飲料の水ですら、茶もあれば珈琲もあり、炭酸水もあり、ラムネもありサイダーもあるではないか。衣は以て體を蔽へば足ると言つても、世に美衣服を欲する者豈獨り婦妾のみならんやぢや。堯舜の世には土階三等茅茨剪らずの宮室に居ても、天子の權威が保たれたであらうけれども、今の世の中ではさうは行くまい。何時までも人は太古の有樣であれと言つても、人間に慾といふ者、希望といふ者の存在する限り、有爲の轉變は免かれ得べきものでない。而してそこに進歩の存在が認められ、趣味性の滿足が促され、生活の眞意義が拓開せらるゝのである。

文字は唯毛筆の揮寫によりてのみ之を美的藝術的ならしめ得。故に歐米には字ありて書なく、我が東洋には字ありて又書といふものがある。必要以上の要求、それは贅澤であると言つても、人間に趣味性の滿足を欲する傾向が存在する以上、單に衣食住の方面のみでなく、如何なる方面に向つても必要以上の要求は起つて來るのである。文字を筆にて書く方面に於ても亦然りで、美的藝術的の毛筆の書、それを書家の獨占に委せずして吾も學んで見ようといふ心機は、誰人の胸底にも伏在せるものと見ねばならぬ。吾人が書譜を說かんと欲する所以は、斯る人心の機微を察したからである。書を學んで之に熟達すれば、趣味性の滿足を得、趣味性の滿足を得れば、平和な氣分を養ふことが出來る。精神の平和は取りも直さず人格の向上であらねばならぬ。書と人格——吾人は斯く見て居るものである。斯く見るを以て最も正しいと信ずる者である。故に書を學ぶ者は爭心を避けねばならぬ、銜氣を排せねば

ならぬ、市氣を去り匠氣を除かねばならぬ。而して一意に自家趣味性の滿足を標的として進まねばならぬ。心志の滿足する所、此れ精神の平和の存する所で、書の三昧は此を以て到彼岸とするのである。

筆には法があり、書には訣がある。筆法は書を學ぶ所の型である。方法である。さうするよりも斯うした方が字の格好がよい、釣合がとれる、書きよい、見て感じがよいと言つて、執筆や運筆の方法を說くのが此れである。が、此の型を得たばかりでは、字は書けても、まだ〳〵書を書くといふまでには達し得ないのである。故に文字を型即ち法の如くに書き得るといふ以上に、更に一歩進んで美的の書を書かうとするには、訣といふものを會得せねばならぬ。が此の訣といふものは、寧ろ自分の工夫によつて悟入すべきもので、口舌の說明で容易く會得せしめ得らるゝものでない。祕訣といふのも折角苦心してやつと自分の工夫により案出した所を敢て人に知らるゝのを吝むといふケチ臭い量見からでなく、實は之を語らうにも、其の人の修得の程度が之を悟了し得るまでに達して居なかつたならば、語つても駄目であるから、祕して置くのであらう。言はゞ筆法は擊劍柔術の目錄のやうなもので、書訣は更に一段進んだ免許皆傳といふやうなものである。正宗の名刀も其の人を得ねば眞の斬れ味は試みられぬやうに、如何なる書訣も書を學ぶ人の修得が未熟では、猫に小判も同樣、何の價値もないものである。印印泥といひ、錐畫沙といひ、屋漏痕といふが如きも、畢竟書訣の標語であるには違ひないが、書を學んで其の域に達した者でなくては、恰も禪の公案のやうなもので、何の意味だか薩張り分らぬ。故に

書は寧ろ說かざるに如くなしであるが、說かずば或は不親切のやうにも聞こえようから、ホンの端緒ばかりを說くことにする。一偶を以て三偶を反すとは、學ぶ人の力量次第である。若夫れ筆法の談ならば、そんじよそこらに幾らも先生があるから、勝手に往いて敎はりなさいぢや。

書論がポツ〳〵出はじめたのは、司馬晉の時代からであるらしい。後漢の蔡邕や魏の鍾繇やに名を託した書評めいたものもあるにはあるけれども、信用は出來ない。或は衛夫人や王右軍やの筆訣のやうなものも、後人の僞託かも知れない。梁の武帝や後魏の江式あたりに至つては、稍明確な書評をなして居る。が、眞に書論として耳を傾くるの價値あるものが出たのは、唐代に入つてから有る。而して唐人の書論中最も纏まつて而も理義明白なのは孫過庭の書譜である。孫過庭の書論は古今書論中の菁華と言ふべきものである。

宣和書譜に曰く。孫過庭字は虔禮、陳留の人、官は率府の錄事參軍に至れり、古を好み博雅にして文詞に巧なり、名を翰墨の間に得たり、草書を作つて咄として義獻に迫れり、尤も用筆に妙なり、雋拔剛斷、天才より出でたり、功用積習の致せる所に非ず、臨摹を善くして、眞贋を辨ずる能はざらしむ、文皇《唐の太宗》嘗て謂へらく、過庭小子の書は二王を亂ると、蓋し神似知るべし、運筆論を作り、字數千を逾ゆ、妙に宗旨あり、學者宗として以て法となす、然れども落筆急速を喜びたれば、人之を病とせり、要するに是れ自得の趣あり、今御府の藏する所二、書譜序、千文、

陶隱居の論書啓、庾肩吾の書評等あり。

運筆論は即ち書譜であらう。有名な詩人陳子昂が其の墓誌を撰して居るさうな。書譜の末に垂拱三年寫記とあるから西紀六八五年頃の人である。書譜、千文の外に景福宮殿賦も傳はつて居る。米芾の書史には『凡そ唐人の草書中にて二王の法を得たることは、其の右に出づる者なし』と言つてある。孫過庭書譜の墨本として今に傳はつて居るものは完本でない。書譜の首に卷上と題し、文末に『撰して六篇となし分ちて兩卷となす』とあるから、今に傳はつて居るのは其の上卷であると說いて居る者が最も多いけれども、其の文章の體裁上より見て、包愼伯の如きは、此れは序說で、六篇の譜は南宋に亡びたと言つて居る。我邦の藤原佐世の本朝現在書目には、孫過庭書譜三卷とあるから、古くは序說と併せて三卷の完本が我邦に傳はつて居たやうにも思はる。源順の和名鈔の調度部文書具硯字下に書譜を引いて、『用レ硯之法、石爲二第一一、瓦爲二第二一』と言つてある。狩谷棭齋は書譜無考と言つて居るけれども、或は孫過庭の書譜であるかも知れない。

書譜の墨本の今に傳はつて居るものでは、宋の薛氏本が最も古い。明の文徵仲の停雲館法帖中に收めてあるのも、一半は之を石刻に取り、一半は之を眞蹟から取つたとのことである。其の後淸の康熙年間に安麓村本といふのが刻せられた。此は文徵仲の得る能はなかつた部分の眞蹟を新たに得たのだと言つて居る。或は唐人の臨摹本が別に傳はつて居たのかも知れない。最近に其の安麓村本の原本が珂羅版となつて出て來た。眞蹟の珂羅版であるから、墨本よりは更に用筆の窺ひ得らるゝものである。書

元代尙上下卷あつたといふ說もある。

譜の釋文ばかりを刻本としたものは、和漢共に流布本が有る。文字に多少の出入は有つても、文章の大義に於て杆格するほどのことはない。

書譜は其の草稿で、且つ駢儷文で綴つてあるから、讀み惡い所が少なくないと同時に、幾らかは贅語らしい所もある。包愼伯などは其の文を穢蕪なりとし、刪定吳郡書譜といふものを作つて、讀みにくい所と贅語らしい所とを遠慮なく刪り、筆墨の利病、推闡幾ど盡くしたれども、每に朕詞のために意を掩はる、故に浮言を刪つて以て名理を顯すと言つて居る。

包愼伯は孫過庭の書を評して曰ふ。

遍く唐人の傳はれる書を閱するに、篇幅を成して山陰《王右軍》の家法に偭かざる者、《唐の太宗皇帝の》屛風書と書譜とのみ。然れども屛風書は筆を遣る處恒に快きを傷む、又形骸に多く未だ檢せざる所あり。書譜は法を守ること頗る嚴なれども、屛風書の茂密の致なし。反覆して其の結法を察するに、空曠にして完密、氣力實に人に過ぐるあり。之を擬すること數過すれば、益〻能く其の得失を盡くす。篇端の七八百言は規矩に遵つて拘束に弊ふ、凋疎甚しと爲す。而も東晉の士人以下の千餘言、漸く佳境に會せり。然して消息多方より以下の七八百言は、乃ち思逸し神飛ぶの樂しみあり。至つて合作なりとす。聞夫家有南威より篇末に至るまでは、則ち變態を窮め情調に合し心手雙に暢びたり。然れども、手敏餘りあつて心閒足らず。賞會既に極まれば略瀾漫に近しと。

書譜卷上

吳郡孫過庭撰

夫自古之善書者。漢魏有鍾張之絕。晉末稱二王之妙。

【大意】昔から書家は澤山あつたけれども、漢魏の頃では鍾繇張芝の二人が最も優れて居り、晉の末では王羲之王獻之父子が卓出した書家であつた。

【衍談】支那に文字といふものが起つたのは、隨分古いことであり、從つて書學といふものも古くから行はれて居たこと勿論で、禮記には十年にして外に居宿し、書計即ち習字と算術とを學ぶと見え、史記の項羽本紀には、項藉即ち項羽が少き時書を學んで成らず、去つて劒を學ぶ云々と見えて居る。古代から書を學ぶといふことはあつたに違ひないが、天下一般の人が文字を學んだ人の中より特に目指して、彼は書の達人だ名人だと持て囃すことゝなつたのは、ズッと後の事らしい。秦の始皇帝の刻石は李斯の書といふことになつて居るけれども、明白な證據があるわけではない。前漢の宰相蕭何が蒼龍白虎二闕の榜を書いたなどいふことも信を置くには足らない。周代から既に史官即ち書記の官が置かれて居たから、達者に字を書く人は有つたに違ひないけれども、恰も畵者の名が傳はらないやうに、書家の名も傳はつて居ない。書の達人として其の名が傳はつて居るのは、前漢には唯陳遵一人のみで、其の他は皆後漢より魏にかけの人である。漢書の陳遵傳に曰く。陳遵畧傳記に渉り、文辭に贍

趙高は胡亥の書の師なりとも見ゆ。

なり、性書を善くせり、人に與ふるの尺牘は主皆藏弆して以て榮とせり、請ひ求めらるれば敢て逆はざりき、到る所の衣冠之を懷にし唯後に在ることを恐れたり、王莽素より遵が材を奇とす。在位の者も多く之を稱譽せり、是に緣つて起して河南の太守となせり、既に官に在つて從史を西《長安》に遣るときには、善書の吏十人を前に召して私書《私用の手紙》を治せしめて京師の故人に謝せんとするに、遵は凡に憑りながら書吏に口占し、且つ官事を省せり、書數百封、親疎各〻意ありきと。

前漢末王莽時代の人であるから、西紀六―一九年頃の存命者である。此に繼いでは後漢末の蔡邕である。蔡邕より以前に曹喜は章帝の建初中《西紀七六―八三》に祕書郎となり、篆隷の巧を以て名を天下に收めたと書斷に見えて居るけれども、正史に所見はない。蔡邕の本傳に曰く、

蔡邕字は伯喈、陳留の圉の人なり、熹平四年《西紀一七五年》に乃ち五官中郎將堂谿典、光祿太夫楊賜、諫議太夫馬日磾、議郎韓說、太史令單颺等と奏して五經の文字を正さむことを求む、靈帝之を許す、邕乃ち自ら碑に書丹し工をして鐫刻せしめて之を太學《即ち鴻都門》の門外に立つ、碑の始めて立てられたるとき、觀視し及び摹寫する者車乘日に千餘輛、街陌に塡塞せり、帝學を好み、自ら臯羲篇五十章を造り、因つて書生の能く文賦を作る者を引く、本頗る經學を以て相招きしが、後に諸の尺牘を爲り、及び巧に鳥篆を書する者をも皆引招を加へしかば、遂に數十人に至れり、董卓の誅せられし時、王允《司徒》邕を獄に投じ、遂に獄中に死したり《西紀一九二年、獻帝の初平二年》時に年六十

書斷には又三倉の著者賈魴を擧ぐ和帝の時「西紀八九―一〇五」の人

一、北海の鄭玄聞いて嘆じて曰く、漢世の事、誰と與にか之を正さんと、著す所詩賦碑誄銘讃連珠箴弔論議・獨斷・勸學・釋誨・叙樂・女訓・篆勢・祝文章表・書記凡そ百四篇世に傳ふと。

蔡邕の書は今傳はらない、鴻都石經の殘字は近代往々發見せらるゝやうであるけれども、鴻都石經の書丹者は、趙域・劉宏・張文・蘇陵・傅楨・左立・孫表などいふ助手が有つたらしいから、蔡邕の自ら書丹したのは全部ではあるまい。

鴻都石經の見物人の多かつたのは、今でいふ標準字體が定められたのであるから、一には之を知つて置くためで、必しも書美の翫賞者ばかりではあるまい。蔡邕が嵩山の石室に書を學んで神人から筆勢を授かつたと言はるゝ如きは、書藝を神祕なものにせんための後人の附會で、現に其の筆勢なるものも今に傳へられては居るけれども、神授といふに至つては、眉唾ものであらう。蔡邕の女蔡琰《文姬》の奏する所によれば、神授は唯疾澀の二法に過ぎないといふことであるが、疾澀の二法ならば、何も神授を待つほどのことはあるまい。疾澀の二法が書妙の訣とするに足らぬといふのではない。神授に託して法を貴くせんとするのが狡獪で、人を愚にしたものであるといふのである。

後漢の靈帝の時に、南陽の人師宜官といふ人は、善書を以て鴻都門に徵された數百人中の傑物で、大は即ち一字徑丈、小は乃ち方寸千言、頗る達者に字を書いたらしい。大酒くらひの豪放人で、或時酒肆に入り込み、主人の在らざるに乘じ散々酒を飲んだあとで、其の壁に書きなぐつて去つたら、觀者雲のごとく集まり、大いに酒が沽れ其の書は壁を鏟(ケヅ)つて人が持ち去つたと言はれて居る。耿球碑は此の人の書であるさうな。

同じく鴻都門下の一人で、梁鵠《字は孟皇》といふ人が有つた。師宜官に書が及ばなかつたので、師宜官が板《版に同じ木片の以て字を書すべきもの、即ち版籍版圖の版なり》に手習ひしては、其の面を削つて柎《桴に同じ編みたる木を桴といふ、此處では柿(ハイ)の雙聲假借なるべし、柿は削木、木のコケラなり、風削柿を吹くなどあつて、今の鉋屑の如きものなり》を焚き捨てゝ居たのを見て、澤山の板をこしらへて師宜官の坐側に置き、勸めて酒を飲ませ、師宜官が醉に乘じて矢鱈に板に字を書きなぐり、グウグウ寢込んだ隙を窺ひ、ソッと之を竊み、之を手本として手習ひし、後には師宜官よりは偉いと言はるゝほどの書の達人となり、魏の武帝即ち曹操《孟德》は梁鵠の書いた板を壁に釘づけにして之を翫賞したと言はれて居る。

又梁鵠の弟子に毛宏《字は大雅》といふ人が有つたが、獻帝の時に郎中となつて、書を祕書《禁祕中に在つて書記の事を司る官吏》に敎へたと言はれて居る。書の弟子即ち門人といふことが明かに記載せられて居るのは、此の人が始まりであらう。此の人以前には所見がない。近ごろ發見せられた流沙墜簡中に梁鸞といふ名が見えて居る。梁鵠と同じく鳥の名を以て其の名として居る所から見ると、梁鵠の兄弟ではあるまいか。其の筆蹟は如何にも巧い。逸民傳の梁鴻は字は伯鸞であるが、此の人で

はあるまい。

毛宏と同時に東萊の左伯《字は子邑》といふ善書家があつた。此の人は又紙を製することが上手で、蕭子良集には『漢興つてより紙を用て簡に代ふ、和帝の時に蔡倫巧みに之を爲り、子邑最も其の妙を得たり』と見えて居る。が、漢興つてよりといふのは少々誇張ではあるまいか。現に後漢末の師宜官が木片に手習ひしたと言はるゝ位であるから、設令ひ紙といふものが有つたにせよ、其の用は餘り廣くなかつたやうである。流沙墜簡中にも手習ひした木策が見當るのである。張超字は子平も靈帝の時の人で、張良《子房》の子孫であるが、文才あつて草書を善くし、時人に妙絶して居たと漢書に見えて居る。仇子長も亦靈帝の時の人で郡閣頌は建寧五年《西紀一七二年》此の人の書であると云ふ。

餘談ではあるが紙といふ字は、糸に從ひ氏の聲、帋といふ字は巾に從ひ氏の聲、糸は繒字の省で、巾は帛字の省であるとすれば、繒帛も亦字を書くの用となす場合には、紙若くは帋と呼んで差閊へないやうであり、繒帛に字を書くことは漢初から行はれたものとすれば、漢初から紙若くは帋は有つたものと言へば言はれぬこともないやうであるけれども、敗絮を以て現今見る如き紙を製することは蔡倫より始まつたこと爭はれまい。後漢書に曰く、蔡倫意を造(ハジ)めて樹膚、麻頭及び弊布、魚網を用ひて以て紙を爲れり、元興元年に奏して之を上る、帝其の能を善す、是れより從ひ用ひざるものなし、天下蔡倫紙と稱す云々と。後漢の和帝の元興元年は西紀一〇五年に當り、今より約千八百二十餘年前である。其の蔡倫紙と稱したのは、蔡倫以前の紙と區別せんための名であるかのやうにも思はるゝけれども、此れは特に蔡倫の發明であることを記念せんための名であると見た方が妥當であらう。是れより從ひ用ひざるものなしと言つてあるから、隨分廣く世に行はれたに違ひない。劉熙の釋名にも『紙は砥(シ)なり、平かなること砥の如きなり』と言つてある。劉熙も後漢の人である。許氏の說文《許愼も蔡倫と同時の人》に紙字を擧げて、帋字を擧げてない。魏の太和六年《西紀二二二年》に博士河間の張揖が古今字詁を上つた表には、帋字を擧げて、紙は今なりと說いて居ると太平御覽に晉書を引いて曰つてあるけれども、紙字と帋字と孰れが先に造られたかといふことは、決定甚だ困難であるが、此れは强ひて決定せねばならぬほどの問題ではない。孰れにしても紙の發明が藝術書の發達に大いに貢獻する所が有つたといふことは爭はれまい。前漢末の楊雄は鉛を懷にして槧に題すと言つて居るから、前漢末までは毛筆の外に鉛筆も行はれ、又文學に從事する者を操觚者と言つて居るから、前漢に絮紙の無かつたことは明かである。

潁川の邯鄲淳《字は子叔》といふ人は、魏に仕へて博士給事中《後に臨淄侯》となり、書を以て諸皇子に教へたとある。曹喜を師として尤も古文・大篆・八分隸書に精しく、魏の三體石經は此人の筆と言はれて居る。

韋誕《字は仲將》は京兆の人、後漢の獻帝の建安中《西紀一九六——二一九》郎中に拜し、魏の太

和中《西紀二二七——二三二》に武都の太守となつた。邯鄲淳を師として能書の名あり、魏の寶器の題銘は、此人の手蹟だと言はれて居る。又魏の凌雲臺成りし時、其題榜を書かせられ、數丈の屋上に轆轤で縋り上げられて心悸目眩し、過度に神經を勞したので、其の縋り下された時には頭髮が眞白くなつて居た、子孫に命じて書家たることなからしめたと言ひ傳へられて居るが、信ずるに足らない。

又潁川の胡昭字は孔明といふ人は、陸渾山中に隱れて躬耕して道を樂み、閭里の尊敬を受けて、嘉平二年《西紀二五〇年》に年八十九で卒したが、此の人史書《史官の書く書體といふ意味にて、正體書のことなるべし》を善くし、鍾繇・邯鄲淳・衛覬・韋誕と名を並べて居たが、尺牘の筆迹《主として草書なるべし》も亦見事であつたと魏志に見えて居る。

陳留の阮瑀字は元瑜といふ人は、蔡邕の學問の弟子であつた。書が巧いので都護の曹洪が書記を掌らしめやうとしたが、躬を屈せないので、魏の太祖即ち曹操が司空軍謀祭酒となして、記室を管せしめた。軍國の書檄は多く此の人の筆に成つたのであるが、建安十七年《西紀二一二年》に卒した。魏の文帝の太子時代の友で、文帝は其の死後に元城の令吳質に書を與へて『元瑜書記翩々、樂しみを致すに足る』と其の書を評して居る。

衛覬字は伯儒、河東安邑の人で、少年夙成才學を以て稱せられ、曹操辟して司空の掾屬となした。古文、鳥篆、隸、草を好んで、何でも善く書いた。

史書を史籀篇の大篆なりといふ說は、取るに足らない。

此の外後漢の杜度、崔瑗《字は子玉》曹喜、吳の張紘、皇象等皆書を以て名ある人である。

以上擧げた所で書學といふものゝ大いに勃興したのは、後漢末靈帝の時から魏の時代にかけての事であるのが知らるゝであらう。淸の萬九沙云く、書は光和《西紀一七八——一八三、靈帝の年號》以後に非ざれば見るに足らずと。蓋し見る所あるの言である。而して此の中で最も傑出して居たのが張芝《伯英》と鍾繇《元帝》の二人であつた。

張芝は敦煌酒泉の人で後漢末の人、草書に於ての聖人と仰ぎ尊まれた。草書に於ての聖人が支那の中部より出でずに、西も西も、西のキッ端なる敦煌酒泉郡即ち今の甘肅省の西北端から出たといふことは、一寸注意すべきことであらう。天才の興るに地を擇ぶ筈は固より無い。元來支那人は驚くほど異族を包容するの雅量を有して居る。胡元・滿淸を例證に引くまでもなく、其の昔も殷を征服した姬周が既に己に西戎であつた。孟子曰く、文王は西夷の人なりと。

張芝の父張奐は歐陽氏の尙書に通じた大學者で、黨罪を以て田里に禁錮せられて後、徒千人を養ひ、尙書記難三十餘萬言を著したと言はるゝ人、少きときより志を立てゝ、大丈夫の世に處する、當に國家のために邊功を立つべしと言つて居たが、將帥となるに及んで果して勳名あり、論功の賞を辭して弘農華陰に從屬せんことを請ひ、特に許された人であるから、舊籍は敦煌酒泉であるけれども、後に

崔瑗は草書勢を著ぜり。

は弘農即ち畿内の人となつて居たのである。其の卒したのは靈帝の光和四年《西紀一八一年》で、年は七十八であつた。王悟の文字志に曰く、芝少きときより高操を持し、名臣の子なるを以て學文に勤め、儒宗となれり、寶武將となり大尉に表して公車を以て有道に辟したれども、至らずして張有道と稱せられ尤も草書を好み、崔杜の法を學びて之を家にせり、《一家を成すをいふ》衣帛必ず書して而る後に練る、池に臨みて書を學び、水之がために黑し、筆を下せば則ち楷則となる。號すらく匆々草書に暇あらずと、世の寶とする所となり、寸紙も遺さず、韋仲將之を草聖と謂へりと。張芝の書は淳化閣帖に載せられて居る。華嶽廟碑は張昶の自書であると水經注に見えて居る。

魏の鍾繇字は元常、潁川長社の人、定陵侯に封ぜられ、太傅に遷り、成侯と謚せられた。魏に仕へて武勳赫々たりし人である。胡昭を師として書を學ぶこと十六年、未だ嘗て戶外に出なかつたほどの熱心家であつた。又劉德昇に從ひ抱犢山に入つて書を學んだとも言はれて居る。嘗て其の子の鍾會に語つて曰ふ、吾れ精思して書を學ぶこと三十年、若し人とともに居るときは、地の廣さ數步に字を書し、臥するときは被に字を書し、被が表まで穿げとほつた、每に天地間の萬類を見ては畫して之に象り、總てが字として見えたと。太祖《曹操》邯鄲淳・韋誕・孫子荊・關枇杷とともに用筆を議したことが有る。其の席上で韋誕が蔡邕の筆法をもつて居るのを見て、苦ろに求むるけれども、韋誕が之を與へないので、胸を槌つて血を嘔き。太祖《曹操》が五靈丹を服せしめて命をとりとめた。誕が死してから盜人に其の冢を發かせて蔡邕の筆法を取り出し、專ら其の法に從うて更に筆妙を得たと言ひ傳へられて居る。魏の受禪碑は此の人の筆とせられて居るが、淳化閣帖にも其の筆迹は收められて居る。宣示表は最も著名なもので、後に晉の宰相《司徒》王導は、胡狄の侵入に北方に居たゝまらず、戰敗れて楊子江の南へ都を遷す際にも、此の宣示表だけは後生大事に衣袖中に收めて寸時も手放さなかつたので、後に王右軍は之を得て大いに書に上達したと言ひ傳へられて居る。

王右軍父子は何と言つても書に於ての古今の冠絕である。王右軍は晉室南渡後即ち東晉時代の人で、東晉は建康《建業・金陵・南京、時代により名を異にす》に都す。世に謂ふ六朝といふものを建康に興亡せる朝廷を指稱せるものであるとすれば、王右軍も亦六朝時代の人である。此の六朝の數へ方に就ては、兩說あつて、

1。吳——東晉——宋——齊(南齊)——梁——陳——隋

2。晉——宋——齊(南齊)——梁——陳——隋

であるが、三國時代の吳と東晉とは年代の間隔がある。地理的にはそれでも宜しからうが、時代の連續詞としては少し面白くないやうでもある。吳の亡びたのは、晉の武帝の太康元年《西紀二八〇年》で、東晉は元帝の建武元年《西紀三一七年》に始まる。此の間實に三十七年の隔たりが有る。又第二說の隋を以て偏安の江南朝廷と共に之を數ふることも不當ではあるけれども、南朝を正統として北朝を僞

朝とするの見地からは、隋を數へて以て唐に接せしめんと欲するのである。蘇東坡の潮州韓文公碑に文は六代《六朝に同じ》の衰へたるを興すといへる如きは、隋を其一に數へたものでなくてはならぬ。

東晉も南朝であるが、南北朝といふ時の南朝は、宋齊梁陳である。蓋し南朝と曰へば之に對する北朝がなくてはならないのに、東晉の時代には、北方は謂はゆる五胡十六國の興亡相繼ぎ、朝廷らしい朝廷がなかつたからであらう。故に南朝は宋五十九年、齊二十二年、梁五十五年、陳三十二年、併せて百六十八年間《西紀四二〇—五八七》である。而して東晉は元帝の建武元年より恭帝の天熙元年に至る《西紀三一七——四一九》百二年間である。北朝は拓跋氏の魏後に分れて西魏東魏となり、東魏は高氏の齊《北齊》に簒はれ、西魏は宇文氏の周に簒はれ、齊は周に併せられて、周は隋に亡ぼされた。

王右軍、名は羲之、字は逸少、晉の司徒王導の從子《或は曰く、曠の子》である。晉に仕へて右軍將となつたから、後世の人之を王右軍と呼ぶ。又會稽の內史となり山陰に居たから、王會稽又は山陰など呼ばるゝこともある。其の生れたのは西晉の懷帝の永嘉元年《西紀三〇七年》で、卒したのは東晉の哀帝の隆和三年《西紀三六四年》年は五十九であつたといふのが、王右軍年譜の著者魯一同の說であるが、包愼伯は其生れたのは晉の惠帝の太安二年癸亥《西紀三〇二年》で卒したのは東晉の穆帝の升平五年辛酉《西紀三六一年》と言つて居る。

王獻之の字は子敬、右軍の第七子である。晉に仕へて建威將軍吳興の太守に除せられ、徵されて中

文中子には、晉、宋、拓跋魏、北齊、宇文周、隋を六代と數へてある。

五胡は、匈奴、羯、鮮卑、氐、羌、十六國は前趙、後趙、前秦、後秦、前燕、後燕、南燕、北燕、前涼、後涼、南涼、北涼、西涼、夏、蜀漢である。

書令に拜した。其の王大令と呼ばるゝのは、一族の王洽が同じく中書令に拜せられ、獻之の方が年長者であつたからである。康帝の建元二年《西紀三四三年》に生れて、孝武帝の太元十一年《西紀三八六年》に卒した。年は四十三であつた。即ち右軍の年三十六の時の子で其の卒したのは、右軍より二十二年後である。

宣和書譜に曰く、

王羲之字は逸少、導の從子なり。官は右將軍《右軍將の誤り》幼時は言に訥なりしかば、未だ人に知られざりき。年十三にして周顗に謁せしとき、顗一見して之を奇とせり。時に牛の心《臟》の炙を重んぜり。坐客未だ《箸》を擧げざるに、顗先づ以て羲之に啗はせたり。是に於て始めて名を時に知られたり。長ずるに及びて談辯に巧なり。骨鮫を以て稱せられき。尤も隸草を善くして、今昔の冠たり。然も其の名を得るは乃ち專ら草聖を以てせり。論者其の筆勢を評して以爲へらく、飄として遊べる龍の若く、矯として驚ける龍の如しと。尤も從伯《父》司徒導のために器重せられたり。當時の朝廷の公卿も皆其の才を愛せり。羲之每に自ら稱すらく、我書を鍾に比せば當に抗衡すべし。張芝に比せば猶當に雁行すべしと。然れども初めは以て庾翼●郗愔に及ばずと謂へり。其の暮年に及んで妙に造れり。嘗て章草を以て《尺牘を書し》庾亮に答へたるに《其弟の》翼之を見て輒ち嘆服し、因つて羲之に書を與へて曰く、《吾昔伯英の章草十紙を有せり、江を過ぐるときに亡失し、嘗て妙跡の永く絕

中書令は唐制では宰相であるが、晉制ではそれほど重任であつたか不明、併し鳳池と呼ばれたほどであるから、今の宮內大臣のやうなものであらう。

えたるを嘆ぜしに》忽ち足下の家兄に答へし書を見るに、煥として神明の若く、頓に舊觀に還れりと。會稽に佳山水ありしかば、名士多く之に居たり。義之既に浙江を渡り《て吳人となる》亦復終焉の志あり。嘗て同志と會稽山陰の蘭亭に宴集し、義之自ら序を爲つて以て其の志を述べたり。義之性鵞を愛せり。山陰に道士の鵞を養ふもの有り、是に於て往き觀て意に甚だ悅べり。因つて之を市らんことを求む。道士の云く、爲に道德經を寫さば當に《鵞》羣を擧つて相贈るべしと。義之欣然として《道德經を》寫し畢り、鵞を籠にして歸れり。其の趣尚の超絶なること碌々たる者の能く塵を望む所に非ず。又嘗て蕺山に在りしとき一老姥の六角の竹扇を持てるを見、義之其の扇を索めて爲に各〻五字を書せしに、姥は惱れる色あり。因つて姥に謂つて曰く。但是れは王右軍の書なりと言ひて以て百錢の直を求めよと。姥其の言の如くせしに、人爭うて之を售へり。其の書の世に貴重せらるゝこと此の如くなりき。梁の武帝之を評して曰く。勢、龍の天門に躍り虎の鳳闕に臥する如しと。故に歷代之を寶とし永く以て訓となせり。其れ亦擬倫に善ければなり。《武帝の評語の適切にして擬倫を得たるをいふ。》義之少うして衛夫人の書を學べり。自ら深く窮めたりと謂へり。《楊子》江を過ぎて名山の間に遊ぶに及び、李斯・曹喜・鍾繇・梁鵠等の字を見、又洛を去るときに、蔡邕の石經を從弟《王》洽の處に見、復張昶の華嶽碑を見たり。始めて喟然として嘆じて曰く、衛夫人の書を學びて徒らに年月を費せりと。或は謂ふ。筆法を白雲先生より得たりと。暮年に乃ち筆陳圖・筆勢論・用筆賦・草書勢等を作りて以て訓を其の子孫に遺せり。

王少令は王洽の子の王珉なり。

妻の郗氏も亦甚だ書に巧なり。七子あり。世に稱せらるゝ者五人。玄之・凝之・徽之・操之・獻之・並に草隸に巧なり。而も獻之最も名を知らる、凝之の妻の謝道韞も、才華ありて書を善くしき。家學の傳はること未だ王氏の盛んなるが如きは有らざる也。今御府の藏する所《の筆蹟》二百四十有三《點》あり。

王獻之字は子敬。義之の第七子なり。官は中書令に至れり。淸峻にして美譽ありたり。而も高邁不羈にして、閑居すること終日なりとも、容止に倦める色なく、風流縕藉なること一時の冠たりき。嘗て兄の徽之操之と俱に謝安《の所》に詣りしに、二兄は多く鄙事を談ずるに、獨り獻之は寡默にして頗る名理を事としたり。客は安に王氏の兄弟の優劣を問ひしに、安は曰く、小子佳なりと。且つ謂へらく、吉人の辭は、寡小なる者其れ之を得んと。蓋し獻之の七八歲の時、固自づから凡ならざりしなり。書を學べるとき、羲之密かに其の《背》後より其の筆を掣きしに、得られざりしかば、是に於て獻之の他日當に大名あるべきを知れり。後に其の《書》學果して羲之と相後先せり。嘗て壁に書して方丈の大字を作りしに、羲之甚だ以て能とせり、桓溫《獻之に》命じて扇を書せしめしとき、筆誤つて落ちたりしかば、因つて書きて烏駁の特牛を作れりしに、甚だ妙なりき。初め謝安請ひて《獻之を其の》長史となせり。太元中新たに太極殿を起したるとき、安は獻之の書《せる額》榜を得んと欲しけれども《憚つて》敢て遽かに言はず、乃ち韋仲將の《魏の》凌雲臺の《故》事を語つて《之を諷し

たりしが》獻之は其の旨を知り、乃ち顏色を正して曰く、仲將は魏の大臣なり、寧んぞ此の事あらんや、其の此の若くならしめば、魏德の長からざるを知ると、安遂に已めり。當時の《人》のために器重せらるゝこと此の如くなりき。獻之初め郗雲の女を娶りしが、離婚して、後には新安の愍公主を尙せり。子なく、唯一女ありたり、後に立ちて安僖皇后となれり。后も亦書を善くせり。初め羲之郗曇と婚を論ずるの書に云く。獻之淸譽ありて隷書を善くし、咄々人に逼ると。則ち知る《べし》羲之の深く自ら《獻之を》許可せるは、徒語ならざりしを。嘗て樂毅論一篇を書し、獻之に與へて《之を》學ばしめ、《樂毅論の》後に題して云く、官奴に賜ふと。《官奴は》即ち獻之の小字。獻之の盡く羲之の用筆の妙を得たる所以なり。論者以謂へらく。丹穴に鳳の舞ひ、淸泉に龍の躍る如しと。《獻之の書の》精密淵巧なることは、神智より出でたり。而して王僧虔は乃ち曰く。羲之の書は、江左の中朝に及ぶ者あるし、獻之は遠く及ばず、而も媚趣は之に過ぎたりと。然れども僧虔の論は、特に是れ『春秋』の備はることを《人に》責むるの法なり。獻之自ら謂ふ。年二十四のとき、名山の間に遊びしに其の五百七十九字を授くる者あり。初め此の書を得て之を習ひしに、未だ一週《日》を經ざるに、形容髣髴せり、又嘗て南郊の祭板を書せしに、其の字畫●木に入ること七分なりきと。然れども語不經に類するが故に、學者《間に》は《如上の談を眞として》傳ふることなし。獻之は隷を以て稱せらるゝと雖も、而も草書の得る所を特に多なりとす。今御府の藏する所《の筆蹟》八十有九《點》あり。

王羲之云。頃尋諸名書。鍾張信爲絕倫。其餘不レ足レ觀。」可レ謂鍾張云沒而羲獻繼之。

【大意】王右軍の曰く、頃ろ遍く名ある人の筆蹟を褁つて、之を視比ぶるに、鍾繇と張芝と二人の筆蹟が特に等群を超越して居る。鍾繇と張芝との筆蹟を見た眼では、迚も其の他の人の筆蹟を見る氣になれないと。右軍が既に斯く謂つて居る以上は、鍾繇と張芝と二人が世を去つて後の大名筆は、右軍父子の外に無いと謂つて差支へあるまい。

【衍談】此の一節は、右軍の語を引いて、自分《孫過庭》の前に言つた所を實にしたに過ぎないから、格別必要な文句では無い。故に包愼伯は之を刪つて居る。

鍾繇張芝より王右軍に至るまでの間にも、書名の高い人は、尠からず有るにはあつた。其の中でも、索靖や衞夫人は、最も聞こえた人であり、王右軍と同時にも、王右軍の從弟の王敬和《名は洽》などは、右軍も『弟の書は遂に吾に減ぜず』と謂つて居るほどであるが、モトより右軍には及ぶべくもない。

又云。吾書比二之鍾張一。鍾當抗行。或謂過レ之。張草猶當雁行。然張精熟、池水盡墨。假令寡人躬レ之若レ此。未レ必謝レ之。」此乃推レ張邁レ鍾之意也。

【大意】　又王右軍の曰く。自分の書を以て鍾繇と張芝とに比較するに、鍾繇より劣つて居ようとは思はない。或は少し位自分の方が優つて居るかも知れない。張芝の書に至つては少し自分よりは優つて居よう。張芝が書に精熟するためには、池亭に於て手習ひして、池の水を眞ッ黒くしたと言はるゝ程である。假令自分が其れほどの熱心で手習ひしたならば、未だ必しも張芝に及ばぬこともあるまいと。右軍の此の言は、張芝を推尊し、猶且つ鍾繇をも書に邁れた人とするの意味で、必しも張芝を揚げて鍾繇をケナシたのではない。

【衍談】　此の一節も、包愼伯は之を刪つて居る。其れは王右軍が果して斯る手前味噌見たやうなことを言つたかどうか不明であるとでもいふのであらう。孰れにしても、書論といふ上からは、格別必要な文句ではない。

臨池盡墨《或は盡黑に作る》の意味は、よくわからない。此れは臨レ池學レ書、池水盡黑、一紙不レ遺と一紙不遺の一句を池水盡墨の下に連ねて解釋すべきものゝやうに思はる。一紙不レ遺即ち書を學んで書き試みた所のものは、一紙も人に遺らないで、盡く池の水に抛り込んで棄てゝしまつたので、其の反古のために、池の水が墨のやうに眞ッ黒うなつたものとして之を解したならば、格別怪しむべきことでもなくて、有り得べきことのやうに思はるゝのである。

寡人は德寡い人といふ意味て、貴人の自稱代名詞だが、漢以後の人に之を用ひた例は、餘り聞かない。

右軍は清門の出で、晉室は王氏の力によつて支へられて居たほどであるから、寡人と稱したのを敢て不都合であるとは言はないが、異例であるから、一寸目立つのである。

鍾張王の三人は、昔から並び擧げらるゝ所の特絶の書家で、梁の庾肩吾の書評には、斯う謂つてある。妙を探り、深きを測り、形を盡くし、勢を得、烟華紙に落ちて將に動かんとし、風彩字を帶びて飛ばんと欲し、神化の爲す所を凝らすが如きは、人世の學ぶ所に非ず、惟張有道《芝》鍾元常王右軍其の人のみ也。張は工夫第一にして、天然之に繼ぎ、鍾は天然第一にして、工夫之に次げり、王は工夫張に及ばざれども、天然は之に過ぎたり、羊欣云く、貴きこと羣品に越え、古今に二莫く、衆法を兼攝して、備さに一家を成せり、若し孔門に書を以てせば、三子は堂に入れりと、充に上の上たり。

王右軍父子は、二王として並び稱せらるゝ例であるから、父子の勝劣は、談豈容易ならんやであらう。父子の書に特異の精彩は無論あるに違ひないけれども、書學の奥妙に神詣せる點に於ては、敢て軒輊する所ある次第ではあるまい。後世に二王の書を評する者、動もすれば獻之に不滿の辭を放つの傾が有るけれども、其の獻之に向つて不滿の辭を放つ者が、却つて獻之の書風に捻香して居るのは、一奇である。

考二其專擅一雖レ未レ果二於前規一、摭以兼通、故無レ慙二於即事一。

【大意】 王右軍は鍾繇、張芝の專擅なる長所を考へて書を學んだ人であるから、未だ前人即ち鍾繇、張芝の規矩に勝つて之に上ることは出來なくとも、二家の擅長即ち鍾の眞と張の草とを撫うて以て衆通精熟して居るから、日常書を書くに於て、人に向つて慚かしいやうなことはない。

【衍談】 此の一節も、包愼伯は之を刪つて居る。此の一節は孫過庭の王右軍の書を論じたものとして解するを以て妥なりとすべきが故に、下の惣ニ其終始一、非レ無ニ乖互一の次に置き換へて見た方解し易いやうである。無レ慙ニ於即事一は、王右軍の書を評した言としては、物足らぬ感がせらるゝけれども、此れは、此の書譜の撰著がモト書を學んで即事に慙づるなからしむるのが目的であるから、斯く言つたのであらう。

仲尼燕居篇に曰く。禮とは何ぞや、即事の治なり、君子其の事あれば必ず其治あれり云々、即事は即ち即治で、事は治の假借である。

考字は或は會字ではあるまいかとも思はる。會字ならば、理會の意味で、意味が一層明白となる。但し考字として前人が見て居るから、强ひて改めはしない。改むるほどの必要もあるまい。

書を條幅若くは扇額や聯として玩賞する所の風は、孫過庭の時代まではなかつた。書は皆日常の用を辨ずるためのものであつたから、『即事に慙づるなし』と言つたので、即事とは、即時に起る所の事、日常の尺牘を書くのも、公私の文書を認むるのも、詩文を錄するのも、人から賴まれて額榜や碑文を書くのも、皆即事である。何でも字を書くべき場合に、自分は書が下手であるからとて、人前では字を得書かずに、暗い顏色をするのが、即事に慚づるといふもので、平生によく書を學んで居たならばソンナ事が無くてすむであらう。一人前の書は、誰でも書き得ることになるといふのが、孫過庭の意中であらう。

果は勝也と解せらるゝ字、左傳に『敵に勝つを果とす』とある。力が敵より優つて居るから、敵に勝つことが出來る。故に果の字はマサル《優》の義として用ひらる。

摭は摭摭の摭の字。拾ひ取る意味に用ひらる。

評者云。彼之四賢。古今特絶。而今不レ逮レ古。古質而今妍。」夫質以レ代興。妍因レ俗易。雖ニ書契之作。適以記言。而淳漓一遷。質文三變。馳驚沿革。物理常然。貴ニ能古而不レ乖レ時。今不レ同レ弊。所レ謂文質彬彬。然後君子。何必易ニ雕宮於穴處。反ニ玉輅於椎輪一者乎。

【大意】 世の評者の曰く。鍾張二王の四賢は、書に於ての古今特絶といふに異論は無いが、之を學んで其の域に達するといふことは、到底望み得べきことであるまい。又必しも望むべきでもあるまい。何となれば、古人は質を尚んで、今人は妍を尚ぶ。古人と今人との間には、風尚の上に一大鴻溝が劃せられて居る。必ず古人を學んで其の域に達せよといふは、恰も雲に梯して登れといふやうなもので、不可能事を人に强ふるものと謂はねばならぬ。且つ古と今と風尚の相異がある以上は、今人は宜しく

今人の風尙に適する所の書を學ぶべきである。此れが時勢に順應するといふもので、古人古人と曰つて今を排するのは、固陋頑冥であらうと。

孫過庭は之に答へて曰く。評者の言は、一知半解の似是非議論であると謂はねばならぬ。時代によつて風尙の變遷推移がある位の事は、自分も疾(ハヤ)くから心得て居る。何も他人の無用な警告に耳を傾くる必要はない。自分が古人の書を推尊する所以は、必しも古人の型に篏まる所の几帳面な字を書けと謂ふのでは無い。が、古と今とに風尙の相異があるとて、徒らに今に媚びて以て古を斥ぞけ、專ら今を師として以て古を顧りみなかつたならば、必ずや邪道に墮落せずにはすむまい。此れが自分の最も懼るゝ所である。能く書を學んで、而も今人の風尙を棄てず、今人の風尙に眼を向けても、而も今人の弊處を避くるやうに心懸けたならば、之に越したことはあるまい。古人は穴居し、今人は雕宮に居る。古人は椎輪に乘り、今人は玉輅に乘る。今人は贅澤で、古人は質樸である。が、今人の生活は贅澤過ぐるから、須らく原始時代の生活に還り、穴居して椎輪に乘れと曰ふやうな愚なことは、自分も之を言はんと欲する者でない。時勢といふことは、自分もよく之を理解して居る。

【衍談】 包愼伯は、此の一節の文中、雖書契以下質文三變に至る十八字と、所謂文質以下の二十六字を刪つて居る。無論刪つても、意義の上に害は無い。駢儷文の弊處は徒らに文句を飾る點に在る。文質彬々、然後君子は、論語に『質文に勝てば野(ヤ)なり、文●質に勝てば史なり、文質彬々として然る後に君子なり』とあるのを引用したのである。

古人の書は質樸で、今人の書は妍美である。古に泥まず、今にも媚びず、兩者を融合して一方に偏しない所に、書の眞價値は存するのであらう。能古不レ乖レ時、今不レ同レ弊の九字が、此の一節の眼目である。無論古人の書必しも質ならず、今人の書必しも妍ならず、仔細に看來らば、今人の書に質なる所も發見せられ、古人の書に妍なる所も發見せられようけれども、若し書風に時代的區別があるものとしたならば、斯く見るのが正當であらう。

古拙は惡くないけれども、粗獷は宜しくない。遒美は惡くないけれども、妍媚に過ぐるときは、娼婦の嬌態となつて、厭ふべきものである。世には粗を以て古意と誤解して居る者もあるやうであるが、戒しむべきことである。要するに、書は宜しく品位を保つべきである。品位なきの書、之を俗惡といふのである。然らば品位とは何であるか。曰く。天衣無縫、些の人工作爲の痕なく、些のイヤ味なきの書、之を品位あるの書といふのである。書の品位は其人の天分にもよるが、習熟の功でも之に達することが出來る。

雕は彫の假借、雕宮は彫刻藻繪を施した丹碧煌々たる宮殿、穴處は穴居に同じ、玉輅は玉を以て裝飾を施した車、椎輪の椎は今の槌の字、椎輪とは白木造りの素朴な車のこと也。

又云。子敬之不レ及二逸少一。猶下逸少之不上及二鍾張一。意者(オモウニオモヘラク)以爲。評二得其綱紀一。而未レ

詳二其始卒一也。且元常專二工於隸書一。百英尤精二於草體一。彼之二美。而逸少兼レ之。擬レ草則餘レ眞。比レ眞則長レ草。雖二專工小劣一。而博渉多優。惣二其終始一。匪レ無二乖互一。

【大意】評者は獻之の書の羲之に及ばないのは、恰うど羲之の書の鍾張に及ばないやうなものであると言ふけれども、評者の此の言は、大綱は捕へ得たりとしても、評し得て妙なりとまでは言ひ難い。鍾繇は隸書に擅長を有し、張芝は草書に擅長を有して居る。而して之を兼ねて隸草共に之を善するのは、右軍である。右軍の隸書を以て鍾繇の隸書に見比べ、其の草書を以て張芝の草書に見比べたならば、專巧の點に於て少しは見劣りするかも知れないけれども、右軍の二者を兼ねて之を善くせる點には、敬意を表せざるを得ない。苟くも書家たるからには、眞草共に之を善くせざれば、ツマラヌではないか。

【衍談】此の一節は、假りに評者の言を設けて、自己の意見を吐いたもので、王右軍の書が鍾繇や張芝に及ばないと言ふのは、必しも當つて居ないといふのである。此の一節も、包愼伯は之を刪つて居る。百英の百は、伯の假借である。工字は巧字の假借であらう。

隸書といふも眞書といふも、其の實は同じである。眞書楷書といふのは、後に起つた名目で、古くは隸書と言つた。今日吾人が隸書と言つて居るのは、漢代の八分隸書である。張芝や鍾繇の時代には既に今日吾人の見るやうな楷書が歷として行はれて居た。八分隸即ち波磔のある隸書に對し、之と區別せんために、今隸と呼ばるゝこともあるが、今の楷書を隸書と呼ぶことは、唐代までも行はれて居たやうである。八分隸と古隸との區別や八分の名義に就ては、書學者の間に隨分八釜しい議論もあるやうであるが、どうも分つたやうで分らぬやうなものであるから、大體に於て前に述べた程度で滿足して宜しからうと思ふのである。古人を地下より起して之を聽かない限り、後人の想像で彼是と目に角立て口を尖らして議論して見た所で、到底駄目であらう。

惣二其終始一、非レ無二乖互一は、評者の言の一知半解なのを言つたのである。此處では右軍の書が鍾張に及ばぬといふのが間違ひといふことになり、後節では、獻之の羲之に及ばぬといふは間違ひないといふことになる。惣は總總の字の訛體、乖は背反の義、互は喰違ひの義、或は誤の音通假借と見ても宜しからう。

謝安素善二尺牘一而輕二子敬之書一。子敬嘗作二佳書一與之。謂必存錄。安輒題レ後答レ之。甚以爲レ恨。安嘗問二敬一。卿書何如右軍。荅云。故當レ勝。安云。物論殊不レ爾。子敬又荅。時人那得レ知。敬雖レ權以此辭一折安所鑒上。自稱レ勝レ父。不二亦過一乎。」

且立レ身揚レ名。事資二尊顯一。勝母之里。曾參不レ入。以二子敬之豪翰一紹二右軍之筆札一。雖レ復粗傳二楷則一。實恐未レ克二箕裘一。況乃假二託神仙一。恥レ崇二家範一。以レ斯成レ學。孰愈二面牆一。」

後羲之往レ都。臨レ行題レ壁。子敬密拭二除之一。輒書易二其處一。私爲不レ惡。羲之還見。乃歎曰。吾去時眞大醉也。敬乃內慙。是知逸少之比二鍾張一。則專博斯別。子敬之不レ及二逸少一。無レ或レ疑焉。」

【大意】時の大學者で且つ大名望家であつた謝安は、素より尺牘の書を善くする人で、獻之の筆蹟には、敬意を表して居なかつた。獻之が嘗て筆蹟の見事な尺牘を作つて謝安に遣り、此れほど筆蹟が上出來で有つたならば、如何に謝安でも、必や此に見とれて、座右に留め、長く玩賞してくれるであらうと自負して居た所が、何ぞ圖らん、謝安は無造作に其の尺牘の餘白に二三の文句を書いて返して來たので、獻之は案外の思ひをなし、甚だ以て謝安が自分の筆蹟を重んじてくれないのを遺恨に思うたさうな。又謝安が嘗て獻之に向つて、貴公は自分の筆蹟を家大人のに比べて、何如思はるゝかと尺牘で問うた所が、獻之は又尺牘で答へて曰ふやう、固より自分の方が勝つて居ると。ソコで謝安は折返し尺牘を獻之に遣つて、貴公は自分の書は父のに勝つて居ると曰ふけれども、世間ではさうは認めて

居ない、世評は貴公の筆蹟は右軍に及ばぬと決めて居ると言つたら、獻之は又世評なんかあてにはならない、世間の明盲どもがどうして自分等父子の筆迹の優劣を見分くることが出來ようかと返事を遣つたさうな。獻之は此れで以て謝安に一本參つたつもりであらうけれども、自分で以て自分は父よりは偉いと稱するのは、間違つた量見ではあるまいか。

そも〳〵人が身を立て名を揚ぐるのは、其の父の名を尊く世に顯はさんがためである。孝經にも『身を立て道を行ひ以て名を後世に顯はすは孝の始めなり』と見えて居る。母に勝（マサ）るといふ名の村へは、孝子の曾參は足を踏み入れなかつたとさへ言はれて居る。親勝りであると自負するなどは、獻之の心得違ひと謂はねはならぬ。獻之ほどの筆翰の腕力で以て其の父の筆札を承けつぐのであるから、粗（ホゞ）書學の楷則を傳へ得たには違ひないけれども、恐くは猶遺憾なく家業を襲ぎ得たとは言はるまい。況んや父の書を學んだと曰へば、家範を崇うする所以であるのに、却つて之を恥ぢて、自分の書訣は神仙から授かつたといふなどは、何たる輕薄な心がけであらう。そんな輕薄な心がけで以て書を學んでも、恰うど墻壁に面して立つやうなもので、進むことも出來ねば、前方を見ることも出來ない。此れでは上達のしやうがないではないか。右軍が嘗て京師に向つて出發せうとする際に、壁に書を題して置いた。獻之は右軍の出發した後で、其の題壁の父の筆蹟を拭ひ去り、少し位置を換へてモトの通りの字を書いて置いた。獻之は心私かに惡い書ではないと思うて居た所が、右軍が京師から還つて之を見、

嘆息しして言ふやうには、自分が曩に京師に向つて出發する際には、餘ほど醉つぱらつて居たものと見ゆる、どうして斯る醜惡の字を書いたものであらうと。獻之は之を聞いて、內心に頗る慙ぢたさうな。

右軍の筆蹟は張芝や鍾繇に及ばぬと言つた所で、二人の專長を自分の有として居る點に於て、其の優越點が見出さるゝのであるが、獻之の王軍に及ばないのは、殆んど決定的で、何等疑ふべき所も無い。故に評者の鍾張と右軍との比較論は當らないが、右軍父子の比較論は、當つて居る。

【衍談】　此の數節も、包愼伯の刪る所である。ソレは王獻之の棚卸しを快からず思うた點も有るのであらう。

尺牘の牘は、牘の假借である。或は有の假借、漢文に多く見る所の例也。

孫過庭は何故に斯くまで王獻之の筆蹟に不滿の言を放つたのであらうか。前には羲獻を並べ擧げて、後には羲を揚げて獻を抑ゆる。コゝに前後の矛盾が認められるゝではないか。君子は人の美を濟すべき筈であるのに、人の美を抑ゆるといふのは、如何なる孫過庭の量見であらうか。

包愼伯は斯う言つて居る。

孫過庭の書は、其の源は王獻之から出て居る。書譜に王右軍の諸帖を述べてあるが、一も其の草勢には及んで居ない。是れ其の意中モト右軍の草書を尙ばないからである。書を學ぶには王獻之を宗とし、而も議論には之を排して居るのは、唐の太宗皇帝が王獻之の書を餓隸と言つて之を誚つて居るからである。然り、孫過庭は王獻之の筆意を得ては居るけれども、體勢に至つては、未だ到らざる所がある。故に張懷瓘の書斷にも孫過庭の書を評して『其の天材あつて、工用少し』と謂つてある。孫過庭が唐の臣であるからとて、其の書論にまで自己の意に背いて以て君上の意に迎合するには及ぶまい。而もコゝに着目すべきは、唐の太宗も亦同じく王獻之の書を學んで《此れも包愼伯の言ふ所、吾人も亦然思ふ》而も王獻之を誚つて居る點である。吾人をして强ひて說をなさしむれば、一說ないでもない。

英雄人を欺くといふことがあるが、英雄に限らず、大抵の人は何かしら一の祕密を胸中に藏して居るものであつて、此の祕密を人に看破せらるゝことを殊の外恐るゝものである。此の祕密なるものは、必ずしも自己の名譽利益を保護する所以のものではなく、明白々地に之を人に語つたからとて、敢て自己の威嚴を傷くるやうなものでもないに關はらず、自分では、一生は愚か死んだ後までも此の祕密を人に看破せられまいと心がくるものである。而も後生畏るべし、後世何人が此の祕密を看破するか知れないので、其の祕密のウラを文筆に遺して以て、飽くまで後人を欺きおほせやうとする場合もある。孫過庭が故さらに王獻の棚卸をして居るのは、恐らく此の心理作用に基いたものではあるまいか。即ち此れほどまで王獻之の棚卸しをして置いたならば、如何なる炯眼の人も、到底自分が王獻之の書

を學んだものとは看破し得まい、と孫過庭は思うて居たのであらう。

或は曰く、孫過庭が王獻之を誚つて居るのは、右のやうな卑怯な心理作用に基づくものではなく、其の獻之を抑ゆるのは、大いに義之を揚げむと欲する所以で、唐の太宗皇帝の崩御後は、年を經るに隨つて漸く義之崇拜熱が冷却し、却つて獻之崇拜熱が高くなり、義之の筆迹三紙を以て獻之の筆迹一紙に換へたなどといふ談話が遺つて居る位である。孫過庭は此の現狀に不滿の餘、洗ひざらひ獻之を誚つて以て、義之崇拜の風潮を挽回せむと企てたのであると。或はさうであるかも知れぬ。

包愼伯は又孫過庭の此の所の記實に對し、左の如く辯じて居る。

王右軍は癸亥の生れてあるから、西晉の惠帝の太安三年に當つて居る。甲辰に至つて太令を生んだから、東晉の康帝の建元二年である。穆帝の永和九年には、太令の齡僅に十歲であつたので、蘭亭の會の時には、尙詩を作ることも得しなかつた。永和十一年の春に右軍は官を辭し、誓墓文を書いて會稽に永住することゝなつた。此れより後に京師に往くなどいふことは、斷じて無い筈。然らば右軍が京師へ往いたのは、遲くも永和十年でなくてはならないのであるが、如何に夙成の太令でも、十一歲の年少者で以て、父の書を拭ひ去つて別に自分が之を書き直すといふことは有り得まい。又謝安は太令より二十四の年長者であつた。太令の始めて仕官したときには、謝安の衛軍長史となつた。太元中《西紀三七六——三九六》太極殿の建てられた時に、謝安は太令に其の榜《額》を書かせて百世の光としようと思うたけれども、太令に書けと言ふことを憚つて敢て逼らなかつた、と言はれて居る。謝安が固より極めて太令の筆蹟を重く視て居たのは、此れても分かる。謝安が太令の筆蹟を輕んじて、其の尺牘の餘白にナグリ書きして突き返したなどは、俗說で、信ずるに足らない。況んや謝安は其の父の友人であり、又其の下役であつたこともあるのだから、謝安が太令の尺牘を突き返したからとて、之を深く遺恨に思ふなどといふことも、有り得ないではないか。太令の臨終の際には、郗氏と離婚のことだけを悔いて居る。即ち其の他に於て太令の品行に瑕瑾が無かつたことは、明白である。且つ晉朝では深く禮教を重んじて、東山の絲竹ですら、尙譏議を貽して居る位てある。太令が不謹愼無檢束の人でなかつたのは明かである。太令が自ら其の筆蹟が父に勝つて居ると自負し且つ人に向つて明言したなどは、勝手な出放題を言つて太令を汚瀆したもので、辨せざるべからざることである。

此れは成程包愼伯の辨ずる如くであらう。凡そ著名な人物には、故らに之を尊くし、若くは之を傷づけむがために、いろ〳〵な事實が後人から揑造附會せらるゝものであるから、氣をつけねばならぬ。假に託神仙、恥崇家範とは、前に擧げた宣和書譜の王獻之傳に見ゆる所の年二十四の時に名山に遊んで五百七十九字を授くる者あり、之を學ぶこと一週日で頗る書に上達したといふの類であらう。又王獻之の飛鳥帖といふのがある。此れは飛鳥から書訣を授かつたといふのであるが、モトより荒唐不

稽の談で、後人の揑造附會であること言ふまでもない。王右軍の書は當時旣に天下に重んぜられ、大人も小兒も其の筆蹟を學んで、惟後るゝことを恐るゝの觀が有つたらしい。張翼といふ人は、官東海の太守とまでなつた人であるが、正書は鍾繇を學び、草書は右軍を學んで、頗る書の達人であつた。東晉の穆帝が右軍の手表に批答して之を返さむとするに當り、右軍の手表の筆蹟が餘りに見事であるから、之を座側に留めて玩賞したいと思召され、張翼に命じて右軍の手表を寫さしめ、帝自ら之に批答して返されしに、右軍は之を見て、自分の筆迹であるか、他人の寫したのであるか、殆んど之を見分くることが出來なかつた、餘程時間を經た後にヤツと張翼の贋筆であるのを悟り、小子殆んど眞を亂らむと欲すと曰つたといふことが書史會要に見えて居る。又庾翼が荊州に在りし時、都下の人に與へた尺牘に、小兒輩家雞を賤しんで野雉を愛し、皆逸少の書を學ぶと言つて居る。當時旣に斯る有樣であつたのに、獻之が其の父の書を學んで上達したといふのを恥づる筈がない。獻之は右軍の末子であつただけに、右軍の鍾愛も亦一層で、右軍の周益州に致せる書には『唯一小者あり、尙未だ婚せず』とあり、年政七十二帖には『小者の婚するを待ちて乃ち能く彼に至らむ』とある。小者は獻之を指すこと勿論で、一日も早く獻之に結婚させて晩年の安心を得たいといふ右軍の舐犢の情があり〳〵と見えて居る。父の子を愛すること此れほどであるのに、其の子が父に背いて以て、父の書學ぶに足らずなどいふ道理が無い。

余志學之年。留心翰墨。味鍾張之餘烈。挹義獻之前規。極慮專精。時逾二紀。有乖入木之術。無閒臨池之志。

【大意】 自分は年十五の時から、翰墨道即ち書學に志し、鍾繇張芝の數百歲を經て尙餘芳烈々たる書學の趣致を味ひ、又王右軍父子の後人に貽せる規矩を酌量し、思慮の限りを極め、精力を專ら之に向つて傾注し、二十年以上の功を積んだのである。祭板に書して字が木に入ること八分といふほどの二王の筆力は未だ養ひ得ないにしても、池水を眞ッ黑にするほどの熱心は、敢て張芝に讓らない積りである。

【衍談】 此れより以下漸次肝腎の書論に入るので、此の一節には、孫過庭自身が年十五の少年時代から、二十年以上、心に一寸の油斷《間隙》もなく、專ら書學の上に傾倒して居ることを明かにしたのである。

十五の年より二十年以上に及ぶと云へば、唐の則天武太后の垂拱三年丁亥には、年三十五以上であつたことが明かである。假りに垂拱三年に年三十六であつたとして、唐の太宗の崩ぜる貞觀二十三年己酉は、其の三十九年前であるから、孫過庭はいまだ生れて居ない筈。一紀を十干の一紀でなくて、十二支の一紀として、四年を增すとしても、孫過庭がヤツと呱々の聲をあげた頃である。唐の太宗皇帝

が孫過庭の書を見て、過庭小子二王を亂ると譽めたといふのは、架空の談に過ぎまい。但し孫過庭の生沒年歷は、確とは分らぬ。明の張丑は陳子昂撰の孫過庭墓誌を見たと言つて居るから、若し此の墓誌を見ることが出來たならば、或は之を詳にすることが出來るかも分らぬ。歷代碑傳集か全唐文には收められて居ようと思ふけれども、座右に其の書が無い。

志學の年とは、年十五のこと。論語に『十有五にして學に志す』とあるより出づ。

翰墨は筆札といふに同じ。翰は筆翰とて、筆といふ意に用ひらる。故に弄翰とは。筆を弄ぶことである。要するに翰墨とは字を書くことである。

挹は酔又は酌と同義の字である。

入木の故事は、或は右軍なりといひ、或は太令なりといひ、傳ふる所區々であるが、是も亦後人の假作談であらうから、信ずるに足らない。如何に名人の筆であつても、八分の深さまで字が木に透入するなどは、眞實の談としては聞かれない。

包愼伯は又此節の末二句を删つて居る。必要の文字でないといふのであらう。

觀夫懸鍼垂露之異。奔雷墜石之奇。鴻飛獸駭之資。鸞舞蛇驚之態。絕岸頹峰之勢。臨危據槁之形。或重若崩雲。或輕如蟬翼。導之則泉注。頓之則山安。纖纖乎似初月之出天崖。落落乎猶衆星之列河漢。同自然之妙有。非力運之能成。可謂智巧兼優。心手雙暢。翰不虛動。下必有由。一畫之間。變起伏於峯杪。一點之內。殊衂挫於豪芒。

衂は胸の假借、胸は縮と同字。

【大意】古人の名筆蹟を觀ずるに、懸針と垂露との異なる、奔雷や墜石の奇なる、鴻飛び獸駭くの姿、鸞舞ひ蛇驚くの狀態、絕岸や頹峯の勢、危に臨み槁に據るの形、或は重なりて崩るゝ雲の若く、或は輕きこと蟬翼の如く、之を導けば泉注ぎ、之を頓むれば山安く、纖々乎として初月の天涯より出づるに似、落々乎として猶衆星の河漢に列するが如くに、奇を極め變を盡くして居る。斯くまでに無限の妙趣を備へて居るのは、人巧作爲を超絕して、宇宙自然の妙有に合致して居るからで、徒らに人力を以て筆を運んだからとて、到り得へきものでは無い。信に智と巧と兼ね優れ、心と手と雙びに暢び、筆翰虛しく動かさず、筆を下すには必ず造詣の緣由が有り、一畫の間にも起伏を筆の鋒杪に變じ、一點の內にも衂挫を豪芒に殊にして居るものと謂ふべきである。

【衍談】此の一節は、古人の筆蹟の妙絕して居るありさまを言を盡くして形容し、此の如く變化窮りなき所の絕妙の筆蹟は、尋常一樣の習熱や努力やで出來得るものでない。必ずや人力を超絕したる點まで意識が悟入徹底し、無念無想、意を經ずして而も意のまゝに筆が動くといふのでなくてはならぬ

と古人筆妙の內面の解剖を試みたのである。

鞍上に人なく鞍下に馬なきは、馭馬の妙諦である。字を書くといふ氣分で字を書いたからとて、佳書は成るものでない。謂はゆる意前筆後で、一たび筆を執つて紙に臨んでは、字を書いて居ることをすら忘れてしまはねばならぬ。字を書いてをるといふ氣分で字を書いたならば、必ずや倦怠を生じ、筆が暢びないことゝなる。恰うど歩くつもりで兩脚を歩んだのでは、長く歩けるものでないが、歩くつもりでなく無意識に足を運んで居れば、千里の遠きに行いても、疲れを覺えないやうなものである。謂はゆる一心不亂に精神を書に向つて集注して居れば、人と書との間の樊籬がなくなり、二者がピタりと一致するから、字を書いて居るといふ氣分など生じ得る間隙が無いのである。人よりは一層偉い字を書かうといふやうな爭氣が有つたり、人を驚かしてやらうといふ謀叛氣が有つたり、斯る用筆は人が眞似は出來まいといふやうな匠氣があつたり、斯れほど達者に書いたら高く賣れるであらうといふやうな市氣が有つたりしたのでは、觀るに足るべき書は得られぬ。我を忘れて自分が書になりすまし、自分が筆を執つて字を書いて居るといふことをすら忘れたならば、必ずや筆は心のまゝに動いて佳蹟が得らるゝに違ひない。翰不二虛動一、下必有レ由、一畫之間、變二起伏於鋒杪一、一點之內、殊二岨挫於毫芒一、とは、平生の習熟積功を言つたもので、紙に臨んで字を書する際の心がけを言つたものではない。即ち斯ういふ變化が筆蹟の上にあらはれて居るといふので、故意に紙に臨んで斯ういふ變化が試みられて居るといふのではない、人巧と自然との境は、此處に在るのである。此の間の消息に通じなくては、字は書けても、書は書けるものでない。

藝術は變化を尙ぶものである。變化なければ藝術なしであるが、變化に富むもの自然に如くなしであるから、自然は大藝術である。而も其の大藝術は、書を以て之を彷彿することが出來る。

垂露とは、竪畫の末端の停頓せるものを云ふ。翰林要訣に、首は搶上し、尾は搶下し、露の垂れむと欲して復た縮まるが如しとある。懸針とは、竪畫の末端の尖れるものを云ふ。翰林要訣に、筆上より下り、長針の垂るゝが如しとある。

鴻飛獸駭以下皆書の形容である。點畫に就ての形容もあらう。結體に就ての形容もあらう。各體の書に就ての形容もあらう。大自然の或物を以て書を形容することは、古來の慣習で、形容は何とでもなし得るものであり、其の緊切不緊切は問題であるが、兎も角書を以て大自然に合致し得べきものと信じて居た點には、深く眼を着けねばならない。晉の衛夫人の筆陣圖には、

橫畫は千里の陣雲の如く、隱々然として、其の實は形あり。

點は高峯の墜石の如く、磕々然として實に崩るゝが如し。

掠は陸斷の犀象の如し。

懸針、垂露は又篆書の一體とせらるゝこともあれど、コゝでは筆勢を評せる語なるべし。

牽は萬歳の枯藤の如し。
礫は浪の崩れ雷の奔るが如し。
戈は百鈞の弩の發するが如し。
屈折は勁弩の筋節の如し。

など言つてある。梁の武帝が王右軍の書を龍の天門に躍り、虎の鳳闕に臥するが如しと形容したのは、前に見えて居る通りである。重似二崩雲一は、蔡邕の表に出づ。

起伏は反對の意味の字を一語としたのであらう。衄挫は衄墨挫毫と言つて、衄は墨にいひ、挫は毫にいふ。殊二衄挫於豪芒一とは、同じ一の點を打つにも、深き用意の示されて居るのを言つたのであらう。峰杪と豪芒とは同一意味で、駢儷文であるから、語を殊にして對句を作つたに過ぎない。故に峰杪を豪芒と置き換へても、意味の區別は起らない。峰は鋒の假借で、筆の穗のこと。杪も木の末端、梢と同字也。鴻飛獸駭之資の資字は、姿字の假借である。

況云積二其點畫一。乃成二其字一。曾不レ傍レ窺二尺牘一。俯習二寸陰一。引二班超一以爲レ辭。援二項籍一而自滿。任レ筆爲レ體。聚レ墨成レ形。心昏擬二效之方一。手迷揮二運之理一。求二其研妙一。不二亦謬一哉。

尺牘は草書を通例とす、故に尺牘を善くすといふ語は、草書を善くすといふ意義に用ひらる。

【大意】 世の中には、點畫を組み立てさへすれば、字は出來ると云つて、曾て尺牘の字をよく書かうといふことには、少しも心を傾けず、僅かな時間を裂いて手習ひすることを厭ひ、漢の將軍班超が筆研を投じて起つまでは、安月給取りの小役人に過ぎなかつたとか、楚の項王は書は姓名を記すれば足ると云つて手習ひをしなかつたとかいふ故事を援引して、自分の書の醜惡なのに滿足し、筆に任せナグり書きして、恥かしいとも思はず、執筆運筆の法も知らなければ、臨摹によつて上達する所の方法も心得ない人が多い。斯る徒輩の群つて居る世の中から、適美の書を見出さうなどは、到底望み得べきことでない。

【衍談】 此の一節も亦包愼伯の刪る所てある。書論の上には、格別必要の文句でないこと勿論であるが、書は書家だけの用でなく、筆蹟を善くして、尺牘其の他日用隨時の書を見事に書くのは、自己の快感を惹くと同時に、之を觀る人にも快感を與ふる所以で、美意識の滿足といふことは、人間自然の慾求であるから、何人にも必要であるといふことを知らしむるためには、此の一節は存して置くが宜しい。前に無レ慚二於即事一と云つてあるのとの連絡も考へねばならぬ。

況の一字は、此の場合適切な字の用ひ方ては無い。包愼伯が書譜の文を幼稚蕪穢と誚つて居るのは、此等の點に在るであらうと思はるゝけれども、此の場合之を輕く見て置けば、格別の目障りにもなるまい。

檀弓に曰く、先王の禮を制するや、過ぎたる者は俯して就かしめ、至らざる者は跂して及ばしむと。此れ俯習並びに企學の語の典據なり。

旁窺は、眼を向けること、旁字は傍字に同じである。不旁窺尺牘は、尺牘を書くことなどには、眼を向けもしないといふのである。

俯習寸陰は、一寸解し難い修辭法であるけれども、寸陰は僅少の時間、俯習は書を學ぶことであることが明白である以上、分らぬ文句ではない。四六文には、一句の字數に制限があるから、往々にして修辭に無理が生ずるのである。俯習の俯の字を節を折る《我をまぐる》とまで深く解せなくとも、仰いで手習ひは出來ない筈であるから、俯習はタヾ手習することゝ解すれば、それで宜しい。

班超の故事――班超は班彪の子で、班固の弟である。親孝行な人で、如何なる勞苦も厭はずに家事の手助けをなし、多少の學問もあつた。永平五年《西紀六二年》兄の班固が校書郎となつたので、母と共に隨つて洛陽に至り、家が貧乏であるから、官衙の傭書即ち筆耕生となつて、母を養つて居たが、『大丈夫功を異域に立て以て封侯を取るべし』と言つて、傍人の笑ふも聞かず、走つて人相見の所に往き、相して貰つたら、君は今一書生に過ぎないけれども、燕頷虎頸、飛んで肉を食ふ、此れ萬里侯の相であると言つた。後に蘭臺令史までは進んだが、邊將となるに及び、果して功を西域に立て、功を以て定遠侯に封ぜられ、支那の中央亞細亞經略史上著名の人物となり、和帝の永元十四年《西紀九一年》に年七十一で沒した。

班超傳に筆研の文字が見えて居るから、後漢の初期既に硯が有つたことは、明らかである。研硯は同

晉の夏侯湛曰く、鄉曲の徒一介の士も、急就を諷し甲子を習ふと。北魏の崔浩傳に曰く、浩既に書に巧なりしかば、人多く託して急就章を寫さしむ少より老に至るまで、初より勞を憚らず、書する所蓋し百を以て數ふと。其の他入學の初めに急就章を習ひし記事頗る多し。

用の字。墨を研磨する所以である。毛筆があれば同時に硯が有つたと思ふのは、太早計であるが、軟墨の制が膠墨に更つた際には、既に硯がなくてはならぬ筈である。

楚の項羽の故事は、誰も知つて居る所であらう。藉は名、字は羽である。

心迷ニ擬效之方一の昏は、闇と同用の字で、闇い義である。效字は倣字と同用。擬效とは猶臨摹といふが如き意味であらう。揮運とは筆を馳驅すること、即ち運筆の運の字、揮毫の揮の字、心迷ニ揮運之理一とは、如何に筆を使ふべきものか、使筆の法を知らないといふこと。理の字を餘り重く見ては宜しくない。前句に方字を使つたから、之に對して理の字を用ひたに過ぎない。

學ばざれば字を知る能はず、字を知らざれば以て書すること能はず。此れ自然の勢であるから、古代から字形を知らしむる所の臨本（テホン）《手本》は有つたに違ひない。三代に如何なる臨本が有つたかは不明であるが、秦《西紀前二二一――二〇九》の李斯の倉頡篇は、確かに學書臨本の祖であらうと信ずるのである。日常の間にあふ所の字數を四字句に綴つて、一は以て諷誦に便し、一は以て臨摹の用に充てしめたものらしい。之に次いで著名なのは、彼の史游の急就章《或は急就篇とも》である。其の他前漢より後漢にかけて何々篇とか章とかいふものは、少なからず出來て居る。

東晉の王右軍も小學章を撰した。軍陳の陳の字を陣の字に更へたのは、王右軍の小學章であると、北齊の顏之推は言つて居る。梁の周興嗣次韻の千文《千字文》が行はるゝに及んで、臨本の文句は千文

といふことに相場がきまつて、何々篇とか何々章とか名のつく所の臨本は一切迹を絶つことゝなつた。序に曰ふ。我が仁徳天皇の朝に百濟の博士王仁が論語千字文を獻じたとある所の千字文は、魏の鍾繇の千字文である、と榊原篁洲は言つて居るけれども、信ずるに足らない。

然り、學書の臨本は、千文であつた。陳の僧智永が千文七百本を書したなどは、最も明白に千文が當時の學書臨本の文句であつたことを物語るもので、智永の千文は、當時遍く民間に流布して、大いに學ばれたに違ひない。智永は餘り書き過ぎたので、後には之を書くのがイヤになり、鐵門關を設けて一切の請を斥くることゝなつたのであらう。其の後唐代となつては、懷素も千文を數本書いて居る。孫過庭も千文を數本書いて居る。此れ皆學書の臨本として書いたもので、其の臨本に書かれた書體が即ち當時通行の書體であつたとすれば、當時通行の書體は、草書であつたといふことが、一面から看取せらるゝことゝなるのである。梁の周興嗣次韻殷鐵石揮寫の千文をはじめ、懷素のも、孫過庭のも皆草書であることは、大いに考へねばならぬことであらう。

我德川時代に於ては、草書が通行の書體であつた。印刷物も官公文書も、漢文ものを除くの外は皆草書であつた。草書が通行字體でありすらすれば、字形の穿鑿も、六書に遡つて彼是と八釜しく議論する必要もなくなり、略字と言へば此れほど省略せられた書體はないし、揮寫には無論便である。又藝術書としての眞價も、草書の筆勢が最も之を發揮するに易いやうである。世の識者の眼が之に到らないのは、何故であらうか。又草書ならば、本邦固有の平假名との調和も宜しいのであるが、現代の印刷物のやうに楷書と平假名との組み立てでは、眼に慣れて居ればこそあれ、虛心に第三者の立場から見たならば、恰も木に竹を接いだやうなもので、變なものであらうと思はるゝのである。

然君子立レ身。務二修其本一。楊雄謂、詩賦小道。壯夫不レ爲。況復溺二思豪氂一。淪二精翰墨一者也。

【大意】 然しながら君子の身を立て志を行ふには、務めて其の本を修むべきである。前漢の楊雄は、詩賦文章を作ることは、小道である。苟くも天下を經綸せむと欲する所の壯心の丈夫は、之を爲すことを屑とせないと謂つて居る。況んや詩賦文章よりは、一層世の公益には遠い所の書學一道のために、アタラ心力を銷耗して、人間當に爲すべく爲さゞるべからざる所の事を開却遺忘して顧りみざるが如きは譽むべきことで無い。

【衍談】 此の一節は、尚後の數節に連接して全體の趣旨を構成するのである。包愼伯は、無論之を刪つて居る。

書はモトより天下を經綸するの要具では無い。世務を開き公益を擧ぐる所の道は、外に有る。書學一道に達したからとて、偉い書家とは譽められもせうが、偉い人材で有るとの名譽を荷ふ氣遣ひはな

い。書學の一道に沒頭沒脚して、人間當にすべきの本務を缺いではならぬ。豈獨り書のみならむやて、凡ての藝術は、皆然りである。魏の曹操は、文章は經國の大業、不朽の盛事と謂つて居るけれども、現代の創作文藝の如きものが、天下の經綸に何の補ふ所があらうか。然らば書學は廢すべきかと曰ふに、書學廢すべしと曰ふが如きは、人心の機微を察せざる所の大暴論と謂はねばならぬ。此の事は猶後節に說明すべき機會があると思ふから、此處には言はずに置く。

臨池學レ書、池水盡墨と言はれた張芝でも、書學の一道のみに沒頭して、他を顧りみなかつた人ではない。有道先生と言はれた程の儒學の宗師であつた。臥ても起きても書のことばかりを考へ、間斷なく指は書のために動き、宇宙間の一切が書として見えた鍾繇でも、一面には曹魏の大臣大將として偉勳赫々、鍾繇の本領は、寧ろ此れに在つた。古來の著名の書家は、皆一面に於て事功若くは學問を以て優越の地位を占めて居る、彼等が書の奴隷でなかつたのは、言ふまでもない。

楊雄《子雲》は詩賦を論じて、『雕蟲篆刻《の小技》は壯夫は爲さず』と言つて之を誚つて居るけれども、而も自ら詩賦を作つて多くの名篇を傳へて居る。無論楊雄は學者の事業としても、多くの撰述をなして、後人を益して居る。書學の一道の如きも、之がために心力を褫はれては、益なき事であるけれども、之を樂しむのならば、人間の本能たる美意識の滿足を得る所以で、曾て害なきのみならず、却つて人品を高うする所以てある。人には精神の餘裕がなくてはならぬ。四六時中物質の要求に逐ひまくられて居るやうな人に、精神の餘裕が有らう筈が無い。精神の餘裕なき人は、乃ち人品の鄙野なる人てある。

杜詩、顧侯運鑪錘、筆力破餘地。

毫釐は細小の意、釐は釐の假借、其の假借例は、漢書律歷志に見ゆ、音は里之切音りてあるが、豪と疊韻語として、莫袍切マウても宜しい。毫毛と同語であらう。

夫潛レ神對レ奕。猶標二坐隱之名一。樂志垂レ綸。尚體二行藏之趣一。詎若功定二禮樂一。妙擬二神仙一。猶挺二埴之罔レ窮。與二工鑪一而竝運上。好異尚レ奇之士。翫二體勢之多方一。窮レ微測レ妙之夫。得二推移之奧賾一。著述者假二其糟粕一。藻鑒者挹二其菁華一。固義理之會歸。信賢達之兼善者矣。存レ精寓レ賞。豈徒然與。」

【大意】昔は精神を專ら圍碁に潛めて坐せる隱者だと高く自ら標して居た人もあつた。又綸を垂れて魚を釣り、窮達を忘れて自已の志尚を樂しんだ人も有つた。精神の樂境を拓開する所以のもの、豈獨り書のみならむやであるから、圍碁でも、釣魚でも、其れは問ふ所で無いが、寂靜冲虛の樂みばかりが人間の價値でもあるまい。世間的に活動して事功に振ふのも、亦人生の一快事であらねばならぬから、動的には天下の政柄を握つて、禮樂制度を定め、靜的には神仙に齊しき心の妙境に安住したら、

一層面白からう。英雄頭を廻らせば即ち神仙といふことがある。仙と俗とは、一紙の隔たりに過ぎない。心の靈妙なる作用は、猶挺埴の窮まりなくして、工鑪とゝもに並び運するがごときものであつて、一面に固着して、他の一面に遷ることの出來ないやうな融通の利かぬものでは無い。異を好み奇を尚ぶの士は、書の體勢の多方面で變化錯綜なのを翫賞するであらうが、微を窮め妙を測るの夫は、啻に外面に顯はれた體勢の變化ばかりでなく、更に一層深い所に着眼して、用筆の性情、使轉の血脈をも味ひ分けるであらう。文章にて書きあらはされた筆法や書評の如きは、皮相の說明に過ぎまいけれども、眞に書を鑑賞するの能力ある人は、心眼に徹底して領會する所がなくてはならぬ。此れ固より義理當然の歸著點で、賢達の士の行藏顯晦兼ね善くする者のなし得る所である。古人が精神の樂境を書によりて拓開し、心と手とを融合せしめたのは、偶然であらうや、偶然ではない。

【衍談】　此の一節も亦包愼伯の刪る所であるが、此の一節は、殊に文義の晦澁なるを覺ゆるのである。今大意を推して如上の義譯を試みた。果して孫過庭の意に合するか否かは、孫過庭を地下より起して之を聞くより外に仕やうがない。

坐隱とは王坦之の故事で、王坦之《官中郎に至る》は、圍棋を以て坐隱となし、之を以て心を寂靜境に游息せしめ、俗界の煩累を忘れて居た。坐隱とは、屋中に坐つて居る隱者といふ意味で、謂はゆる市隱といふのと同類の語であらう。普通の隱者は、多く山中に在るものであるが、俗界の煩累を避くるのが、隱者の目的であるとしたならば、如何なる俗界の事にたづさはつて居ても、其の俗界の煩累を忘れて居る瞬間は、即ち隱者と同じ氣分で居るのであるから、隱者の名を下し得られよう。

樂志垂綸は、太公望の故事もあるが、此處では漢の嚴子陵の故事としたい。嚴子陵は後漢の始祖光武皇帝が猶民間に在る時の友であつた。子陵は綸を江濱に垂れて志を樂しんで居たが、光武の帝たるに及んで、子陵を徵して官を授けようとした。子陵は辭して初めは至らなかつたが、屢々徵さるゝに及びて已むを得ずして京師に至り、光武に謁した。光武大いに喜び、宮中に於て食を共にして舊を談じ、夜は光武と牀を共にして臥した。子陵は光武の天子であることを忘れ、昔の友人のつもりで、些の芥蒂する所もなく、脚を光武の腹上に加へて眠つた。光武は官を授けて引き止めようとしたけれども、子陵は固辭して受けず。依然江濱に綸を垂れて世を終つた。

行藏は窮達と凡そ同意の語、達すれば志を行ひ、窮すれば之を藏するを云ふ。論語にある所の語である。古人は出處進退を大節として、苟且に官に就き祿を受くることを爲さなかつた。貧乏は寧ろ彼等の誇りでこそあれ、恥ではなかつた。

挺埴は陶工、挺は抽延切音テン、摶の假借也。周禮に摶埴之工陶旊とある。摶きたる埴土の義であらう。工鑪は鑪工の倒語、鎔鑄の工人也。小徐曰く、埴の範に在り金の鑪に在るが若しと。此れ埴鑪對文の例也。挺埴之罔窮云々は、陶工や金工が種々の器を造り出すのを言つたのである。

鑪錘の語は非子に見ゆ。鎔錬を鑪とし、鍛撃を錘とす

奥賾は、奥祕◉妙諦といふが如き意味であらう。賾(サク)字は幽深の義に用ひらる。得二推移之奥賾一とは、書風の推移に眼力の深く到るを云ふ。

著逃者云々——莊子天道篇に曰く。桓公書を堂上に讀む、輪匠輪を堂下に斫る、椎鑿を釋(オ)いて上り、桓公に問うて曰く、敢て問ふ、君の讀む所は、何の言とかする、公の曰く、聖人の言なり、曰く、聖人在りや、公の曰く、既に死せり、曰く、然らば則ち君の讀む所は、古人の糟魄なりと。魄は粕の假借である。糟粕は酒滓のこと、故に古字は米扁でなくて酉扁であつた。

藻鑒は鑑識と曰はむが如き意である。藻は品藻、品定めすることである。

奕は奕棋、西京雜記に杜陵杜夫子善二奕棋一、爲二天下第一一と見ゆ。本字は弈であるといふ說もある。

菁華は精華と略同義の語である。唐書に、論語は六經の菁華なりと見えて居る。又節末の與字は、歟字の假借である。徒然は偶然に同じ。不意の出來事を徒然偶然といふ。

而東晉士人。互相陶淬。至二於王謝之族。郗庾之倫一。縱不レ盡二其神奇一。咸亦挹二其風味一。去レ之滋永。斯道愈微。方復聞レ疑稱レ疑。得レ末行レ末。古今阻絶。無レ所二質問一。設有レ所レ會。緘祕已深。遂令下學者茫然莫上レ知二領要一。徒見二成功之美一。不レ悟二所レ致之由一。」

【大意】東晉に至るまでの士人は、一般が書學旺盛であつたから、互に相薫陶淬勵して、王氏謝氏の一門、郗氏庾氏の人々は、縱し其の神奇を盡くすまでには、達して居なくとも、皆一樣に書學の風味を酖んで、書に於ける心解が有つた。然るに東晉の時代を去ること永きに隨つて、斯道は漸次衰微して來た。此の時に方つては、書に從事する人が如何はしい書論を聞いて、其の如何はしい書論を稱譽し、末を得て末を行ひ、古今阻隔して、書學の根本に向つて心解を得ようとの志を抱く者が無くなつた。たま〳〵書學の眞髓を心に領會して居る者が有つても、其の人は、深く之を緘祕して、人に語らないので、遂に世間の書を學ぶ者をして、茫然として書學の要領を知らざらしむるに至つた。徒らに出來あがつた書の作品の美を目擊するばかりで、如何にせば此の妍美な作品が得らるべきかといふ根本理由に就ては、何の悟る所も無い。

【衍談】陶淬の淬字は、染と釋文した人もあるが、原本の草體は、淬としたが宜しいやうである。淬勉、淬勵と熟する字で、染也と說かるゝけれども、本義は及物のカネアゲするといふ意味であるから、本義の轉用と見たが宜しからう。

逾は愈の假借、縱も設もタトヒと訓むべし。挹は斟也、クムと訓むべし。阻は岨沮に作るも同意、遮障の義である。

或乃就二分布於累年一。向二規矩一而猶遠。圖レ眞不レ悟。習レ草將レ迷。假令(イサヽカ)薄解二草書一。

粗傳隸法。則好溺偏固。自閡通規。詎知心手會歸、若同源而異派、轉用之術、猶共樹而分條者乎。

【大意】 間には分間布白即ち文字の間架結構を整ふる上に就て、數年の功を積んで居る人も有るには有るけれども、書に於ける心解が無いから、眞の規矩に合するには、まだ〳〵遠い。眞書を上手に書かうと圖つても、正しい眞書の書き方を悟ることも出來ず、草書を習つても、心解を得ないから、いろ〳〵に迷つて居る。假令ひ薄か草書を解し、粗隸法を傳へた人が有つても、好んで偏固に溺れ、自我の念が强くて、形の上に拘はれて居るから、おのづから規矩に阻碍せられて、融通が利かない。此の輩がどうして心と手との會歸するのは、源を同じうして派を異にする如きものであり、筆の使轉運用の術は、猶樹を共にして枝を分つやううなものであることを知らうか。知りはせない。

【衍談】 包愼伯は、此の一節の詎知心手以下を刪つて居る。無用の贅語即ち腴詞であるといふのであらうが、吾人は之を刪りたくない。此の一節は世の書を學ぶ人が本を忘れて末に走る所の弊を誚つたもので、心と手とを別物と考へたり、筆の執使轉用も歸する所は一であるといふことを知らなかつたり、書學の根本に識力の到らないのを戒しめたのである。

偏固は偏見固陋といふ二語を約して一語となしたものと見た方が分り易い、熟字でなくて熟語である

から、一字〳〵に切り離しても、各字固有の意味は失はない。此の『偏固に溺るゝ』といふことは、書家の最も戒しむべき點であらねばならないけれども、概して世間の書家は、此の弊に陷り易いやうである。

分間布白は又分行布白とも言はる。分行布白と云へば、一幅の字配り、即ち章法のことに誤解せられ易いから、間架結構といふ意味なら、分間布白の方がよろしからう。字には畫の多いものと少ないものとあるから、一概には言はれないが、字形を整へて美感を惹く上からは、此の分間布白即ち筆畫の空處と實處筆畫と筆畫との間隔に就て、適當な按排をなすといふことは、餘程氣を注けなくてはならない。無論それが有心故造では、却つてイヤ味となるから、自然に出たものでなくてはならないけれども、自然に出づるまでには、頗る習熟の巧を積まねばなるまい。篆刻家では、篆字を印面に布くに、濶處は牛を臥さしむべく、狹處は髮を容れしめず、など言はれて居る。又包愼伯は、茂密と凋疎といふことに頗る意を用ひて、凋疎を惡しとし、茂密をよしとして居る。閡は五該切音ガイ、阻碍の意である。易の蒙卦の注に『退けば險に困しみ進めば山に閡す』とある。闕と釋文した人もあれど、原本の字形闕とは見えない。

殆は近也、檀弓に曰く、孔子謂爲俑者、不仁、不殆於用人乎哉。

加以、趨便適時。行書爲妥。題勒方畐。眞乃居先、草不兼眞。殆於專謹。眞

便は變或は吏と釋文せられ、妥は要と釋文せらる。

不レ通レ草。殊 非二翰札一。

【大意】 便に趨(オモム)き時に適するには、行書を學習するのが妥當であらう。題勒方幅に揮寫するには、眞書が先だつ需要である。草書ばかり書けて眞書が書けなくては、專謹に殆(アヤ)うくて、爛漫の失を招かう。而も眞行ばかりを學習して、草書が書けなくては、翰札(テガミ)をよく書く所以でないのである。

【衍談】 題勒の勒は刻勒の勒で、恐らく刻字の假借であらう。故に題勒とは金石碑版の文字のことであらう。昌は幅の假借であらう。包愼伯は、幅字に訂正して居る。方幅とは、榜額の類の大字を要するものであらう。此等は皆眞書を以て書くのが普通である。

碑面に書する文字は隷楷といふことに古來殆んどきまつて居たが、唐の僧懷仁集字聖教序以來、唐代には、行草書の碑が幾らも有る、殊に李北海の如きは、專ら行草書を以て碑を書いて居る。孫過庭當時、一般には行書が行はれ、草書は專ら尺牘の用であつたことが、此の一節の叙述を見て明白である。

が、楷書と行書、行書と草書との間に截然たる界畫を設くることは、殆んど不可能であるかのやうに思はる。楷書と行書との見分けが既に困難な上に、行書と草書とを見分くることは、更に一層困難である。僧懷仁集字聖教序並に吳文斷碑の如きも、行書といふことに言はれては居るけれども、モト王右軍の尺牘の字を集めたのであるから、どうしても草書として見るべき字が出て來る。王右軍の尺牘にも、送梨帖や仙禽帖の如く楷書で書いたものも稀には有るけれども、概しては皆草書である、虞世南の筆髓といふものに『行書の體は、ホゞ眞に同じ』と言つてあるが、果して信ずるに足るべきものであらうか。ホゞ眞に同じであるならば、眞に併せて然るべきものではあるまいか。世の書家先生等は、何を標準として楷書と行書、行書と草書との間に界畫を立てんとするのであらうか。世に草書字典といふものはあるが、行書字典といふものは無い。たま〳〵行草字典といふものが有つても、此れが行書、此れが草書とシルシをしてないのはをかしい。卷菱湖などは、行書と草書との間に更に破體といふ一體があるとさへ言つて居るけれども、吾人の腑に落ちかぬる所である。中村不折君などは、近時新疆地方發見の古寫經卷の書體は、行書と草書との中間のもので、何と名づくべきものであらうかなど喋々と言つて居るけれども、吾人の眼を以て之を見れば、草書たること明々白々何の疑ふべき所もない。故日下部鳴鶴翁は、行書の結體に就いて確たる所信が無いからとて、楷行草三體千字文の臨本(テホン)の揮寫を拒まれたといふやうなことも聞いて居る。若し事實であるとすれば、鳴鶴翁は、吾人と所見を同じうするものである。孫過庭も此處では明白に行書と言つて居るから、行書といふ一體が有ることは認めて居たに違ひあるまいけれども、之に接したる後節の文章には、唯眞書と草書とを對比して、其の書き方を說いて居るばかりで、行書に就ては、何とも言つて居ない。此れは何故であらうか。マサカ形すら成せば、其れが行書であるから、行書を書くに就ては、何等の用意も要せないとい

ふのでもあるまい。吾人は久しく之に就て疑を抱いて居るものであるから、筆の序に吾人の意見を發表して置く。

吾人をして憚りなく言はしむるならば、書は唯正體と略體との二あるのみと言ひたい。許愼は其の說文の序に於て、秦の書に八體ありと言つて、其の八體の名目を擧げて居るけれども、刻符●蟲書●摹印●署書●殳書の五を一體として獨立せしむる資格なきものとして之を除去すれば、大小篆と隸書ばかりが殘ることゝなる。而して大篆は其の前代の通行字體で、秦代の通行字體でないとしたならば、小篆が秦代の正體書で、隸書が同じ秦代の省略體であることは、言ふまでもあるまい。而して漢代では隸書が通行の正體書であつたから、之に對して草書が省略體として行はるゝことゝなつたのである。斯く看來るときには、行草は共に省略體として一般に通行したもので、行書と草書とを各自獨立せる書の一體として認むることは、頗る無意味なことゝなるのである。中村不折君所藏の漢代《?》草寫經の如きも、其の標題は必ず妍麗なる八分隸書で書いてある。此れ明かに當時の正體書であることを示したもので、之に對するものが草書であることは、言ふまでもない。許愼は秦代の書體として得體の分らぬものを五ッも擧げて居る。此の物好の眼から見たならば、行書の名目も喜んで之を擧ぐべきであるのに『漢興つて草書あり』と言つて居るのみで、行書に就ては、何とも言つて居ない。此れ行書が書の一體として獨立せしむるに足らないと認めたゝめではあるまいか。許愼の說文は後漢の安帝の建光元年《西紀一二一年》に其の子許冲の手によつて奏進せられた。此の時既に行書があつたことは明白であらう。中村不折君所藏の後漢代の缶器には、歷として今日見るやうな楷書が書いてある。許愼は宜しく此れをしも書の一體として之を擧ぐべきであるのに、其の之を擧げないのは、亦隸書の一風として之を目したからのことであらう。

前漢末王莽時代の書の六體は、古文、奇字、小篆、佐書即秦隸、繆篆《摹印》鳥蟲書《幡信》で、漢書文藝志には、之を六技と謂つて居る。

書風と書體とには區別がなくてはならぬ。風は風姿、體は體格である。體格の相異あつてこそ、須らく書の一體として之を目すべきものであるとしたならば、書體は百千を以て數へても猶數へきれないことになるであらう。各人の書は書の風姿各々同じからず、此れをしも各一體として目すべきものであらうか。書は又應用の方面によつて、各々風姿を殊にするものである。印篆は言ふまでもなく、傘の文字、法被の文字、工匠製圖の文字、劇場の看版の文字、蕎麥屋の看版の文字、看來れば各々特殊の風姿を有して居る。此れをしも書の一體を以て之を目して、傘體●法被體●製圖體●劇場看版體●蕎麥屋看版體と言つたら、世間は之を是認するであらうか。故岡田正美君は、各書家の特異の書風を取つて、シッカリ體とか、無茶若體とし、若くは、行書と草書との間に破體といふ一體あるなどいふ人は、岡田君を笑ふ前に先づ自ら笑はねばならないではなからうか。

更に考ふるに、圓筆の篆書から一足飛びに方筆の隷楷に移るといふことは、餘りに突然のやうである。藁書若くは藁草といふ語は、既に前漢の文獻に見えて居る。此れは今でいふ草藁で、文章の下書といふことに解釋せられて居るけれども、其文章の下書なるものが、嚴格な方筆の隷楷でなく、省畫捷寫の圓筆の書であつたので、草書といふ名も此れから出たものであるかも知れない。草藁の草字は、創《刱》字の假借で、草創の意味であると說かるゝけれども、草若くは藁は、蓆として下に藉くものとの意味で呼ばれた名と解釋しても、不都合ではあるまい。下に藉くもの即ち下書であり草藁であるのである。果して然らば圓筆の草書は早く既に篆に次いで生れたものであるけれども、其れが正體書として公けに認められなかつたために、秦若くは漢の八體書の中に加へられず、許愼も亦之を一體として目せなかつたのであらう。草書の筆畫には、隷楷より來らずして、直ちに篆から來つたものが多いばかりでなく、流沙墜簡によつて研究して見ても、篆から草となり、草から隷書に移つた痕迹が歷々と指摘せらるゝのである。行書の如きは、隷楷の捷筆であること勿論であるけれども、草書が隷楷の捷筆として生れたものとは首肯し難い。

此の一節に冠せられたる『加以』の二字は、端を更むるの詞として、餘り重く視ないがよい。以は一字で思ふといふ意味に用ひらるゝことがある。加は加之の加と見ればよろしい。

眞以二點畫一爲二形質一。使轉爲二情性一。草以二點畫一爲二情性一。使轉爲二形質一。草乖二使轉一。不レ能レ成レ字。眞虧二點畫一。猶可レ記レ文。廻互雖レ殊。大體相涉。

【大意】 眞書は點畫が其の形質で、使轉が性情である。草は點畫が性情て、使轉が形質である。故に草書が使轉の法に背いたら、字を成さないが、眞書に點畫を缺いても、猶文章を書記することが出來る。眞書と草書とを廻互して之を對比するときは、殊なつた點があるけれども、大體に於ては、相涉つて居るから、偏習の不可なるは勿論、並習して初めて兩者を兼ね善くするのである。

【衍談】 此の一節の草乖使轉以下は、包愼伯の刪る所である。而して前の四句に就ては斯う言つて居る。

呉郡《孫過庭》の眞草を論じて、點畫と使轉とを以て形質と性情とに分屬せしめて居るのは、其の論至つて精《密》である。蓋し點畫は力めて平直ならんことを求むるものであるから、板刻となり易い。板刻であるならば、則ち之を使轉無しと謂ふべしである。使轉は、力めて姿態を求むるものであるから、偏軟に陷り易い。偏軟であるならば、則ち之を點畫なしと謂ふべきである。其の致は則ち途を殊にすれども、歸着點は相同じく、其の詞は則ち互文にして意を見はしてある。眞と草とを別にして說明してあるものと誤認してはならぬ。

即ち使轉と點畫と相拯へば、眞書に於ては板刻の書となるの弊を免かるゝを得べく、草書に於ては偏軟に陷るの弊を免かるゝを得べしといふのである。更に言へば、板刻の眞書は、書として觀るの價値

史記陳平世家、更以惡草具進楚使、集解、粗草は粗也、草書或は雙聲、草書の義か。佐は佐隷即ち屬官の義、之を徒隷と解するは非也、孫星衍曰く、草は篆より生じ、眞は草より出づ云々。

なく、偏軟の草書も、亦書として觀るの價値が無いと謂ふのである。要は性情即ち筆意をあらはすのが藝術書の眞價の存する所で、性情なきの書は、字ではあつても、書ではないと言ふのであらう。草が使轉の法に背いては字を成さないのは、聞こえて居るが、眞に點畫即ち形質がなくても文を記するに足ると、は、少々聞こえ難い文句である。性情は筆致を出だす所以であるから、筆致がなくとも形質だにあらば、字ではあらうが、形質がなくても字であるとは受け取りにくい。此れ等が駢儷文の短所で、強ひて對句を作らうとするから、斯ういふ無理が出來るのである。包愼伯が草乖使轉以下の句を刪つて居るのも、尤もなことであるが、孫過庭も、末句に於て廻互雖レ殊、大體相涉と言つて居るから、深く咎むるにも當るまい。

眞書の弊は板刻となり易く、草書の弊は偏軟に陷り易いといふ包愼伯の意見には、傾聽の値があらう。世には板刻の眞書や偏軟の草書を書いて喜んで居る所の書家が隨分と見受けらるゝやうである。廻互は猶交互といはんが如きの意味であらう。

使轉の解は、後段の文中に出て來るから、此處には說明せずにおく。

故亦傍通二篆一俯貫二八分一包二括篇章一涵二泳飛白一若豪氂不レ察、則胡越殊レ風者焉。至レ如二鍾繇隸奇、張芝草聖一。此乃專二精一體一以致二絕倫一。

【大意】 各體書を交互に對比すれば、殊なつた點は無論あるけれども、大體に於ては相涉つて居るものであるから、書を學ぶ者は、獨り眞草ばかりでなく、亦傍ら大小の二篆に通じ、八分に俯貫し、篇章を包括し、飛白に涵泳して、其の短長を味ふが宜しい。が、若し此等の書體を觀るに就て、豪氂の極小部分の差異にまで眼を着けて、深く察することが出來なかつたならば、北方の胡と南方の越と風俗習慣を殊にして居るやうに、トンダ懸け離れた字を書き出すやうなことになるであらう。然り各體書に涉つて味つて見なければならないとはいへ、鍾繇の隸奇・張芝の草聖の如きに至つては、乃ち精力を一體に專らにして以て絕倫を致したものであるから、一概には言へない。

【衍談】 此の一節も亦包愼伯の刪る所である。

八分書に就ては、前に述べたやうに種々の意見があるけれども、波磔のある隸書で、後漢時代の正書と見れば、大凡そ間違ひはあるまい。何故八分といふ名目が起つたかといふに就ても、前人の說く所區々であるが、畢竟するに無用の詮索であらう。そも〳〵八分といふことは、最初誰の言ひ出した所であらうか。後漢の蔡邕の女の蔡文姬の石室書勢に初めて八分といふ字面が見えて居るけれども、信ずるに足らないものであらう。之に次いでは、唐の唐玄度の十體書論であるけれども、餘計なオセッカイを以て後人を惑はすものであるから、抹殺して然るべしであらう。但し此の八分は八分楷とあるから、今の楷書であると言ふ人もあるけれども、確據あるわけでもあるまい。兎まれ孫過庭が漢隸を

晉の成公綏、劉劭、衛夫人等皆八分と言つてふことは居る。王右軍題筆陣圖後にも見えて居るが、此は信ぜられない。

明の顧絳曰く、小學は古よりこれあり、李斯以下號して三蒼と、而して急就章最も世に行はる、南北朝より以前は、初學の童子之を習はざるはなし、千字文は齊晉の世に起る、後の讀者三蒼の難きに苦しんで、千字の易きを便とするまでなり。今に至るまで小學家恒用の書たり。石林燕語に曰く、急就章は二千二十三字と、今の紹聖本は千三百九十九字なり。

指して八分と言つて居ることだけは、明白である。何となれば、二篆と篇章との間に八分を置いて、後の鍾繇の書を言ふ所に至つてはじめて隷奇と言つて居るからである。而して鍾繇の書いた隷書が今の楷書であることは、孫過庭の疑はざる所で、吾人も亦之を疑はざる者である。唐の六典の五體書は古文・大篆・小篆・八分・隷書である。張懷瓘の十體書斷にも、八分・隷書・行書・草書と次第して、楷書とも眞書とも言つて居ない。八分といふことは、唐人が言ひ出したものらしい。篇章とは何であるか。章が章草であることか。又孫過庭は、何故に篇と章とを一緒にしたのであらうか。孫過庭が篇と章とを一にして說いて居る以上は、篇と章とが同じものであるのは、明白であると謂はねばなるまい。同じく一の草書に過ぎないのに、何故に篇草とか章草とか區別したる名目を以て呼ばるゝことになつたのであらうか。前人は章草の名義を說いて、漢の章帝の造る所とか、又は章程書の省語であるとか言ふのであるが、モトより臆測の談に過ぎない。

吾人は前に秦の李斯の倉頡篇以下次ぎ〳〵に世に出た何々篇とか何々章とか呼ばるゝものは、臨本（テホン）の文句を綴つたもので、其の臨本に書かれて居る書體が、當時通行の書體で有つたであらうといふことを言つて置いた。張懷瓘の書斷に王愔を引いて曰く。漢の元帝《西紀前四八——三三》の時、史游急

宋の羅願、清の孫星衍、四庫全書提要、皆此の說也、

就章を作り、隷體を解散して之を粗書す。字の梗槩を存して、隷の規矩を損す。縱任奔逸、速に赴き就るを急ぐと。章草とは、急就章に書かれた書風の草書といふ意味であるものと吾人は斷定したい。而して急就章は又急就篇とも呼ばる。此れ一には篇草とも呼ばるゝ所以ではあるまいか。

許愼の說文の序に『漢興つて草書あり』と有るからして、前漢の初まりから草書は有つたものと信ずる人があるやうであるけれども、それは太早計であらう。漢の尉律に八體書を以て士を試むる所の八體は、秦の八體であつて、漢の八體でなかつたならば、八體を以て試みられねばならないのに、若し漢初から草書の一體が有つたことは、漢の代となつて位の意味に解釋して置きたい。若し筆書の省略せられたのが草書であるとすれば、思ひ切つて筆畫の省略せられたのは、龜版文に最も多い。然らば殷代既に草書があつたと謂はねばならないけれども、之を以て草書と目することは、强辯であらう。筆畫の連綿を以て草書であるとして、古籀文に既に筆畫の連綿せるものがあると說く人もあるけれども、此れも强辯に過ぎない。晉代以後唐代までも、普通の草書の外に章草といふ別體が有るとして、之を認めて居たのは、事實である。乃ち事實ではあるけれども、實は餘計な事である。獨草と連綿草とを別に一體として目せない以上、章草を以て別に一體とすることも、亦實に無用でなくてはならぬ。今見る所の晉の索靖の出師頌は、章草を以て目せらるゝものであるけれども、普通の草書の末書を八分風に磔《右挑》したもの

に過ぎないではないか。即ち書風が聊か變つて居るといふまでて、體格は全く以て相同じてある。飛白は戲書なり、以て書體とするに足らずと言つて置かう。但し書家が之を試みて居るのは事實である。

伯英不レ眞。而點畫狼藉。元常不レ草。而使轉縱橫。自レ玆已降。不レ能レ兼レ善レ者。有レ所レ不レ逮。非レ專レ精也。

【大意】 張芝の草書を作るには、眞書を作るの法を以てして、點畫が狼藉して居る。此れ張芝の草書に性情ある所以てある。鍾繇の眞書を作るには、草書を作るの法を以てして、縱橫に使轉してある。此れ鍾繇の眞書に性情ある所以てある。此れ張芝は眞書を作らずと雖も、猶眞書に心解を有し、鍾繇は草書を作らずと雖も、猶草書に心解を有して居るためであるが、此れは獨り張芝と鍾繇と唯二人のみの能くする所で、二人より以後の人に在りては、眞書を作らずして草書に心解を有し、草書を作らずして草書に心解を有するといふことは、到底能くする所て無い。而も草書に心解を有せざれば、眞書を作る能はず、眞書に心解を有せざれば、草書を作る能はざるものであるとしたならば、二者を兼ね學びて之を善くとするより外に方便は有るまい。故に眞書か草書か孰れかの一方に精力を專らにして之を學ぶといふことは、後世の人には、勸めたくも無い。

【衍談】 包愼伯は、此の一節の自玆已降より以下を刪つて居る。此れ意味の稍晦澁なる所あるがためであらう。今孫過庭の意を推して、如上の義譯を試みた。包愼伯は言ふ。

余版本の閣帖を得てより、篤く太令《王獻之》の草《書》を嗜み、乃ち吳郡《孫過庭》の『眞にあらずして而も點畫狼藉たり』の一語の無上の祕密なることを悟れり。華亭《董其昌》の覆刻せる澄清堂帖に、右軍の又頃水雨以復爲災彼何似の兩行十一字を見るに及びて、其の蟲網の壁に絡へるが如くにして、勁にして復た虛なるを嘆せり。眞に吳郡の謂はゆる『妙を自然に同じくして、力運の能く成す所に非ず』といふものなりと。

專ら眞のみを學べば、板刻に陷り易い。故に草の使轉を以て之を拯はねばならない。專ら草のみを學べば、偏軟に流れ易い。故に眞の點畫を以て之を極はねばならない。二者兼ね學べば、互ひに其の弊處を拯ふことが出來る、といふのが孫過庭の意の在る所であるのを察せねばならぬ。非專精也の非字專字との間に可の一字の省かれたるものとして讀むを要す。四六文なるがために省いたのである。

雖レ篆隸草章工用多變。濟成厥美。各有レ攸レ宜。篆尙婉而通。隸欲レ精而密。草貴レ流而暢。章務レ檢而便。然後凜レ之以風神。溫レ之以妍潤。鼓レ之以枯勁。和レ之

念は驗と同字也。

以閑雅。故可達其情性。形上其哀樂。驗燥濕之殊節。千古依然。體老壯之異時。百齡俄頃。嗟乎。不入其門。詎窺其奥者也。

【大意】 或は篆書、或は隷書、或は草書と、其の工用は多變であるけれども、各々特殊の味があるから、之を上手に書きこなすことが出來れば、各々宜しきに適する所がある。篆書の筆勢は婉にして通ならんことを尚び、隷書の筆勢は精にして密ならんことを欲し、草書の筆勢は流にして暢ならんことを務むべきである。然る後に之を凜乎として生氣あらしむるに、風姿神采を以てし、之を溫しからしむるに、妍美遒潤の筆致を以てし、之を鼓動せしむるに、枯勁の筆致を以てし、之を和ぐるに、閑雅の筆致を以てしたならば、書の性情に達して、人間の哀樂を象徴せしむることが出來るであらう。四季の變化による所の寒暑燥濕の往來は、千古依然で、今も猶古の如しであるけれども、人生の幻滅は、爐上の雪の如きものである。其の短命なる人生をして、不朽ならしむるものは、人心の象徴たる所の書であらうではないか。嗟乎其の門に入らずしては詎んぞ其の奥を窺ふことが出來よう。書の眞價値は門外漢の知り得る所で無い。

【衍談】 包愼伯は、此の一節の形其哀樂以下百齡俄頃に至る二十四字を刪つて居る。無用の形容文句であうけれども、既に『其の哀樂を形すべし』と言つて、書學の上には關係が無いとでも思うたのであらう。

た以上、之に接して此れだけの襯句は必要ではあるまいか。性情は書の性情であらうけれども、哀樂は人の哀樂即ち人の性情であらう。孫過庭は書の性情と人の性情とが一致融合し、書は人を忘れ、人は書を忘れ、人か、書か、書と人との間に一髪を容るゝの隙も無いやうになつた所が書の蘊奥極致であると見たのであるが、此の蘊奥極致は、尋常人の領會し得る所でないので、最後に『其の門に入らずんば、詎んぞ其の奥を知らんや』と言つたに違ひない。天地は千古依然であるけれども、人生は百歲も俄頃で、實に果敢ないものである。然り、人生は果敢ないものであるけれども、自然を憧憬して自我の念を去れば、よく自然と一致することが出來る。自然と一致すれば、人も亦一の自然である。而して自然は千古不朽であるとしたならば、人も亦千古不朽であらねばならぬ。或は誇張の談であるといふ人もあるであらうけれども、一切の藝術の眞意義が此の點に在るのは、爭はれないことであらう。若しさうでなかつたならば、人間に藝術といふものゝ生れ出たことが無意義なことゝならねばなるまい。人間が藝術を要求するといふことが、贅澤であり奢侈であると謂はねばならぬことになるであらう。

篆隷草章と連言して、眞を逸して居るのは、逸したのではなく、隷を以て眞としたのであらう。前に『元常は專ら隷書に巧なり』と言つて居る所の隷書が眞書であることは明白であるから、此處の隷も亦眞と見るべきである。章草を擧げて行書を逸したのは、如何なる意味か分らぬけれども、文章の都合て斯

く言つたまでゝ、深い意味はあるまい。要は各書體に渉つて汎く書を說いたもので、書を說くのが主意で、各體書の特色を說くのが主意では無いと見るべきであらう。

婉にして通の通字は、透と同字。透は透徹で、闇若くは濁の反對の意味として見るべきである。

務險而便の便は、便易(イ)の意味、險を救ふに便を以てするの意味で、險の反對が便であると解してよろしい。此の句の而字は、他の句の而字と用法が違つて居る。

咎は密字の異文と見て宜しい。閑は閒の假借也。

又一時而書。有レ乖有レ合。合則流媚。乖則彫疎。略言二其由一。各有二其五一。神怡務閑一合也。感惠徇知二合也。時和氣潤三合也。紙墨相發四合也。偶然欲レ書、五合也。心遽體睘一乖也。意違勢屈二乖也。風燥日炎三乖也。紙墨不レ稱四乖也。情怠手闌五乖也。乖合之際。優劣互差。得レ時不レ如レ得レ器。得レ器不レ如レ得レ志。若五乖同萃。思遏手蒙。五合交臻。神融筆暢。暢無レ不レ適。蒙無レ所レ從。

【大意】同じく字を書するにも、二ッの場合が有る。即ち心と手とが相合する場合と心と手とが相乖く場合とである。手と心とが相合するときには、流麗妍美の合作が出來るけれども、心と手とが相乖いた場合には、凋疎な惡作が出來る。試みに此の二ッの場合を言つて見れば、各々五ッの場合がある。

《一》心と手と相合する場合

1。精神が怡和して俗務の閒なる時。
2。智慧即ち理智の働きの明瞭なる時。
3。季候が溫和で、空氣の餘り乾燥せざる時。
4。紙と墨とがよくなじんで筆がすらゝゝと滯りなき時。
5。書いて見ようと思ふ氣になつて、氣が進んだ時。

《二》心と手と相乖く場合。

1。心が遽忙(アハタヾ)しくて、體(カラダ)が落ちつかない時。
2。意思が心のまゝに活(ハタラ)かないで、屈託した時。
3。天氣がよすぎて、空氣の乾燥しきつた時。
4。紙と墨とがよく馴染(ナジ)まないで、筆の走りのよくない時。
5。精緒がけだるくて、手を壓へつけられたやうな氣分のする時。

心と手と相合した時と心と手と相乖いた時の作品の優劣には、大層な差等があること勿論であるが、大體時を得るよりは器を得たよりは志を得た方がよろしく、器を得たよりは志を得た方が宜しい。志を得るとは、心

志が滿足して、胸中何等の缺陷をも覺えぬ時である。精神の樂境は此に於てか拓開せらるゝのである。若し心と手と相背く場合が五ッ同時に萃(アッ)まつたならば、氣分は塞がり手は重くて、サッパリいけない。若し心と手と相合する場合が五ッ同時に臻つたならば、精神融和して筆が暢ぶのである。筆が暢べば思ひのまゝの氣に入つた書が出來るが、筆が重くては、迚も仕やうがない。

【衍談】　此の一節は孫過庭の書譜中最も著名な文句で、書學の書にもよく引かるゝ所である。無論此處に言つてある所に間違つたことは、少しもない。如何なる名人大家でも、其の作品は必ず一列平等に合作ばかりであるとは言はれない。中には不出來なものもあるに違ひない。其の不出來なのは、何か其の時に心と手とが相合しかぬるやうな事情が有つたものと想像せねばならないのであるが、苟くも名人大家を以て目せられ、若くは之を以て自ら居る人であるならば、自分の意に適せざる所の惡作を世に存して置くといふのが間違つてゐよう。

且つ苟くも眞劍に書を學んで精神の樂境を拓開し得た人であるならば、平生は兎も角、書に臨んだ瞬間には、一切の雜念を去つて、よく忘我忘言の境に入ることが出來ねばならぬ。苟くも忘我忘言境に入れば、心もなく手もなく筆もなく墨もなく紙もなく書もなく、其の身そのまゝが自然であるから、惡作の得られよう筈が無い。書に限らず、一藝に達して居る人皆然りで、之を技神に入るといふのである。神に入るとは、其の時だけ神樣になるのである。四六時中神樣になるといふ事は凡人の出來る事でないこと勿論であるが、技に臨める瞬間だけ神樣となるといふことは出來ないことはない筈である。技に臨んでは別人の如しといふことは、よく一藝に達した人の傳に見る所の文句であらうではないか。天氣がよいから頭腦が爽かである、天氣が惡いので氣分が重いなど、それは通常人の言ふこと。苟くも眞劍に書を學んで、之を以て精神の樂境即ち心の中に別乾坤を拓開して居る人であるならば、風が吹かうが雷が鳴らうが地震がしようが、腹が痛まうが、字を書いてすら居れば、精神明瞭で、氣持がよい、手は心に隨つて動く、と言ふのであらう。孫過庭も既に感惠(慧)徇知(智)といふことを言つて居る。感慧徇智とは、理智明瞭で、心に一點の曇りもないのを言ふのであるが、精神の練磨を以て之に到るといふことは、頗る容易でない。坐禪の五年十年やつたからとて、容易に此の境に達せらるゝものではないが、眞劍に書を學んだならば、却つて此の方が近道であらう。庖丁が『技以て道に進むべし』と言つたのは、此の間の消息を洩らしたものであらねばならぬ。

書は個性の表現であるとか氣分のあらはれであるとかいふことを、惡く誤解してはならないから、敢て如上の說明を試みて置くのである。

感惠徇知を人の惠みに感じ知遇の意に徇ふ時といふ意に解釋して、我を知り我を解する人の目前にて字を書く時の氣分を曰つたものであらうと說く人もあるけれども、如何なものであらうか。

雕は凋の假借、閑は閒の假借、紙墨不稱の稱はカナフと訓すべし。意に稱ふは、意に適すると謂ふが

如し。互差の差は、差違の差、タガフと訓すべし。萃は聚まる也。遏は止まる也。蒙は闇也不明也。手蒙とは、手が心のまゝに動かないのを云ふ。從は由る也。

當仁者得意忘言。罕陳其要。企學者希風叙妙。雖述猶踈。徒立其工。未敷厥旨。不揆庸昧。輒效所明。庶欲弘既往之風規。導將來之器識。除繁去濫。覩跡明心者焉。

【大意】書の神解妙旨は、口で說明の出來るものでは無い。口で說明し得る所は、其の糟魄に過ぎない。故に前代の書に神解を得て居るものは、容易に書學の要點を口外せない。後の書學に篤志な人が前代大家の風味を希うて奥妙を叙述しては居るけれど、猶粗笨なもので、徒らに工夫の條目は立てゝも、未だ書學の妙旨を書き陳ねたものとは思へない。故に自分の庸昧であるのを揆らずに、自分の明らめ得た限りの書學の要領を書學者の前に開陳しようと思ふのである。庶はくは既往名人の風味と規矩とを弘めて、將來の識見ある書の器量人を導くことが出來ようか。前人の書論の繁冗を除き濫言を去り、既往名人の筆迹を觀察商量した上で、自分の心に悟り得た所を明らかにするのである。

【衍談】包愼伯は、此の一節の徒立其工、未敷厥旨の二句八字を刪つて居る。無論無くてならぬといふ程の必要文句では無い。

此の一節は、孫過庭が書譜を撰する所以を明らかにしたもので、此の書譜上卷が序文と曰はるゝ所以である。

仁者得レ意忘レ言とは、莊子の魚を獲て筌を忘るゝと同意。忘言の二字も莊子に出て居る。精神の樂境を拓開して天地と心を一にする者、之を仁者と曰ふ。論語に『仁者は山を樂しむ』とある。自然に對して心を樂しましむるのである。然し此處では書學の造詣が此れに至つた人として見立てたのである。

罕は希と音通、希少の意である。論語に子罕レ言レ仁とある。企は跂に同じ。足をつまだつること也。企學とは、數等低き地位に在る人が數等高い地位に到らうとする意。疎字は粗字と通じて用ひらる。弘は押し廣むる意、弓に從ひ、古文の肱に從ふ、肱を伸ばして引を張る意、後には擴字となつた。敷は敷陳の意。器識は器量識見の二語に析つて見た方が早分りである。迹跡蹟は同字。迹とは筆也。庸味の庸は凡庸の庸、味は闇也。

當仁者を仁に當る者と讀むべしといふ說は、取るに足らぬ。仁とは成德の名、希に事功に亘つて呼ばるゝこともあるけれども、書譜の此の一節の場合に於て、事功に涉つて之を說くことは許されない。當字は下の未敷其旨に至るまでを管到したる推定副詞として見るべきである。

代有二筆陣圖七行一。中書二執筆三手一。圖貌乖舛。點畫湮訛。頃見二南北流傳一。疑是右軍所レ製。雖則未レ詳二眞僞一。尙可レ發二啓童蒙一。既常俗所レ存。不レ藉二編錄一。

【大意】 世に筆陣圖といふものが七行ある。其の中に執筆を畫いてあるが、圖貌は乖舛し、又點畫は湮訛して居る、頃日楊子江の南北に廣く流傳して居るから、疑ふらくは王右軍の製する所であらう、未だ眞僞を詳にすることは出來ないけれども、童蒙を啓發するには足らう、此れは既に俗間に流傳して誰も知つて居る所であるから、此の書譜の中には編錄せないことにした。

【衍談】 此の一節は、包愼伯の刪る所である。王右軍の筆陣圖といふもの今日まで傳へられては居るけれども、如何はしいものである。其の題後の文に筆陣圖を作つて子敬に與ふとあるから、或は王右軍の筆陣圖といふものが事實有つたであらうとも思はるゝけれども、父が其子を呼ぶのに字を以てすることは無い筈。王右軍の尺牘を見るに、既に仕官した相當の年輩者に對しても、多く童名《小字》を以て之を呼んで居る。況んや我子に於てをやである。王獻之の童名《小字》は、官奴である。故に樂毅論を臨本に書いて獻之に與へた頃には、『官奴に賜ふ』と題して居る。且つ永和九年は獻之が十歲の時であるのに、既に字をもつてをるといふのが怪しい。成童にして冠し、冠して字するは、支那古來の風習であらうではないか。僞物は得て斯ふいふ點からバケの皮をあらはすものであるから、氣をつけねばならぬ。

孫過庭が世間に流傳して居る筆陣圖が圖貌乖舛し筆書湮訛して居るのを知つてゐながら、猶童蒙を發啓するには足ると言つて居るのには、深き仔細があるやうである。此れは後に述ぶることにする。

原本には、執筆圖貌の圖字の右肩に三手の二字を小書してある。故に中書二執筆三圖一、手貌乖舛云々と讀むべしといふ人もある。

乖字は背字と同聲同用。舛字は遷字の古文。彼此位置が間違へられて居るやうな場合に用ひらる。孫過庭は乖字を用ふることが好て、乖舛と言つて居るけれども、舛錯と言はるゝが通例である。字林に舛は錯也と見えて居る。

筆陣圖は既に俗間に流傳して居るから、書譜の中に收錄せないことゝすると言つて居るのを以て之を見れば、俗間に流布せない所の筆陣圖類似の執筆法などいふものが孫過庭の書譜の中に收錄せられて居るであらうといふことは、想像し得らるゝわけで、若し孫過庭書譜の完本が世に存して居たら、案外ツマラヌものであるかも知れないと評する人もある。孫過庭は、書譜の完本が後世に傳はらないのは、僥幸であるかも知れない。唐代の人が翰林禁經を作つて永字八法を傳へて居るなどは、實に識者の物笑ひて、張壞瓘の十體書斷の如きも、實にウンザリさせるものである。

至於諸家勢評。多涉浮華。莫不外狀其形。內迷其理。今之所撰。亦無取焉。

【大意】 諸家の筆勢の評は、いろ〳〵あるが、多くは浮華に涉つたもので、徒らに書の外貌を形容したばかりて、如何にして斯る妍妙の書が作り出されたかといふ內面の觀察を遂げたものは無いのである

るから、今此の書譜を撰するに當つても、之を取らないことにした。

【衍談】　諸家の書評は、梁の武帝の書評をはじめ、庾肩吾の書品、江式の論書表など、唐以前にもいろ〳〵ある。此等を浮華なるものとして孫過庭が取らないのは、一見識あるものと謂はねばならぬが、蔡邕神授筆法以下、各家の筆法説は、孫過庭によつて如何に取り扱はれたであらうか。之を知ることを得ないのは遺憾である。今日に傳はる所のものを一瞥するに、實に左の多きに上つて居る。

1。李斯用筆法《秦》
2。蕭何筆法《前漢》
3。蔡邕筆論《後漢》
4。蔡邕九勢《後漢》
5。蔡邕石室神授筆勢《後漢》
6。鍾繇筆勢《魏》
7。衛恒四體書勢《晋》
8。衛夫人筆陣圖《晋》
9。王右軍題衛夫人筆陳圖《晋》
10。王羲之論書《吾書比二之鍾張一。當二抗衡一。或謂レ過レ之云々の語あるものにて、孫過庭の取る所なり》
11。王右軍筆勢論《告二汝子敬一。吾觀二汝書性過レ人云々の語を冠す。僞物なること明らかなり》
12。王右軍書法
13。題筆陣圖後《此れ前に言へる者》
14。王右軍述天台紫眞傳授筆法
15。王僧虔筆意贊《南齊》
16。梁武帝答二陶貞白一《梁》
17。梁陶宏景論書啓《梁》
18。釋智果心成頌《隋》
19。梁武帝觀鍾繇書法十二意《梁》
20。蕭子雲十二法《梁》

此れ等鍾繇以前に托したものは、大抵信ずる足らないけれども、晋以後のものは、信僞相半する程度のものであらう。唐代以後には、更に多くの筆法書を出して居る。が、孫過庭の書譜が獨り此の中において煥然異彩を放つて居るのは、言ふまでもない。

撰は論撰、撰述の撰で、譔字の異文、選字とは別であるとは、字學家の説く所である。選字と別である

のは言ふまでもないが、其の聲が同じであるから、往々取り違へらるゝのは、已むを得ない。又饌字と簒字とが同字であるが如くに、撰字と纂字とが互に假借して用ひらるゝことは、往々にしてある。今之所撰の撰字も、或は纂字の假借であるかも知れない。又包愼伯は、何故か今之所撰亦無取焉の八字を删つて居る。此れは有つた方が宜しいやうに思ふ。

若乃師宜官之高名。徒彰二史牒一。邯鄲淳之令範。空著二縑緗一。曁二乎崔杜以來一。蕭羊已往。代祀緜遠。名氏滋繁。或藉甚不レ渝。人亡業顯。或憑附增レ價。身謝道衰。加以二縑素一不レ傳。搜レ祕將レ盡。偶逢二緘賞一。時亦罕レ窺。優劣紛紜。殆難二覩縷一。其有レ顯二聞當代一。遺跡見存。無レ俟下抑二揚自標一上先後。

【大意】 後漢の師宜官、邯鄲淳の書名は、隨分著名であるが、上は後漢の杜度、崔瑗より、下は六朝の羊欣蕭子雲に至るまで、此の綿遠たる年代の間には、書を以て名ある人が頗る多い。此の中には、今日まで名聲藉甚たること少しも渝らないで、其の業は顯著なること、鍾●張●二王の如きもあり、或は權門勢家に攀緣憑附し、其庇蔭で聲價を揚げて居たので、其の身が死すれば、聲價も隨つて衰へたのもある。又筆蹟の縑紙が糜爛したり蠹蝕したりして、其の作品の傳はらない人も有る。祕藏せられて居たものは、殆んど搜索し盡されてをる。故に偶々誰は名筆であると感賞する人が有つても、其の筆蹟は滅多に見られないので、優劣の評が紛紜區々殆んど明白に決定を與ふることは困難である。又當代までも顯著に其の名が聞こえて居るやうな人ならば、其の遺せる筆蹟が現存して居るから、其の先後優劣を抑揚自標して爭ふまでもあるまい。

【衍談】 此一節は、包愼伯は之を删つて居ない。吾人は包愼伯が何故に之を删らなかつたかを疑つて見たくもあるが、孫過庭が何のために、斯る記述を試みたかといふ點も、少々味つて見たい。其れは『當代に顯聞あつて遺蹟現存する者は誰か』といふことである。それは主として二王に指を屈せねばなるまい。孫過庭は隨分王獻之の惡口を言つても居るが、一面には又羲獻々々と繰返し言つて居る。此處が注意すべき點であらう。

代祀の祀は歲《載》と同聲の假借である。古代は年歲の語がなくて、祀と言つたといふ說もある。緜は綿と同字、連綿の綿である。緘賞の緘は感の假借であらう。覩縷は孟子にある離婁と同語。明視也と說かるゝ語であるけれども、陸離も此れと同語で、光を言ひあらはす語。邦俗にキラ〳〵とか、ギラ〳〵とかいふやうな類の語であらう。見字は現字と同用である。又此の書に世字を用ふべき所に代字を用ひてあるのは、唐の太宗の諱世民の世字を避けたのである。

筆蹟が糜爛蠹蝕して傳はらないことは、有り得べきことである。古筆蹟の保存といふことに意を用ひ

たのは、梁の武帝が始まりで、梁の天監中《西紀五〇二——五一九》には、二王の書が七十八帙七百六十七卷あつたが、其の亡ぶる時に火をつけて焚いたと言はれて居る。盡くは焚けもせなかつたであらうから、幾らかは收拾することが出來たであらう。唐の太宗の貞觀中《西紀六二七——六四九》には、右軍の書が三千餘紙も有つたさうな。古筆蹟を初めて石に入れたのは、いろ〳〵說があつて、明白に斷定すること困難である。

又按ずるに、此の一節は、書譜下卷の凡例のやうなもので、若し下卷が存して居たら、前代著名書家の品位等列を定めたやうなものが見出さるゝかも知れない。故に節末の讀方は、遺蹟見存、無レ俟二抑揚一、自標二先後一と讀んで、遺蹟現存して名聲顯赫の人は、抑揚を俟つまでもないから、おのづから其の時代の先後だけを標して置く、といふ意味に解すべきものであらうとも思はる。

且六文之作。肇自二軒轅一。八體之興。始二於嬴正一。其來尙矣。厥用斯宏。但今古不レ同。妍質懸隔。既非所レ習。又亦略レ諸。

【大意】 黃帝軒轅氏の時に文字が出來て、書の八體は、秦の始皇帝嬴政《正》より始まつた。其の由來は久しく、其の用は宏いけれども、今と古と同じからずして、書風の妍質が懸隔して居るばかりでなく、今日では最早日常習ふ所の書體でないから、諸を略する。

軒轅は黃帝也、伏羲氏八卦を畫し書契を造るの說亦信ずるに足らず。

【衍談】 此の一節は、包愼伯の刪る所である。それは秦の八體書には、篆書も其の一に數へられ、孫過庭は前に『篆は婉にして通ならんことを尙ぶ』と言つて、全然篆書を說かないこともないのに、此處に之を略すると言つて居るのが矛盾であるとでも言ふのであらう。

八體之興。始二於嬴正一と曰へば、秦の代となつて、突然八體書が興つたことゝなる。それは餘りに輕率な書きぶりであらう。軒轅より秦代までは、約二千四百五十年を經て居る。此の間に字が有れば亦隨つて書も有つたに違ひない。吾人の所見では、黃帝の臣倉頡が文字を造つたなどは、信ぜられぬことであるけれども、少くも夏《西紀前二二〇五——一八一八》の代からはボツ〳〵有り出したらしい。而して周の宣王《西紀前八二七——七八〇》の頃には字形がホゞ整頓せられて、一般の用となり、文學も追々と發達し、書を學ぶといふこともあつたらしい。秦以前の書體は、古文。大篆。籀文などいろ〳〵名づけらるゝけれども、總名としては大篆を以て目したが宜しいやうである。科斗《オタマジヤクシ》のやうな文字は、秦以前にも秦以後にも無い。

秦の八體書は、許愼の言ふ所では

1、大篆　2、小篆　3、刻符　4、蟲書
5、摹印　6、署書　7、殳書　8、隸書

晋の衛恒の四體書勢は、古文、篆、隷、草なり。之を通人の見とすべし。

であるが、大小篆と隷書との外は、通行の書體を以て之を目することが出來ない。寧ろ書風の相違を以て目すべきもので、書體の目を立つるのは、妥當で無い。刻符とは符信に刻りつくる字、蟲書とは蟲のやうな書風の名、摹印とは印面に雕る字、署書とは額榜に書する字、殳書とは兵器に刻りつくる字である。こんな風に名目を立てゝ行つたら、際限がなからうではないか。

六文とは六書のことであらうが、六書をさして六文といふことは、餘り之を聞かない。故に此の六文を六爻と釋文した學者もある。六爻とは易の卦爻のことで、許愼も爻字を說いて、六爻の交錯せるに象ると言つて居る。然し爻卦が文字でないのは明らかなことであるから、文字でないものを孫過庭が此處に引ッぱり出す氣遣ひはないばかりでなく、原本の字形は、明白に六文となつてゐない。

六書とは指事●象形●形聲●會意●轉注●假借のことで、字形を解剖分類する所の名目であるが、此の中、指事●象形●形聲●會意の四が文字を造る所の方法である。六書といふことは、秦以前の人は嘗て之を言つて居ない。初めて之を言つたのは、後漢の班固の前漢書藝文志、之に次いでは許愼の說文解字の序、之に次いでは後漢の鄭玄の周官保氏の注である。此の外には見る所が無い。但し鄭玄は唯六書の名を擧げたばかりで、六書の目は擧げて居ない。六書といふことを秦以前の人が知つて居たか居なかつたかは、頗る疑問である。六書といふことは、或は漢人の發明であるかも知れない。

孫過庭が八體書を既非レ所レ習。亦又略レ諸と言つて、其の書譜中に收めなかつたのは、一見識と謂はねばならぬ。八體書の中には、秦の小篆もあれば、漢代の正書であつた所の八分隷書もある。八分隷書は唐代の人も之を書いては居る。又李陽氷の如きは、大いに小篆に刻意して居る。而も此れ等が當時の通行書體で無かつたことは明白である。さればこそ『習ふ所に非ず』とは言つて退けたのである。此を以て之を見れば、孫過庭の書譜は、主として當時の通行書體たる眞草を說いたもので、眞と草との關係に就いては、三たび意を致して說いて居るけれども、篆とか行とか言つて居るのは、タマ〳〵のことに過ぎない。それは四六駢儷文の文句の逆りとでも見て置くべきものであらうか。顏魯公が篆意を以て眞草を書いて居るなどいふことは、書に筆意性情を出さんための工夫で、此れも亦一見識であるには違ひないが、顏魯公は、孫過庭よりは後の人である。孫過庭が秦篆●漢隷を學ばざれば眞草書に達する能はずなどいふ意見の所有者で無かつたことは明々白々である。

復有二龍蛇雲露之流一、龜鶴花英之類一。乍圖二眞於率爾一、或寫二瑞於當年一。巧涉二丹靑一。工虧二翰墨一。異二夫楷式一。非レ所レ詳焉。

【大意】 世には又龍書とか蛇書とか雲書とか露書とが得體のわからぬ戲體の書風があるが、此れ等は率爾に其の實《眞》物を見て之に象つたのもあらうし、或は瑞祥を記念するために造つたのもあらうし、

字といふよりは寧ろ繪の方に近いもので、翰墨の用に當るものでは無論なく、書とは全然楷式を異にするものであるから、此れは詳にせないことにする。

【衍談】 包愼伯が此の一節を刪つて居ないのは、何故であらうか。字て無いものなら、無論書では無い、書てないものなら、書譜の中に收むべきものでないこと、言ふまでもない。斯ることわり書きなど、何の必要も無いのである。

此の一節の末句と前節の末句とは、之を置き換へた方が意味が明白するやうてある。非レ所レ詳焉とは、ザッと書いて置くといふ意味に解せなくてはならないけれども、其の實は、略して載せないといふ意味てあるに違ひないのみならず、前節の末句の亦又の二字が意味を成さない。要するに駢儷文は文句を言ひ更ふるのを一の修辭法として、複字同語を避くる傾向があるから、讀む者は氣をつけねばならぬ。

秦の八體書の目には、蟲書といふものがあり、後漢の靈帝は、鳥篆を書く者を喜ばれたといふことが後漢書に見えて居る。圖案式若くは繪書式の文字を造る所の風尚は、古い時代から有るには有つたてあらうが、遊戲の書てあること言ふまても無いから、一の書體として之を認むるなどは、トンデもないことである。宋の夢英の著した二十八體書といふものが有る。此れに龍・蛇・雲・露・龜・鶴・花・英等いろ〳〵の書體が載せてあつて、黃帝の造る所とか、神農の造る所とか、伏羲の造る所とか、出

小徐曰く、漢魏以來の懸針、倒薤、垂露、偃波の類は、皆字體の外飾なり、而るに齊の蕭子良、王融、韋仲、庾元威の徒、隨意に增益し妄りに小巧を以て施し、異を以て博なりとし、多を以て貴なりとし、厚く前人を強ひて以て己の學を成す、其虛誕なるは、言はずして明か也、百二十體は、臣の敢て言はざる所なり云々。

鰌目なことを言つて居る。神代の書てあつて、人間の書で無いと認めて居る點は、幾らか可愛い所もあるけれども、神代の書であるならば、人間には用の無いものである。

巧涉二丹青一の丹青は、輕く繪書といふ意味に之を見て、丹青とあるから、彩色を施したものてあらうなど、字面に拘泥した見方はせぬが宜しい。

龍蛇龜鶴等動物の名が有るから、一の象形字であらうなど早合點してはイケない。六書の象形とは截然別なものである。見本を示せば早分りであるけれども、餘りにフザケたものであるから、見本を示す勇氣も出ない。

乍字はタチマチと訓することになつて居るけれども、字林に乍は兩詞也とある。我邦でッ、若くはナガラと訓する方が適切に意義に合して居る。二の動作を並べていふ時の詞である。

代傳義之與二子敬一筆勢論十章。文鄙理疎。意乖言拙。詳二其旨趣一殊非二右軍一。且右軍位重才高。調清詞雅。聲塵未泯。翰櫝仍存。觀夫致二一書一陳一事一。造次之際。稽古斯在。豈有貽二謀令嗣一道叶二義方一。章則頓虧。一至於此。

【大意】 世間に義之與二獻之一筆勢論といふもの十章を傳へて居る。文章は鄙野で、言つてあることは鹵莽てある。其の旨趣を詳に考ふれば、明かに王右軍の筆述に成つたものでない。右軍は位重く才高

王愔の文字志に三十六體をあげ、後漢の東陽公は五十六體をあげ、梁の庾元威は百二十體を書し得たりと云ふ。

い人て、其の文章は、調清く詞雅なものである。其の聲塵は末だ泯びないて、翰牘が仍存して居るから、之を見れば、王右軍の文章の如何に清雅なものであるかゞわかる。王右軍の人に對して一書を致して一事を陳べて居るのを觀るに、如何に造次倉卒の際であつても、キチンと稽古修飭の用意が存して居る。豈どうして謀を令嗣に貽すに、行は義方に叶つて、文章は頓に清雅を虧くこと一に此の如きに至ることがあらうや、あるわけは無い。

【衍談】 此の一節は、包愼伯の刪る所てある。義之與二獻之一筆勢論が僞物であるのは、明白であるから、辯を費すまでも無い、とてもいふのであらう。

造次は匆卒と解して宜しい。其の語は論語に出て居る。大戴禮に『造然容を改む』とあるのと同語であること明白で、造は猝の假借と見るべきである。

稽古斯在とは、古人の教を稽へて、品行を修め飭むる意味である。稽古の語は、尙書に出て居る。此の語を學習の意味に用ふるのは、本邦古來の習慣であるけれども、支那の文獻には見る所がないやうである。貽謀は、禮記に『貽厥孫謀』とあるより出づ。子孫のために謀《計畫》を貽すといふ意である。義方は正義に合した方向と解すべきである。禮記に、敎ふるに義方を以てすと見えて居る。

又云。與二張伯英一同學。斯乃更彰二虛誕一。若指二漢末伯英一。時代全不二相接一。必有二晉人同號一。史傳何其寂寥。非訓非經。宜從二棄擇一。

【大意】 又張伯英と同じく《書を》學んだといふことを云つてあるが、斯れ乃ち更に虛誕であることを暴露したものてある。若し漢末の張伯英を指したものとすれば、時代が全く相接せない。必ずや晉人で張伯英と同名の者が有つたか知らないが、史傳何ぞ寂々寥々、何等見る所も無いのであらうか。

【衍談】 此の一節は、前節に接して義之與二獻之一筆勢論の僞を誚つたもので、無論包愼伯の刪る所である。

義之與二獻之一筆勢論は八字連讀すべきものてある。蔡邕の石室神授筆勢と紛れ易いから、之と區別するために斯く題記してあつたものらしい。自己の尊敬する人を呼ぶのに其の名を以てすることはない筈。孫過庭が義之とか獻之とか其の名を呼び捨てにするわけは無い。我邦でこそ義之と書いて手師即ち字書きとさへ訓ませて、義之義之と呼び慣れて居るけれども、此れは宜しく右軍若くは逸少と呼ぶべきてある。

訓は訓詁、訓注、訓釋の訓てある。訓字を敎訓、訓誡の義とのみ解するのは、一知半解である。訓字は言に從ひ川に從ふ。壅滯を決して川の水の流るゝ如く、疑問に明快な解決を與ふる義である。

夫心之所レ達。不レ易レ盡二於名言一。言之所レ通。尚難レ形二於紙墨一。粗可二彷彿其狀一。綱二紀上其詞一。冀下酌二希夷一取中會佳境上。闕而不レ逮。請俟二將來一。

【大意】そも〳〵心の達したる所は、容易く言語に言ひ盡さるゝものでは無い。設令言語には言ひ盡されても、之を文章に書きあらはすといふことは、更に一層困難なものである。然れど畧其の狀を彷彿せしめて、其の綱紀概要を文章にする位のことは、出來ないことも無い。自分の書譜も此の程度に在るもので、到底書學の蘊奥を洗ひざらひさらげ出すといふことは、出來得ることでないけれども、此れだけでも言つて見て、見て見えず聞いて聞こえない書學の妙解を筆の先に酌みとり、興會を此の佳境に取らうと冀ふものである。其の闕いて未だ逮ばない所は、請ふ將來の賢哲に俟たう。

【衍談】精神の樂地書學の妙境は、無限に展開せらるゝものであるから、各名筆の心解も、もとより其の一部分に過ぎまい。而も世の如何はしい書論は、動もすれば規矩繩墨に拘はり易くて、自繩自縛はもとより、後學を導いて地獄に墮せしむるやうなことが無いにも限らない。孫過庭の書譜に此の弊が無いのは、最も貴い所である。

易の繫辭傳に『書《文》は言を盡くさず、言は意を盡くさず』と見えて居る。孫過庭も亦此の間の消息を語つた者である。

又前に忘言といふことも言つてあり、糟粕といふことも言つてある。千言萬語、苦心して言はんと欲して言ひ難い所の心の妙解を文章に書きあらはしても、讀む人の心境が之に達して居なくては、目には讀んでも、心に領會することは出來まい。

然り、書學の妙解は、之を語り之を文にしようと欲しても、容易に出來得るものでないが、興趣の涌く處、思はず口を衝いて出ることがある。『會を佳境に取る』の一句、眞に味ふべきである。包愼伯は曰ふ。

> 吳郡《孫過庭》の語は過分なりとは雖も、然も稍〻謙抑を存して以て《其の》明らかにせる所を盡さゞらしめば、則ち樞機永く祕して、風を希ふ者從るなく、草法綾の如くにして、藝林實に其の功を載せむ矣。

過分とは、其の筆蹟よりは、書譜に言つてある書論の方が優越して居るといふのである。故に孫過庭なる者は、書學の祕密を多く語らなかつた方が、其の筆蹟の價を增す所以であつたであらうといふのである。

希夷とは、心の妙境をいふ。假つて書學の妙境に況へたのである。老子に曰く。聽いて聞こえざる、之を希と曰ひ、視て見えざる、之を夷と曰ふと。

今撰二執使轉用之由一。以祛二未悟一。執謂二深淺長短一之類是也。使謂二縱橫牽掣一

之類是也。」轉謂鉤鐶盤紆之類是也。用謂點畫向背之類是也。」方復會其數法。歸於一途。編列衆工。錯綜群妙。擧前賢之未及。啓後學之成規。窺其根源。析其枝派。貫文約理贍。迹顯心通。披卷可明。下筆無滯。詭詞異說。非所詳焉。

盤紆は旋流の貌と字書に見ゆ。

【大意】 今執使轉用の法を論撰して、未だ悟らざる所は、之を祛いておく。執とは深淺長短と謂ふの類、使とは縱橫牽掣と謂ふの類、轉とは鉤環盤紆と謂ふの類、用とは點畫向背と謂ふの類である。斯く分類はするけれども、方に復た其の數法を會して一途に歸せしめ、衆巧を編列し、群妙を錯綜し、前賢の未だ言ひ及んで居ない所を擧げて、後學のために成規を啓き、其の根源を窺うて其の技派を析ち、文は簡約で理は富贍であるのを貴んだ。迹顯はれ心通ずるが故に、卷を披げば明かにすべく、下を筆せば滯りが無い。詭辭異說の益なく害あるものは、之を取らないことにした。

【衍談】 此の一節は、下卷に執使轉用の法を說明してある所の大意を述べたものである。下卷が今亡びて居る以上、何とも評しやうがないけれども、執使轉用の四を各々四語を以て說いてある所を見れば、永字八法の如き一の筆法を說いたものゝやうにも見らるゝのである。迹顯はれ心通ずとあるから、簡單な圖解を施してあるやうにも思はる。孫過庭は自信を以て之を書いたものに違ひなく、自分の未だ悟り得ざる所は祛《除》くと言つて居るから、自分で信ぜない所は無論說いて居よう筈が無いけれども、元來筆法などいふもの、餘り難有くないものであるから、書譜の下卷が有つたら存外ツマラヌものであつたかも知れないといふ推測は、此處でも下さるゝのである。

又此れまでが書譜の序文といふべきもので、此れより以下は、孫過庭も務めて學者を裨益すと言つて居るやうに、眞に有益の文字である。書譜の眞價は、此れより以下の文章に於て認めらるゝのである。

然今之所陳。務裨學者。但右軍之書。代多稱習。良可據爲宗匠。取立指歸。豈惟會古通今。亦乃情深調合。致使摹揚日廣。研習歲滋。先後著名。多從散落。歷代孤殆。非其效歟。

【大意】 下卷に說いて居る所は勿論世の書を學ぶ者を裨益するためであるが、今此處に說く所も亦務めて學者を裨益しようと思ふのである。王右軍の書は、世間に之を稱美して學習する人が多い。此れは望ましい事で、王右軍の書ならば、良に宗匠として之に依據するに足るのである。王右軍を中心指歸とすることは、豈唯古を會し今に通ずる所以あるばかりであらうか。亦深く人の情調に合するものである。王右軍の筆蹟を摹揚することが日を逐うて廣く行はれ、之を研習する人が年々多くなるやう

になれば、王右軍前後の著名人の筆蹟は多くは散落することゝなり、年代を歴るに隨つて、殆んど迹を絶つに至るであらう。大した効果ではないか。

【衍談】　包愼伯は、此の一節の豈惟以下二十二字を刪つて居る。何故に之を刪つたのであらうか、孫過庭が餘り言ひ過ぎて居るとでもいふのであらう。

王右軍の筆蹟だに世の中に留まれば、王右軍前後の著名人の筆蹟は、世の中に遺(ノコ)らずともよいとは、成程孫過庭の言ひ過ぎであらう。併し此れは孫過庭の爲にする所あるの言、激する所あるの言である。前に言へる如く、孫過庭時代には、王右軍崇拜熱が漸く衰へて、王獻之崇拜の風潮が高うなつて來た。若し放任して置いたら、王右軍は世の中の人から遂に顧りみられなくなるかも知れない。此れ實に書學のために慨嘆すべきことであり、棄て置くべきことでない。如何にもして書學の太宗師たる王右軍崇拜の熱を高めて、書學の歸着點を定めねばならぬ。苟くも王右軍の聲價をだに挽回することが出來れば、多少の犧牲者を出すことは已むを得ない。角を矯めて牛を殺さうとするのではない。牛を活かさんがために角を矯めんとするのである。此れが孫過庭の意中であつたのであらう。故に口を極めて王右軍を稱讃し、又王右軍學習者を稱讃し、王右軍の名を忘れざらしむるためには、如何はしき筆陣圖の民間に流布することをすら見逃したのである。

蓋し先後著名、多從二散落一、歷代孤殆、非二其効一歟の四句十六字は、意義明白な文句ではない。必ず吾人の解釋せる如くに解釋すべきものと斷言することは出來ない。斯く解釋するを以て書譜の前後の文句との聯絡がとれ、孫過庭の胸中を闡明し得べしと信ずるを以て、吾人は斯く解釋を施す者であるけれども、見やうによつては、左の如く解釋することも出來よう。

王右軍の先後著名の筆蹟が多くは散落して、年代を經るに隨ひ、漸次數少なくなりつゝあるのを、此の王蹟摹揚學習の盛んなる影響を以て、名蹟を長く人間に留め得ることになるならば、大した功効ではないか。

斯く解釋するが、或は穩當であるかも知れぬ。孰れにしても、多少の文句を補足して見なくては、意義は明白し難い文句である。包愼伯のやうに之を刪つてしまへば、何の問題も起らないのであるけれども、原本に其の文句が歴然と見えて居る以上は、何とか解釋を施さないことは出來ぬ。四六文は、時としては冗句があるかと思へば、又時として突飛な省略をすることもある。又一句の字數を限るから、思想の表示が明白せないこともある。讀む時は、口調がよくて文句が麗はしいから、大層感じがよいが、之を解釋する段となると、存外平易明白で無い。韓退之が力を極めて之を打破らうとしたのは、尤なことである。

又歴代孤殆の殆は、紹と釋すべきもので、孤紹は孤繼も同意、他の名蹟が多く散落する間に在つて、王蹟ばかりが摹揚者の多いために獨り《孤》命脈を存續繼紹して居るといふ意味に解すべしと說く人

もある。

搨摹とは、白麻紙に黄蠟を薄く塗つて半透明ならしめ、原蹟を下に置いて透寫しすることらしい。一には之を硬黄摹とも云ひ、又響摹とも云ふのである。現代のやうに寫眞機があるではなし、唐代の人が古人の筆蹟を摹寫するには、頗る苦心したものらしい。雙鉤廓塡といふこともやつたには違ひないが、一般には、搨摹が廣く行はれたらしい。實を云へば、唐人搨摹の法は、今日に傳はつて居ないから、黄蠟を塗つて半透明の紙を作り透寫したといふことも、後人からの想像に過ぎない。

節首の然字は、轉接詞として輕く之を見、反接詞としては之を見ないが宜しい。

試言二其由一。略陳二數意一。止如二樂毅論・黄庭經・東方朔畫讃・太師箴・蘭亭集序・告誓文一。斯竝代俗所傳。眞行絶致者也

【大意】　何故に王右軍の筆蹟は貴いか。試みに自分の意見を陳べよう。王右軍筆の樂毅論・黄庭經・東方朔畫讃・太師箴・蘭亭集叙・告誓文等は、世俗に傳はる所であるが、實に眞行書の妙絶なものである。

【衍談】　試言二其由一、略陳二數意一は、一句で言つてよいのを二句に言つたまでであるから、二の意味あるものと考ふるに及ばない。數意とは一二の意見といふこと。止は祇の假借、タヾと訓することゝなつて居るれけども、マサニと訓した方がよい位のもので、無意味の接頭副詞に過ぎない。我邦には、之に該當するやうな詞がない。

眞行と言つてあるが、蘭亭集叙の外は、皆眞書である。眞書も寧ろ細楷に屬する方で、臨本とするに適當して居るかどうかは問題である。

告誓文は最初から石に刻せられたものであつたが、其の他は皆紙に書いたものであつた。孫過庭の當時まで其の肉蹟が世に傳はつて居たかどうかは、頗る疑問である。『世俗の傳ふる所』と言つて居る位であるから、搨摹本で當時數多くあつたものてあらう。

右軍の筆蹟で最も數多く傳はつて居るものは、尺牘であること勿論である。尺牘の名を一々擧ぐるのは、面倒で、煩に堪へないことであるから、擧げなかつたと云へば、其れまでゝあるが、それにしても、眞と行ばかりを擧げて、草書のものを一も擧げなかつたのは、何故であらうか。

思ふに、尺牘最初の文字を取つて其の尺牘の標語《十七帖・瞻近帖・送梨帖・仙禽帖等の如く》とすることは、後世のことで、孫過庭當時までは無かつたのであらう。而して右軍の草書は、尺牘の外には見ることが出來ないので、樂毅論・東方朔畫讃等と並べて、右軍の草書を擧ぐる方法がなかつたのであらう。故に此處には右軍の眞行のものばかりを擧げたので、眞行の絶致なるものなり、と言つたのであらうけれども、右軍の草書を見逃すわけは無いのであるから、設令ひ草書を擧げてなくとも、右軍の書の全體、即ち眞行草に渉つて之を言つたものとして見るべきてあらう。

前に引ける如く、包愼伯は、孫過庭が王右軍の草書を何とも評して居ないのは、王右軍の書に慊らずに王獻之に捻香せるためであると言つて居るけれども、餘りに牽強の說で、信ずるに足らないこと無論である。

蘭亭集序は、蘭亭序と同じである。集は集會の意味、漢土人は集の一字で集會の意味をあらはすことゝなつて居る。宴會をいふの類である。無論會ともいふから、本文には會字を使つてある。普通には蘭亭序と言ひならはして居るけれども、蘭亭序では意味を成さぬ。一に之を修禊叙とも呼ぶのである。

寫二樂毅論一則情多二怫鬱一。書二畫讚一則意涉二瓌奇一。黃庭經則怡懌虛無。太師箴又縱橫爭折。暨乎蘭亭興集。思逸神超。私門誡誓。情拘志慘。所レ謂涉レ樂方笑。言レ哀已歎。

【大意】樂毅論を寫せば、情多くは怫鬱し、書讚を寫せば、意瓌奇に涉り、黃庭經には則ち怡懌虛無、太師箴には又縱橫爭折、蘭亭の興集には思逸し神超し、私門の誡誓《告誓文》には情拘はり意慘、謂はゆる樂しみに涉れば方に笑ひ、哀しみを言へば已に嘆ずといふものである。

【衍談】此の一節の主眼は、涉レ樂方笑、言レ哀已歎の最後の二句である。右軍の筆は其の書く所の文章の異なるに隨つて各々特異の精彩を放つて居る。謂はゆる涉レ樂方笑、言レ哀已歎といふもので、筆の性情と右軍の性情とがピタリと一致して、一寸の隙も無い。此れが則ち自然といふもので、若し哀しい時に笑つたり嬉しい時に哀しんだりするやうであつたら、自已を僞はり自然に背くといふものである。手と心とが一致して、筆は心のまゝに動き、心は筆のまゝに動き、人巧もなく、作爲もなく、恰も春蠶の絲を吐き、蜘蛛の巢を構ふるが如くであつたならば、其れが自然でなくて何であらう、自然といふことは、上は蔡邕の神授筆勢より、下は懷素の自叙帖に至るまで、之を道破してある。小野道風が柳絲に跳びつく蛙を見て、書學の極意を悟つたといふのも、亦此の間の消息を傳へたものに違ひない。書學の極致は無論此處に在る。豈獨り眞行の絶致と謂ふのみならんやである。孫過庭は右軍の眞行の妙詣を藉つて以て一切の書の妙諦を語つたのである。

既に此の一節の要旨を此く解釋すべきものであるとしたならば、餘り其の他の文句には拘泥せぬが宜しい。老子も『車を數ふれば車なし、而も車の用あり』と言つて居る。分解すれば、索然無味のものとなる。書の興會は渾然融合した點に在るのである。

怫鬱の怫は、怫然として怒るの怫の字、鬱は、元氣鬱勃の鬱の字、怫鬱とは、氣力が胸中に滿つるの意、樂毅が古代の豪傑であつたから、斯く形容したに過ぎない。

瓌奇の瓌は、瓌麗の瓌の字、字形は一に瑰にも作る、妍麗の意味の字、瓌の音クワイを促むればキと

なる。故に奇麗は即ち瓌麗で、奇は假借に過ぎない。之を正奇奇偶の奇字と誤認しては宜しくない。故に瓌奇は同一意味の字を二ッ重ねて一語としたに過ぎない、畫讃であるから、畫の方に就いて斯く言つたのであらう。瓌麗雄奇などいふこともあるが、其れと此れとは別であらう。

黄庭經は道家の書である。故に怡懌虚無と言つたのである。怡も懌も悅ぶ意味の字、悅ぶは即ち樂しむで、心に何の盤(ワダカ)まりもなく虚無冲憺なのが、物質慾を超脱して精神を養ふ所以で、長命も出來るといふのが道家の敎である。

太師箴の箴《針鍼と同字》は、頂門の一箴の箴で、訓戒といふよりは更に一層人の短所急所を衝いて警策を加ふるのが箴といふ一種の文體である。故に之を縱横に爭ひ折(クジ)くと評したのである。

蘭亭の會は、右軍が時の知名の賢人達士四十餘人を招いて一日の清興を恣(ホシ)しいまゝにしたもので、實に千古の雅懷を舒べたものである。故に之を精神超越、思想飄逸と評したのである。神といふ字は、大抵の場合精神といふ意味に用ひらるゝ例である。

私門の誡誓とは、告誓文を言ひ更へたものである。告誓文は又告墓文或は誓墓文とも呼ばる。右軍が志を冠冕に絶つて山陰に隱棲するといふことを二親の墓に向つて告げた文である。故に右軍の意中を忖度(タク)して、情拘はり意慘なりと評したのである。

樂毅論・黄庭經・東方朔畫讃は、墨池堂法帖《明の萬暦三十八年上石》に載せてあるのが、精彩がある

やうに思ふ。太師箴は考ふる所が無い。告誓文は、同法帖に陳の僧智永が王右軍の書を集めたものとして載せてある。前年田中義成博士が原拓本であるとて、支那から持ち歸つて物議を招いたことがある。墓側の土中に埋められたものが世間に流傳する筈は無いのであるが、告誓文を見て彼是と評した書家は、古くから隨分とある以上、何物か古くから傳はつては居たのであらう。又樂毅論は、唐の太宗が遍く右軍の墨蹟を蒐(アツ)めた際に、既に石本であつたといふやうな談は、信ぜられないやうである。

此處に比田井天來道人の性情說を左に紹介に及ばう。道人曰く。

書は自已の性情を陶寫して樂しむのが第一の主眼であつて、觀者は其性情の表現に共鳴して感興を惹くのである。書に於ける性情表現の方法は、主として筆意の變化によるのである。筆意變化の根本は、方圓・曲直・細大・澁滑・遲速・潤渴の十二法で、それが峻厲・重厚・紆餘・平正・清楚・醇朴・古拙・流麗・沈着・活動・滋潤・淡泊の感じとなり、更に如上の相反したものが適當なる配合を以て互に交錯する時は、玆に始めて書に於ける藝術味を發揮し、變化百出の妙を呈し、或は雄麗となり、或は瓌奇となり、或は沈著、或は飛動、本を窮め、遠を極め、微に入り細に入り、其妙測るべからざるに至るのである。更に構成の部分に屬する長短遠近の四法を以て此の十二法に加ふるときは、變化の範圍は一層擴大し、性情發揮の領域は、殆ど無際限となるのである。

豈惟駐想流波。將貽嘽喥(タンクワン)之奏。馳神睢(キ)渙。方思藻繪之文。雖其目擊道

存。尙或心迷議舛。莫レ不二强名爲一レ體、共習分區。豈知情動形レ言。取二會風騷之意一。陽舒陰慘、本乎天地之心一。既失二其情一。理乖二其實一。原二夫所レ致。安有レ體哉。

【大意】豈惟想を流波に駐むれば、將に嚏嗳の奏をも貽さうとするばかりであらうか。又精神を睢渙に馳すれば、方に藻繪の文彩をすら思ふのである。目擊すれば道は存在して居るのに、尙或は心に迷うて舛を議し、强ひて名づけて體となし、共に習うて區畫を分たない者は莫い。豈知らうや、情動けば、形に形れて、會歸を風騷の意に取るものであることを。天氣がよければ心が舒び、天氣が惡ければ心が慘むといふことは、天地の心に本づくものであるが、夫の極致とする所に原づくに、安んぞ一定の風體といふものが有らうか有りはせない。

【衍談】此の一節は、書學の極致を筆の限り形容したもので、一瞥すれば、意義の明白を缺くといふ觀も無いではないが、さう無造作に筆舌で言ひ現はさるゝ筈のものでないから、須らく心を以て之を讀むべきもので、目を以て讀むべきものではあるまい。要旨は『天地の心に本づく』の一語之を喝破し得て遺憾なしであらう。天地は即ち自然であつて、ソコに何等の人巧も作爲も許さぬのである。豈獨り書のみならんや、一切の藝術皆然りであるから、此處には音樂とも繪畫とも將た詩とも其の極致を一にする所があるのを言つたのである。世に書畫同源といふことは、よく言はるゝ所であるが、同源は知らず、同致であるとい ふことは、確かに之を言ひ得られよう。既に書畫が同致であるとしたならば、形體の上から區別を立つるなどいふことは、末の末で、根本に觸れない所の皮相の觀察に過ぎまい。眞劍に書を學ぶ者であつたならば、今少し徹底的に悟入する所がなくてはなるまい。

駐二想流波一、將レ貽二嚏嗳之奏一とは、書の極致が音樂とも一致する所あるのを言つたものとして之を解すべきであらう。莊子に曰く。伯牙鼓レ琴。志在二流水一、鍾子期曰、洋々乎と。流波は此の流水の字面を言ひ換へたに過ぎない。世には之を流波の雅引といふのである。嚏嗳之奏とは、禮の樂記に曰く。其樂。心感者、其聲嚏以緩と。嚏緩を嚏嗳と言ひ換へたのであらう。奏は奏樂。節奏の奏である。書に神解を有する者は、啻に其形を觀るばかりでなく、將に其の聲をも聞かんとするのである。强ちに之を誇張の辭とのみ見るべきであるまい。

馳二神睢渙一、方思二藻繪之文一の睢渙は、輪奐の美を張目愕視するの意であらう。說文に『睢は仰き視る也』とある。渙は煥の假借であらう。漢土人は、文章を眼で讀むものでなくて、耳で聞くものと心得て居るから、勝手な假借字をすることがある。文章が眼でのみ讀むべきものであるならば、一切の音讀といふことは、世の中に迹を絕たねばならないのに、人に聞かするためでもないのに、文章を音讀とするといふことは、矢張り耳の力を假らうとするのではないか。藻繪は彩色のことであるが、建築

物の丹碧を言つたもので、文は文彩である。思ニ藻繪之文一とは、書を見て書を悟るといふ意味であらう。目擊道存は、莊子に出て居る孔子の語で『道は近きに在り』の意味であるが、此處では一目瞭然といふやうな意味に解釋した方が早分りである。

藻井は我邦の格天井の如きもので、荷菱水草を刻繪して火よけのまじなひとす。

議レ幷は、間違つたことを言ひ立つる意味に解したがよい。

風騷は即ち詩のことである。風は詩經の國風の風、即ち風雅の風で、騷は離騷の騷、戰國の末に楚の屈原が創めた詩の一體である。情動形レ言は、即ち詩となつて外形にあらはるゝ如く、性情が心に動けば、其れが書となつて形をあらはす。性情の表現といふ點に於ては一てある。

原ニ其所一レ致は『其の致とする所を原ぬるに』と讀む方が宜しからう。到と致とは同用の字であるから、イタル所と讀んでも惡くはないが、趣致の致若くは韻致の致として讀んだ方が面白いやうである。

夫運用之方。雖ニ由レ已出一。規模所レ設。信屬ニ目前一。差之一豪。失ニ之千里一。苟知ニ其術一。適可ニ兼通一。心不レ厭レ精。手不レ忌レ熟。若運用盡ニ於精熟一。規矩譜ニ於胸襟一。自然容與徘徊。意先筆後。瀟灑流落、翰逸神飛。亦猶ニ弘羊之心預ニ乎無際一。庖丁之目不レ見ニ全牛一。

【大意】　そも〳〵運用の方は自己の心解によるとは云へ、筆畫は眼前に敷陳せらるゝものである。即ち苟くも形あつて眼に看るべきものである以上、如何に心の產物であるとは云へ、筆勢墨致の上に規模の設けらるべきは、必然の勢で、之を一豪に差へば、之を千里に失するやうな結果となるのであるが、苟くも其の術を知つたならば、適に運用と規模とに兼ね通ずることが出來るであらう。心は精なるを厭はず、出來るだけ精にするが宜しい。手は熟するを忌まず、出來るだけ熟するが宜しい。若し運用が精熟しきつて、規矩が胸襟に闇んじ、無意識に規矩に合するやうになれば、自然に容與・徘徊、意先筆後、餘裕のある暢び〳〵した書が出來るのである。此れは猶恰も桑弘羊といふ人が心計に達して無際を豫知し、庖丁といふ牛を解剖することの名人が、技を練ること三年の後には、肢體の完全な活きた牛は眼に見えなかつたといふやうなものであらう。

【衍談】　包愼伯は此の一節の差之一豪以下適可兼通に至る十六字を刪り、文末の二句をも刪つて居る。桑弘羊は前漢の人。心計を以て侍中となつた。心計とは諳算のことらしい。國老談苑に『陳恕心計に長じて監銕使となる』とある。庖丁のことは莊子に出づ。牛を解くに肯綮の處から刀を下して行くから、何時までも刀は新たに硎を發したやうにして居た。即ち少しの無理もしないで牛を解くのである。其の無理をしない所が自然である。桑弘羊は對句をつくるために引合にした位の事であらう。諳はソランズと訓す。諳誦の諳である。闇字を用ひたりすることもある。豪は毛也で、毛のこと、毫

禮記に曰く、庖丁は厨吏の賤者なり。

は後世字である。容與徘徊は、共に寛綽の意、意先筆後とは、筆がスラ〳〵と運ぶ意、瀟灑は解を待つまい。流落は猶流麗といふがごとしであらう。麗と落とは雙聲である。翰は筆翰、神は精神、逸は超逸、預は豫の假借である。

規矩に拘(トラ)はるれば、筆が暢びない。而も規矩が無ければ、ノタクリ書きである。故に規矩は平生の習熟によつて胸中に諳んじ、スッカリ呑み込んでしまつて、筆を運べば自然と規矩に合するやうにならねばならぬ。意先筆後といふも、畢竟此の間の消息を語つたものに過ぎまい。

熟も爛熟といふまでに熟し過ぎては、イヤ味を生ずるものである。故に熟後の生など言つて、熟したる後には生(ウブ)な所がありたいといふ書學家の說が有る。然し熟を經て後の生なら宜しいが、熟せない前のサラの生では物にならない。

熟にもいろ〳〵あるが、其の中で最も貴いのは、精熟であらう。精は粗の反對。一粒選りの米といふのが其の本義である。

嘗有二好事一就レ吾求レ習。吾乃粗擧二綱要一。隨而授レ之。無レ不二心悟手從一。言忘二意得一。

【大意】嘗て好事者があつて。自分に就いて書を習はんことを求むるまゝに、自分が粗(ホボ)書學の綱要を擧げて之を示し、隨つて臨(テホン)本を授くる。さうすると、孰れの人も、心に悟つて手之に從ひ、何の彼のと議論したり質問を發したりするやうなことはなくて、皆意中に書學の呼吸を體得するのである。

【衍談】好事者(ズ)と言つたのは、孫過庭の謙辭であらう。無レ不とあるから、孫過庭に就て書を學ぶ人が一人でなかつたことは明白であり、又どの人も書學の呼吸を體得したといふことも明白である。斯く結果が宜しかつたのは、孫過庭の擧げ示す所の書學の綱要なる者が、眞に要領を得たものであつたからに違ひない。其の綱要なるものが果して如何なるものであつたか、之を知ることを得ないのは遺憾である。然し當時書學が盛んで有つたから、一般の人の書に對する體得が速かであつたことは爭はれまい。臨(テホン)本は自分の書いたものでなくて、王蹟の搨摹本で有つたかも知れない。

縱未レ窮二於衆術一。斷可レ極二於所治一矣。

【大意】縱(タト)ひ未だ衆術を窮むるまでに至らなくとも、斷じて學び治むる所に極め達することは出來る。

【衍談】此の二句は、前節の末に續くものであるのを、筆の都合で別に置くことになつた。諒レ焉。

此の二句の釋文は區々になつて居る。乃ち衆術が衆妙となつたり、所治が所臨となつたりして居る。原本に就て之を檢するに、衆術を衆妙とすることは無理であるが、所治は或は所臨と釋してよいかも分らぬ。今一ッ點が多ければ、無論臨の字である。臨ならば、ワケはなく解釋がつくけれども、所治ては一寸初學者に解(ワカ)りにくからう。治字は理字と通用、攻治・營治《營繕は我邦の俗語》とも熟する字

て、物をつくりたつるのも、亦治である。シッカリ地固め《繩張り》をして建築をはじむるといふやうな意味と解したら、此の場合に不適當の文字の用方でもあるまい。術は行に從ひ、朮（ジュツ）の聲、人の行く道路といふ意味の字であるから、衆術は衆道といふと同じに解して宜しからう。此の場合衆道を窮むるといふことは少し面白くないやうでもあるけれども、眼目は窮の字にある、窮とは行きづまり極點といふ意味に用ひらるゝ字、要するに此の二句は、『書學の蘊奥にまで到達するには至らなくとも、或程度までの成功は、斷じて期待し得らるゝ』といふ意味に之を解すべきである。

若思通二楷則一。少不レ如レ老。學成二規矩一。老不レ如レ少。思則老而逾妙。學乃少而可レ勉。

【大意】若し思想が楷則に通ずるのは、少年は老年に及ばないけれども、書を學んで規矩を成すことは、老年は少年に及ばない。思想は則ち老いて愈〻妙境に臻るけれども、書を學ぶことは、少年の時に勉めねばならぬ。

【衍談】規矩とは開架結構・分行布白といふが如きものであらう。楷則とは此れより一層内容ある所の揮運の方謂はゆる用筆といふやうなもので、筆意を出す、書のウマ味を加ふる所の精神思想の上から考へ出さねば悟り得られぬやうな點であらう。『之を楷則と言つたのは、少々適切を缺くか知れないが、孰れ任意放縱を許さぬものとしたならば、之を楷則と謂つても、不都合ではあるまい。故に楷則を紋切型の定規があるものと思ふのは間違ひで、自然の約束即ち是れ楷則である。法に拘（トラ）はれずして、而もよく法に合するのが、楷則に通じた人の書てあるとしたならば、少年者の悟り得る所てないこと勿論である。更に言へば、規矩は有形の法則て、楷則は無形の法則てある。無形の法則であるから、心に思うて之を悟るより外に仕方は無い。即ち言忘意得である。斯く解することの當否は、猶有識の教を請はんと欲する所である。

勉レ之不レ已。抑有二三時一。時然一變。極二其分一矣。至レ如二初學一。分布但求二平正一。既知二平正一。務追二險絶一。既能二險絶一。復歸二平正一。初謂レ未レ及。中則過レ之。後乃通會。通會之際。人書俱老。

【大意】書學を間斷なく勉めて行く中に、抑〻三の時期分畫が有る。時期が然（シカ）く一變して行つて、其の天分を極むるものてある。三の時期分畫とは、何てあるか。

第一期　初學――分間布白即ち點畫の濶狹を整へて字形美をなす上に、唯平正ならんことを務む。

第二期　務めて險絶の筆を弄して、人を驚かさうとする。

第三期　險絶の筆に飽いて、再び前の平正の筆使ひをすることになる。

第一期の時には、まだ〳〵著名の大家には及びもないと小さくなつて一意に學習するのであるが、既に第二期に入ると、少し慢心が萠して來て、自分が一番偉いといふやうな氣分になる。が、此の第二期を通過して第三期に入ると、險絶の筆を弄することがコケ嚇しであつたことに氣がつき、筆に落ちつきが出來るから、始めて書學の表裏に通會《徹底》して、心と手とが融合一致するやうになる。此の時には、書に老熟するとゝもに、年も亦老境に入るものである。

【衍談】　書を描くにも詩を作るにも文章を書くにも、凡ての藝術に從事する者、皆此の三時期の區分は有るやうてある。芭蕉門の十哲と言はるゝ俳人支考は、斯ういふことを言つて居る。俳諧を作るのは、四十年の修行を要する仕事であつて、最初は平地で句作し、それから險阪を攀ぢつゝ山を登つて峠に達する、此の峠に達するまでが二十年、それから山を下るのであるが、谷があつたり岐路が有つたりして、モトの平地に下り着くまでが更に二十年、此のモトの平地て句作するやうになつて、はじめて不易の句を作り得るやうになると。四十年とは、チト仰山であるが、五年十年の修行て、滅多に成功し得らるゝものではあるまい。支考がモトの平地と言つたのは、大いに味ふべきことて、孫過庭が復歸平正と言つたのと一致して居る。

極二其分一矣とは、人として行き得る所のトヾのつまりに達するといふ意義て、分は即ち天分である。

世には或は第一期の學成二規矩一て滿足して、一家を成したつもりてをさまつて居る人もあるやうてある。第二期の險絶て大天狗となりすまして居るやうな人は、隨分とあるやうてある。よく第三期の人書俱老まて進んで圓熟した書家に至つては、容易に見られまい。

仲尼云。五十知レ命。七十從レ心。故以達二夷險之情一。體二權變之道一。亦猶謀而後動。動不レ失レ宜。時然後言。言必中理矣。

【大意】　孔子は五十にして天命を知り、七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えずと言つて居らるゝ。年を積むは功を積むは道に通達する所以てある。故に以ふに、筆の平正と險絶の情趣に通じて、宜しきを權り、奇正交〻用ふることを體驗體得するのは、恰うど人事の謀つて後に動けば、動いて宜しきを失はず、時を見て然る後に言へば、言が必ず理に中るやうなものてある。

【衍談】　此處は多年の積習積功によつて初めて書は上達し得らるゝものてあるといふことを人事に比較して言つたのてある。六十の手習ひといふことは、如何なる意味てあるか知らないが、人の思想が老熟するに隨つて、書も亦老熟するものてあるから、書を學ぶ者は、功を急いてはならぬ。小成に安んじては宜しくない。老朽は宜しくないが、老功は貴ぶべきものてある。小成に安んずる者、之を雪隱の棟上げといふのてある。大廈高樓の建築には其の基礎工事だけにすら數年を要するものてある。

焦いては事を仕損ずる。急がばまはれ瀬田の橋である。たとひ其の中間に邪路傍徑に踏み入つて正途に迷ふやうなことがあつても構はない。不斷の進行不斷の學習を積んで行く中には、結局達すべき所に達せずにはやまぬものである。此れより以上には達し得られないと自滿するのは、謂はゆる自ら畫する者で、進むことを知らない者である。斃れて後に已むといふことがある。死ぬまでの修行として書は學ぶべきものであらう。展覽會の如きも、書の成功品を展覽する意味でなくて、各自の進境を對比するものとして之を見るべきであらう。斯く見る時には、利益は展覽者よりは、却つて出品者の方に在るものであるから、賞を受くるの受けないのといふことは、最初から問題とすべきものではあるまい。自己の到らざる所を悟り、他の到れる所を察し、以て自學に資することを得たならば、此れより大なる賞與はあるまい。

權變といふことは、詭謀僞計を以て人を欺瞞するといふやうな意味に誤解せられ易い語であるが、權謀術策と權變とを同一に見るべきではない。權は權衡の權で、輕重を權る所以、變は變通、窮して通ずる所以、變の反對は拘泥である。拘泥が宜しくないとしたならば、變は貴ぶべきものとせねばならぬ。宜しきを權る之を權と曰ひ、一を守らざる之を變と曰ふ、權變は惡いことでない。

仲尼は孔子の字であるが、孔子の卒した時に、魯の哀公が嗚呼哀哉尼父と誄したから、孔子の諡として見做され、字よりは一層貴いものとして後の學者に取扱はれて居る。

夷は平坦の意味に用ひらるゝ字。即ち險の反對である。

是以右軍之書。末年多レ妙。當レ緣二思慮通審一、志氣和平、不レ激不レ厲、而風規自遠。子敬已下、莫レ不二鼓努一爲レ力、標置成レ體。豈獨工用不レ侔。亦乃神情懸隔者也。

【大意】是を以て王右軍の書には、晩年に妙蹟が多い。是れは當に思慮通審、志氣和平、激せず厲せずして風度規模がおのづから超越して居るからであらう。王獻之以下、鼓努して力をなし、一家の體勢面目を標置して居ない者は莫いけれども、豈獨り其工夫用意が王右軍に侔しくないばかりであらうか。亦乃ち精神情意の懸隔せる者である。

【衍談】思慮通審・志氣和平といふことは、人格の老成に待つべきもので、壯年氣剛の者に求むべきことでない。壯年氣剛の時には、覇氣が有つたり、爭氣が有つたり、市氣匠氣が有つたり、兎角心が外に向ひたがつて、平和な心境に安着することは出來ないものである。志氣が和平でなくては、精神の樂境は拓開せられない。精神の樂境が拓開せられなくては、心と手と渾然融合せる妙蹟は得らるべきものでない。

王右軍の書が晩年に佳蹟多いといふことは、孫過庭ばかりでなく、既に梁の陶宏景なども、逸少自二吳

興レ以前ノ諸書、猶未レ稱(ガナハ)、凡厥好跡、皆是向二會稽一時永和十許年中ノ者ト言つて居る。
思慮通審の通審は、通《透》徹明審の意、不レ激不レ厲の厲は、嚴厲の意、風規自遠は超越の意である。
鼓努の鼓は効と釋文せるもあれど、鼓を正しとすべし。鼓努爲レ力は、奮勵努力の意である。奮勵努力
するは、猶未だ志氣和平に至らざるを證する者である。
王右軍は年五十七で卒し、太令は年四十三で卒した。年の上から云へば、右軍の齡も猶還暦には達し
て居ないし、太令も猶初老を踰えて居る。然し書の老熟期に達するといふことは、必しも年齡の上か
らのみ量ることは出來まい。一は其の天分にもよること勿論であるが、大體論として、孫過庭の言ふ
所が切實であるのは、爭ふべき餘地あるまい。

或有レ鄙二其所一レ作。或乃矜二其所一レ運。自矜者、將窮二性域一、絕於進誘之途。《上》自鄙
者、尙屈二情涯一。必有二可レ通之理一。嗟乎。蓋有二學而不一レ能者。未レ有二不一レ學而能者一也。
考二之即事一。斷可レ明焉。

【大意】 或は其の作る所の書を粗鄙なりとして小さくなつて居る者もあれば、或は其の揮運する所の
書に矜(ホコ)つて大いに鼻を高くして居る者もあるが、自分の書に矜つて鼻を高くして居るやうな者は、其
の性域に行きづまつて居る者であるから、之を誘掖して、更に上達せしめようとすることは、不可能
であるけれども、自分は書が思ふやうに書けないと小さくなつて居る者であれば、其の情涯を屈して
居るのであるから、必ず之を伸ばして上達せしむる望みがある。嗟乎(アア)蓋し書を學んで而も上達する能
はざる者は、或は稀(マレ)に有るかも知れないが、學ばずして上達するといふやうな者は有るべき筈がない。
此れは眼前の事實に見て、斷じて明白なことである。

【衍談】 包愼伯は、考二之即事一、斷而可レ明焉の二句を前節の神情懸隔者也の下に接續せしめて、此の
一節の或有レ鄙二其所一レ作以下未レ有二不學而能者一也までを刪つて居る。何故に之を刪つたのであらう
か、吾人には了解が出來ない。此の一節は、書の學ぶべきことを奬勵勸說したのであるから、刪るべ
き理由は無いと思ふ。
蓋有二學而不一レ能者一、未レ有二不一レ學而能者一也は、論語に出づる所の文句である。
學而不能者は、よく〳〵鈍根の者であつても、屈せず撓まず、跛鼈も千里
を行くといふ心がけを以てして精限り根限り學んだならば、一念貫徹して遂に上達するに違ひあるま
い。之に反して輕佻な上滑りのした才子肌の者であつたならば、少成に安んじ易い者であるから、ス
グと天狗になつて、是れで十分だと自滿即ち性域を限るから、奥妙を理會するまでの成功上達は、却
つて望まれないものである。此れ『學ぶと雖も猶學ばざるが如し』て、學而不レ能者は、鈍根の者より

は、却つて此の方に在るのである。孫過庭の此處に言つて居る所は、書學者の大いに注意すべき所であらねばならぬ。

然消息多方。性情不レ一。乍剛柔以合レ體。忽勞逸而分驅。或恬澹雍容。內涵二筋骨一。或折挫(セル)槎枒(ノゴトク)。外曜二峯芒一。察レ之者尙レ精。擬レ之者貴レ似。況擬不レ能レ似。察不レ能レ精。分布猶踈。形骸未レ檢。躍泉之態。未レ覩二其妍一。窺レ井之談。已聞二其醜一。縱欲レ搪二突羲獻一。誣二岡鍾張一。安能掩二當年之目一。杜二將來之口一。慕習之輩。尤宜レ愼レ諸。

【大意】 然れども消息は多方て、性情は一てない。人によつていろ〳〵の風姿の書を作つて居る。或は筆の剛柔を合して體姿をなすものもあれば、或は筆の勞逸を分驅して努力の作と不用意の作とが風姿を殊にするのもあり、或は恬澹雍容、ユックリ筆を運んで、內に筋骨を藏して居るのもあり、或は吹折られた木のやうに、外に鋒芒を露(アラ)はしたのもある。全體古名人の筆蹟を察するには、精密周到ならんことを尙(タット)び、又之を摹倣するには、精神の似んことを貴ぶものであるのに、模倣しても精神まで似ること能はず、察しても精密周到でなかつたならば、分間布白に猶粗笨な所があつて、形體に檢(シマ)りがないから、たとひ躍泉の姿態があつても、未だ妍美の書として之を稱譽することは出來ない。此れ畢竟彼輩の見聞の狹いためであつて、研究が足りないから、此の醜態を暴露するのである。縱(ヨ)しんば右軍太令に搪突ブツツカリ、鍾繇張芝の書風は此の通りだと誣罔しようとした所で、どうして當時の人の目をくらまし、又將來の人の譏誚の口を杜(フサ)ぐことが出來ようか、出來はしない。古名人の筆蹟を慕ひ習ふ者は、宜しく之を愼しむべきである。

【衍談】 此の一節は、既に書に於て成功を自負して居る所の人の缺點を擧げて、之に警告を與へたのである。

然しながら、然消息多方より以下外曜二峯芒一までは、譽めたものとも誚つたものとも判然しないから、孰れとも決定せずにソッと字面の解釋だけをなし、察レ之者尙レ精以下を慕習之輩に警告を與へた文句として見た方が安全なやうでもある。

槎枒の枒字は、或は核と釋文した人もあるけれども、核では義に當らない。躍泉の躍を濯と釋文するが如きは、目をもたない人と謂はねばならぬ。槎枒は木の幹、枝に對して言ふ語である。躍泉は、我邦でいふ瀑布のこと。

消息多方、性情不レ一の性情は、餘り重く見ないがよろしい。消息多方だけで宜しいのを、四六駢儷文であるから、二句に言ひあらはしたに過ぎない。乍忽の二字にも、意味は無い。剛柔合體と勞逸分驅は、凡そ似たものてあらう。此れも對句にして言つたまでのことてある。恬澹雍容、內涵二筋骨一は、

槎枒は伐り倒したる木の幹なり。或は禿木とも解せらる。

惡書の評では無い。折挫槎枒は、所謂截鐵折釘で、圭角の多い書であらう。檢は檢束、シマリのあること。窺井之談は井蛙之見と同じであらう。井は狹いものである。搪突は普通に唐突に作るけれども搪突が宜しからう。唐突はダシヌケといふやうな意味に用ひらるゝことが多いけれども、此處ではブツツカル即ち之に及ぶといふ意味に用ひたのである。誣罔とは、さうてないのをさうてあると言ひ張ること、杜は塞也、フサグ意味に用ひらるゝ字である。

至レ有下未レ悟二淹留一偏追二勁疾一。不レ能二迅速一。翻效遲重上。」夫勁速者超逸之機。遲留者賞會之致。將下反二其速一行上臻二會美之方一。專溺於遲一。終爽二絕倫之妙一。能速不レ速。所レ謂淹留。因レ遲就レ遲。詎名二賞會一。非夫心閑手敏二難一以兼通者焉。

【大意】未だ淹留の筆を悟らざるに、偏に勁疾の筆のみを追ふ者や、勁速の筆が出來なくて、翻つて遲重の筆を效ふ者やがある。そも〳〵勁速は筆致を超逸せしむる機みで、遲留は賞會の致の存する所である。故に速に反し、即ち疾く筆を運ぶことを戒しめたら、追々と會美の方に臻ることが出來よう。然も專ら遲筆に溺れたならば、終に絕倫の妙に爽ふことになる。能く速かなれども、而も速にしないのが、謂はゆる淹留といふもので、貴い筆致である。遲に就くのならば、どうして賞心會意の書と名づくることが出來よう。心閑に手敏な者でなくては、遲速の筆に兼ね通ずるといふことは出來ない。

【衍談】此の一節、運筆の遲速といふことに就いて、其の一方に偏すべからざるのを說いたものである。世には筆を疾く運ぶことを以て書の能事と誤解して居る者が有り、人も亦達者に字を書くと感服するやうであるけれども、疾く筆を運ばせた書は、平滑で、薄ッぺらで、謂はゆる澁味といふものが無い。筆耕の字であるならば、捷く書くに如くなしであるけれども、苟くも書家を以て自ら標置する者の書であるならば、捷く書くばかりが能てではあるまい。筆が澁つては、超逸の勢を出すことは難からうけれども、書の鑑賞的價値といふものは、寧ろ遲筆に存するものである。專ら遲筆に溺れて遲により遲に就いたのでは、モトより何等鑑賞的價値は無いけれども、よく速なれども、而も速にせざる所が眞の淹留即ち遲筆といふものである。世に遲筆の妙味を解して居る者が甚だ少ないやうであり、殊に我邦人は、筆マメなのが書家であるやうに誤解する傾きが有るから、此の一節は、特に本邦書家の氣をつけて讀むべき所であらう。無論言ふは易く、行ふは難く、孫過庭自身と雖も、『筆翰飛ぶが如し、人之を病とす』と言はれた位で、實際に遲筆の妙味を體得しては居なかつたかも知れないが、其の言つて居る所に間違ひは無いから、讀む者は、之を信じて疑はないが宜しい。

間架結構も字形を成す所以であるから、毫も意に介するに足らずといふではない。而も字形ばかり整へばよいといふのなら、世界孰れの文字か形なさものあらんやで、サンスクリットにもアルハベット

にも無論形はあるが、書の藝術として貴き所以は、形の上に非ずして、實に用筆の上に存するのである。筆とは何ぞや、毛筆である。毛筆であればこそ、其の揮運の方によつて、疎密長短の外、一點一畫の間にも、鑑賞に値する所以の妙味を出すことが出來るのである。故に書と毛筆とは、離るべからざる關係を有するものである。世に筆書を誤り名づけて線といふ人が有るけれども、此れ數學の術語を書學に轉用せんと欲するものでて、トンデも無いことてある。數學上の線は、無形の點と點とを連接する所以のもので、積を有せない所のものに美醜の評は下し得られぬ筈。筆書を指して線といふことは、遠慮して貰ひたいものてある。否苟くも書を解する者であるならば、そんな理に中らぬことは言はない筈である。故に筆書を指して線と呼ぶ者は、書を知らざる者として、之を相手にせないが宜しい。書學上に曲線直線などいふことも近代の事て、今は殆んど確定した用語となつて居るけれども、此れも宜しく曲筆直筆といふべきてある。若し書學上に線といふ用語が廢せられて、筆といふことになつたならば、コヽに始めて現代の書學も一段の進歩をなして、東洋藝術の特種美を發揮することが出來るてあらう。

節首の至の字は、讀まずに置いた方が分り易い。强ひて讀まねばならぬことはない。

假令衆妙攸歸。務存骨氣。骨既存矣。而遒潤加之。亦猶枝幹扶疎、凌霜雪而彌勁、花葉鮮茂、與雲日而相暉。如其骨力偏多。遒麗蓋少。則若枯槎架險、巨石當路。雖妍媚云闕。而體質存焉。若遒麗居優。骨氣將劣。譬夫芳林落蘂、空照灼而無依、蘭沼漂萍、徒青翠而奚託。是知、偏工易就。盡善難求。

【大意】假令ひ衆妙の歸する所なりとも、務めて骨氣を存すべきてある。骨氣が既に存したら、之に加ふるに遒潤を以てするがよい。筆に骨氣あるは、猶枝幹扶疎たる樹木が霜雪を凌いても彌〻勁いやうなものてあり、筆の遒潤なのは、鮮茂な花葉が雲日と相輝いて居るやうなものである。如し其の骨力のみが偏へに多くて、遒麗が蓋し少なかつたならば、顚木の斷崖に横たはり、巨石が路を塞いて居るやうなもので、妍媚の觀はコヽに闕けたりとも、而も體質は存して居るから、ドッシリした感じのするものてあるが、若し遒麗の氣が勝ちまさつて、骨氣が劣つて居たならば、譬へば夫の芳林の落蘂が空しく照灼すれども、依據する所がなく、蘭沼の漂萍が徒らに青翠なれども、託する所がないやうなもので、麗はしくばかりあつても、重味が無い。そこて偏好は就り易いものであるけれども、善を盡すといふことは、容易に求められないといふことが知らるゝのてある。

【衍談】　此の一節は、前を承けて、遲筆の貴き所以を說明したものである。骨力といふことは、遲筆によつてのみ得らるゝもので、骨力あるの書・之を渾厚といふのである。速筆の書は、油滑、偏軟となり易い。油滑、偏軟は書の病である。

遒潤の遒（シウ）は、遒勁の遒の字、增韻に健也と言つてある。鮑昭の詩に獵々晩風遒と見え、南史に非二徒風流清爽一、文亦遒麗と見え、北史には又神情機警、詞藻遒逸とあるから、南北朝時代から、斯ういふ風の意味に使用しはじめたものと見ゆる。說文には迫也と言つてある。潤は燥の反對に見ればよい。骨力ばかりでは、棒鱈のやうて、餘り面白くないから、骨力に加ふるに生々（イキ〳〵）とした潤ひを以てすれば、更に妙であるといふのである。遒麗も遒潤も意味の相違はあるまい。故に前には遒潤と云ひ。後には遒麗と云つてある。

骨既存矣と曰つて骨力既存矣と曰はないのは、脫したのではない、省いたのである。

扶疎はマバラの意、扶（フ）は發聲に過ぎまい。冬の落葉したる木を形容する語てある。

花葉鮮茂の鮮は花に云ひ、茂は葉に云つたのてあらう。木の葉も、新綠の際などは、隨分麗はしいものである。

暉は煇輝と同字てあるが、實は暉字は暈字と同じてあるから。暉は煇の假借と見たがよろしい。

枯槎は、枯れた顚木と見た方が宜しい。文字は用ひられた處によつて意味を別にするものである。

落蘀は落花といふに同じ、蘀は古字である。蘭沼は前に芳林と云つたから、之に對して字面を麗はしくしたまでのこと。偏は奇也、偶の反對、一方カタ〳〵といふ意味の字。莽萍は同字也。

雖學宗二一家一而變成二多體一莫レ不レ隨二其性欲一、便以爲レ姿。質直者、則徑挺不レ遒。剛很者、又掘强無レ潤。矜（ケウ）歛者、弊二於拘束一。脫易（イ）者、失二於規矩一。溫柔者、傷二於軟緩一。躁勇者、過二於剽迫一。狐疑者、溺二於滯澀一。遲重者、終二於蹇鈍一。輕瑣者、染二於俗吏一。斯皆獨行之士、偏玩所レ乖。

【大意】　一名筆の書を學んでも、必ず其の通りの風體の書が出來るとは限らない。之を學ぶ人の性慾次第で、いろ〳〵の風體の書が出來るものである。即ち質直なる者は、徑庭に素朴な書を作つて、遒健な書は作り得ない。剛很・很戾・旋毛曲（ツムジマガ）りの者は、又掘强にポキ〳〵した書を作つて、筆に潤ひが無い。矜持・歛飭する者の書は、拘束でノビ〳〵せない弊があり、脫易（イ）に無頓着な人の書は、規矩を守らない弊があり、溫柔な人の書は、軟緩で勁味がなく、躁勇な人の書は剽迫で、フワツとした所が無く、狐疑で疑ひ深い人の書は、滯澀で、筆が走らず、遲重で早分りのせない人の書は、蹇鈍て筆がデチ〳〵して居り、輕瑣なコセツイタ人の書は、俗吏の書くやうな字を書くものてある。此れ皆獨行の

士の偏(カタ)よつた行ひが偏(カタ)よつた嗜好を生んで、斯く偏(カタ)よつた風體の書を作ること、なつたもので、醇正の書學には乖(ソム)いたやり方である。

【衍談】書を學ぶにも、書を評するにも、自己の好不好を以て標準とすべきものではあるまい。自己の習性が書の習性となつて現はる、、之を人格の表現など心得られては、トンダ間違ひであらう。人格の表現といふこと然り左樣に淺薄なものではあるまい。習癖が人格の表現で、其れが貴ぶべきものであるとしたならば、習癖あるの書ほど作り易いものは無い。然らば誰でも無造作に藝術的の書を作り得るもので、藝術的の書は、頓と無價値なものになり了るであらう。習癖を去れ、習癖を去れ、然らずば、書學の眞髓に通會するといふことは、到底不可能である。

人の習性を矯むるといふことは、容易の業で無い。書を學ぶ者先づ自己の習性から矯めてかゝらねばならぬとあつては、頗る厄介な問題であるが、吾人を以て之を見れば、眞劍に書を學んで、不斷の功を積んで行く中には、自然と書に心解を得るの日が有るに違ひない。既に書の心解を得れば、精神の樂境が拓開せらるゝ。コ、に何等の習性も無ければ、癖もない。習性もなく癖もなければ、之を自己を超越すると曰ふ。超越之を逸といふのである。故に書の心解を得た人て有るならば、平生は兎も角書に對する時だけは、別人となり得る。一層進んで書の妙解を得るに至れば、天地の心を心として、行雲流水、行くべき所に行き、止まるべき所に止まり、何等の人巧も作爲もなくて、自然と一致通會するものてある。此れ吾人の前に論じた所て、孫過庭も亦此の點には、眼を開いた者てあつた。されば此の一節に於て其の主眼と見るべきは、斯皆獨行之士、偏翫所レ乖の十字てある。偏翫とは偏よりたる翫好、乖くとは、正に反することてある。偏翫に拘(トラ)はれて居る間は、書の心解は得らるゝものでない。超越せよ、超越せよ、超越、コ、に於て人格は高まる。人格の高卑と事功の大小とは沒交涉てあらねばならぬ。

矜は又巨巾切、故に矜持は謹持と解するを得べし。

徑侹は當に徑挺に作るべきてあらう。徑も挺も直の義を有する字てあるから、此處には質直の形容語としたらしい。

掘強は當に倔强に作るべきである。掘は假借字也。矜歛(ケウレン)とは、矜持歛飭の義で、矜持とは固く身を持する意、固く身を持する者は、放縱寬濶な度量がない。故に弊二于拘束一と言つたのてある。

剽迫とは、寬綽の反對の意味に解釋するが早分りてある。雍容和平の態なきを謂ふ。

蹇は足ナヘといふ字、鈍は鋭の反對、蹇鈍の意味は、思うて知るべしである。

輕瑣の瑣は瑣細の義で、玉や貝の粉ナ屑といふ字、輕瑣者染二於俗吏一とあるのを見て、當時の俗吏の書が如何に局量褊小てコセツイテ居たかゞ知らるゝ。

獨行之士とは、獨立獨行、人の毀譽を顧りみぬといふやうな卓異人物を言つたのでなくて、自己の性

癖に滿足して居る位の獨りよがり人物として之を解すべきである。

染於俗吏の染字は、淬と釋すべきやうに見らる。淬と釋しても、其の義は染に同じて、前の陶淬の場合とは、意義を殊にして用ひられて居る。

易曰。觀乎天文、以察時變。觀乎人文、以化成天下。況書之爲妙。近取諸身。假令運用未周。尙虧工於祕奧。而波瀾之際。已濬發於靈臺。必能傍通點畫之情。博究始終之理。鎔鑄蟲篆。陶均草隸。體五材之竝用。儀形不極。象八音之迭起。感會無方。

【大意】 易に『天文を觀て以て時變を察し、人文を觀て以て天下を化成す』といふことを言つてある。況んや書の妙たるは、近く之を身に取り、人間自然の欲求から起つたもので、趣味性を滿足せしむる所以であるから、假令ひ其の運用は未だ周からず、尙巧を祕奧に虧いて、極妙の域に達して居なくとも、波瀾即ち工夫用意のさま〴〵であるのは、已に濬く靈臺即ち心の奧底の微妙甚深の處から發して居る以上、必ず能く旁ら點畫の情に通じ、博く終始の理を究めて、蟲書篆書を鎔鑄し、草書隸書を陶均し、而して五材の並びに用あるを體したならば、儀刑極まらず、又八音の迭ひに起るに象つたならば、感會は無方であらう。

【衍談】 包愼伯は、此の一節を刪つて居る。其れは誇張浮華の麗辭に過ぎないとでもいふのであらう。然しながら此の一節は、書の藝術的眞價を闡明したのであるから、之を刪るのは、亂暴である。近取二諸身一も、易に出て居る語である。觀二乎天文一以察二時變一、觀二乎人文一以化二成天下一は、古の聖人が天下を經綸する大眼目を言つたのであるが、此處に之を委しく說明する必要はあるまい。書も亦人文の一たるは、言ふまでもない。現代頻りに唱へらるゝ文化といふ語は、此の下句から出て居る。

濬は深の義、靈臺は又靈府とも云ふ。靈は靈魂、靈魂の在る所、之を靈臺又は靈府といふのである。鎔鑄が金屬を鎔かして器を造ることである如く、陶均とは、土を捏ねて器を造ることである。均は陶器を造る所の轆轤といふ字、故に土に從ひ匀に從ふ、會意の字である。均等は其の轉義に過ぎない。五材は五行に同じ、木火土金水也。儀刑の刑は、型の假借。八音は金・石・絲・竹・匏・土・革・木で造られた八種の樂器の音を謂ふ。

書が六藝の一であるといふことは、書の位置を高むる所以でない。六藝とは禮・樂・射・御・書・數、此等が皆藝術であるとは、誰も認めまい。書の藝術たる價値は、精神の樂境を拓開して、自我を超越する點に在る。自我を超越すれば、ソコに何の爭ひもなく、心は平和である。平和は無上の幸福である。此の點から見て、世に書學の興ることは、大いに人生に意義を與ふる所以で、大いに喜ぶべく、又望

むべきことである。人生の幸福が物質の上にのみあると思ふは、大間違ひである。物質の要求のみが盛んであれば、世の中に爭ひといふものゝ絶間は無い。此れに對する一掬の清凉劑は實に書であるのではあるまいか。果して然らば、書は國家治道の要具である。心ある政治家は、大いに之に向つて奬勵を加ふべきであらう。

至レ若レ數畫竝施。其形各異。衆點齊列。爲レ體互乖。一點成二一字之規一。一字乃終篇之准。違而不レ犯。和而不レ同。留不二常遲一。遣不二恆疾一。帶レ燥方潤。將レ濃遂枯。泯二規矩於方圓一。遁二鉤繩之曲直一。乍顯乍晦。若レ行若レ藏。窮二變態於毫端一。合二情調於紙上一。無レ間二心手一。忘二懷楷則一。自可レ背レ羲獻而無レ失。違二鍾張一而尙工。

【大意】 數畫を並び施しても、其の形が各〻異なつて居り、衆點を齊しく列しても、其の風姿が互ひに違つて居り。一點は一字の規をなし、一字は乃ち終篇の準となり、違へども而も犯さず、和すれども而も同せず、淹留の筆も、常に遲くばかりは運ばず、疾速の筆も恒に疾くばかりは運ばず、燥を帶びても方に潤ひ、將た濃からうとして遂に枯れ、規矩を方圓に泯ぼして、鉤繩の曲直を遁れ、乍ち顯乍ち晦、行ふが若く、藏するが若く、變態を豪端に窮め、情調を紙上に合し、心と手との間隔がなくて、楷則を心に忘るゝまでに達したならば、右軍や太令の筆に背いて居ても、おのづから過失なく、鍾繇や張芝の筆と違うて居ても而も尙巧であるといふべきて、書學の極致は、此處まで達せねばならない。

【衍談】 此の一節は、書學の最後の到着點を說いたもので、一節の眼目は、窮二變態於豪端一、合二情調於紙上一、無レ間二心手一、忘二懷楷則一の四句二十字に在る。其の他は之を形容した文句に過ぎないから、必しも字解句說して骨を折る必要は無い。

節首の至若の二字は、數畫並施以下、忘二懷楷則一に至るまでの九十四字を管到して居るから『懷を楷則に忘るゝが若きに至らば』と讀むべきてあるが、此の至若の二字は無くても意味が通ずるから、讀まずに置いても宜しい。

無レ間二心手一、忘二懷楷則一は、文法上、心手無レ間、忘二楷則於懷一といふべきてある。倒置法とて漢文中には往々見受くる所の例であるから、氣をつけねばならぬ。何故に倒置法を用ふるのであらうか。それは一の異なる語法を用ひて、讀者の注意を喚起せんためである。故に倒置法は特に注意すべき必要文句に用ひらるゝ例である。

一點成二一字之規一とは、一點が一字の中心となるの意、一字乃終篇之准とは、最初の一字が終篇の文字を引き立て引き廻すといふやうに、篇法《或は章法ともいふ》の整然として、謂はゆる一絲紊れざるを云ふ。准は準字の異文。

泯二規矩於方圓一は、泯二方圓於規矩一とあつても同じて、方圓の筆遣ひをしても、規矩の事は忘るゝ意。規は圓をゑがく所以即ちブンマハシ《コンパス》て、矩は方をゑがく所以即ち定木《カネサシ、矩尺》てある。鉤繩之曲直も曲直之鉤繩とあつても同じて、鉤はマガリカギ、繩は墨繩、長い直をゑがく所以てある。規矩準繩は、工學上の術語を假つたのてある。

書を學んて『變態を筆端に窮め、情調を紙上に合し、心手間なく、楷則を懷に忘るゝ』に至つたなら ば、最早申分はあるまい、精神の樂境も、此に於て拓開せられ、自然の妙にも此に於て通會するのて ある。此處まで到るには、大抵の努力ては無いが、此に到れば、筆は無意識に動く。無意識に動いて 而も其れが規矩を離れず、楷則を失はない。即ち泯二規矩於方圓一。忘二鉤繩之曲直一といふものてある。

譬夫絳樹青琴、殊レ姿共レ艷。隨珠和璧、異レ質同レ妍。何必刻レ鶴圖レ龍。竟慚二眞體一。得レ魚獲レ兎。猶悋二筌蹄一。

【大意】 夫れ絳樹と青琴とは、其の容姿を殊にすれども、艷麗を共にして居る。隨侯の珠と卞和の璧とは、質を異にすれども、妍美を同じうして居る。此と同じく鍾・張・二王を宗として眞草を學んでも書の神解を自得した曉には、亦四家以外の妙味を筆にあらはすことが出來るものであるから、何ぞ必しも鶴を刻し龍を圖し、得體の知れぬ圖案式の花文字を書いて、竟に眞體に慙づるやうな愚をするに及ばうか。且つ自分が鍾張二王を學べと云ふは、必ず鍾・張二王ソックリの風體の字を書けと云ふのては無い。之を宗として規矩を定め楷則を取れといふに過ぎないから、書の奥妙に達した後には、之を忘れて差閊へない。魚を得・兎を獲た上ては、猶何て筌蹄を悋まうや。棄てゝしまつて宜しい。

【衍談】 此の一小節は、前節に接續して、前節の末の自可下背二義・獻一無レ失、違二鍾・張一而尚工上の注脚としたのてある。

青琴は、二美人の名、古の神女てある。遂慙二眞體一の眞體は鶴や龍の眞體てあらう。意匠式に文字を書いて見ても、文字てはモトよりなく、實物の形像としては、亦成つて居ないて、お慙かしいものてあるといふ意味てあらう。元木漢土人は、實物の形像を眞といひならはして居る。

筌は魚を獲るの具、一に笱ともいふ。蹄は兎を捕ふるの具、蹄と名づくる所以は、兎の足にからませて之を捕ふる一種の羅網てあるからてあらう。此れも莊子に出て居る所てある。悋はヲシムと訓すべし。字形は又悭にも作る。音は良刃切リンてある。

前の今之所レ陳、務裨二學者一より以下、此處に至るまてが、孫過庭書譜の讀むべき價値ある所て、隨つて孫過庭の最も力を入れて說いて居る所てある。實に書學者を裨益する所の大文章て、注意して讀むべき所てある。此れより以下は、其の緒餘に過ぎないから、骨を折つて讀むほどの價値は無い。

聞下夫家有二南威之容一。乃可レ論二於淑媛一。有二龍泉之利一。然後議二於斷割一。語過二

其分。實累樞機。

【大意】 そも〳〵家に南威の容色が有つてこそ淑媛は論すべく、龍泉の寶劒をもつて居つてこそ斷割の利鈍は議すべきものであるといふことを聞いて居る。自分が未だ書學に於ける徹底した心解妙悟を得て居るのでもないのに、斯ういふことを語るのは、身の分際に過ぎたことて、實に書學の樞機を累するものてある。

【衍談】 此の一小節は、孫過庭自ら述ぶる所の謙辭てある。孫過庭に此の謙辭あつて、はじめて孫過庭の前に述べて居る所が貴いものとなるのである。

書學の妙境に達した者でなくては、モトより書學の妙境を知らう筈が無いから、之を語り得られようが筈は無いのであるけれども、實際書學の妙境に達した人は、其の妙境に就いて多く語るを欲せない。語らうと欲するも、語り得られない處に書學の妙味は存するのであらう。故に筆舌の傳ふる所は、モトより糟粕に過ぎないけれども、糟粕でも之を蒸溜してアルコールとなせば、よく人を醉はしむることが出來る。孫過庭が此れだけでも說いて置いたお蔭て、後學は之によつて書學の何物であるかを了解することが出來る。孫過庭の後學に寄與する所は、實に大なるものである。

南威は春秋時代衛の靈公の夫人南子、頗る容色有つて、又人を見るの明が有つた。淑は善也と說かるゝ字、媛は美女なりと說かるゝ字である。

龍泉は古代の寶劒の名、敘事釋名に『楚に龍泉あり、秦に太阿あり』と見えて居る。

累は煩累、系累の累で、ツキ纏はつて邪魔になる意に用ひらる。樞機は中心要部、最も肝腎な處である。

吾嘗盡レ思作レ書。謂爲二甚合一。時稱二識者一。輒以引示。其中巧麗。曾不レ留レ目。或有二誤失一。翻被二嗟賞一。既昧レ所レ見。尤喩レ所レ聞。或以二年職自高一。輕致二淩誚一。余乃假レ之以二紬縹一。題レ之以二古目一。則賢者改レ容。愚夫繼レ聲。競賞二毫末之奇一。罕レ議二峰端之失一。猶二惠公之好一レ僞。似二葉公之懼一レ眞。是知伯子之息二流波一。蓋有レ由矣。

【大意】 自分が嘗て精神を罩めて書を作り、自分では甚だ合作上出來と謂うて居るので、時の有識者と稱せらるゝ人に之を示すに、其中の巧麗な所には、曾て意を留めないで、或は誤失即ち不出來な所があれば、翻つて嗟嘆賞美せらるゝ。斯る人は、實際に書を鑑賞する所の眼はもたないで、何か聞きかぢつて居る所の知識で書を評せうとするのである。又或は年輩官職がおのづから高いので、人を眼下に見下し、輕々しく凌誚を加ふるやうな人もある。ソコて自分が假りに表裝して、之に古い名家の名を題し、古人の筆蹟として之を示す。さうすると、賢者は容觀を改めて敬服し、愚夫は嗟賞の聲を

連發し、競うて豪末の奇を賞して、筆端の誤失を議するやうなことは罕(マレ)てある。此れは猶惠公が僞を好み葉公が眞を懼るゝやうなもので、笑ふべきことてある。伯牙が流波の雅引に游息して、世間の人を相手にせなかつたといふのは、蓋し由(ユエ)あることてある。と自分は悟つた。

【衍談】　此の一節は、書を知ることの難いのを自分の實驗を擧げて、之を語つたものてある。明眼(メアキ)千人盲目(メクラ)千人なら、半々てあるけれども、眞の明眼者は、半々即ち二分の一なぞ有るべきものてない。千人に一人も有つたら、其れて澤山てあると斷念(アキラ)めねばなるまい。

輒《スナハチ》は同一事を繰返す場合に用ひらるゝ副詞てあるから、幾度もあつた實驗談といふことが知らるゝ。

喩は諭と同字、サトルとサトシと自他兩用の語てある。此處てはサトルの意味で、喩レ所レ聞とは、耳學問のハシコイ人を言ふのてある。

凌誚の凌字は、原本ては陵字のやうにも見ゆる。シノグの訓には、陵の方が宜しい。

緗縹は顚倒して縹緗とし方が、裱裝と音通して早分りてある。但し緗は帛の淺黄色、縹は帛の靑白色て、二字共に帛の色の名てあるから、孰れにしても宜しい。昔時は筆蹟の裱裝には色ある帛を用ひたから、緗縹と言つたらしい。筆蹟を裱裝することは、梁の武帝の時から始まつたと言はれて居る。無論卷子としたので、今の條幅のやうな仕立方は、まだ無かつた。

改觀の觀は、外觀の觀て、改觀は衣貌を改むる。即ち衿を正すの類として解釋したい。

峯端の峯は、鋒の假借てあること勿論であるが、孰れにしても筆には假り物てあるから、峯ても惡くはあるまい。峯も頂の尖つた山てある。

孫過庭が自分の書を裱裝して古人の名を題し人に示したのは、一時の戲れであつて、僞蹟を作つて人に高價に賣りつけようなどいふ腐つた量見から出たことてなかつたのは、言ふまでも無いが、孫過庭は此の惡戲をよくやつた人と見ゆる。後世に傳はる王右軍の筆蹟は、多くは孫過庭の書いたのてあると後の人が言つて居る。

惠公之好レ僞は考ふる所が無い。

葉公之懼レ眞は、莊子に見えて居る。曰く。

葉公子高於二室戶一皆書レ龍、於レ是天龍聞而下、葉公見レ之、棄而遠走。

伯子之息二流波一の伯子は即ち伯牙也。流波《流水》の雅引に游息して、一切世上の喜憂毀譽に無頓着なのを言ふ。

又包愼伯は、猶惠公之好僞以下蓋有由矣までの二十三字を删つて居る。無くてはならぬほどの必要文句てはない。

夫蔡邕不レ謬賞、孫陽不二妄顧一者、以二其攴鑒精通一、故不レ滯二於耳目一也。向使奇

音在レ爨。庸聽驚二其妙響一。逸足伏レ櫪。凡識知其絕羣上。則伯嗜不レ足レ稱。良樂未レ可レ尚也。

【大意】 夫れ蔡邕が賞鑑を謬らず、孫陽が妄りに顧みなかつたのは、其の玄鑄精通なるを以ての故に耳目に滯ることなく、一目一耳の下に直ちに決定を與ふることが出來たからである。響に奇音の爨に在るときに、庸聽も其の妙響に驚き、逸足の馬が櫪に伏して居るときに、凡識でも其の絕羣を知ることが出來るやうであるならば、蔡邕も稱するに足らず、王良・伯樂も未だ尚ぶに足らないのである。

【衍談】 此の一節も、亦前節に接續して、書を知ることの難いのを他の例から推し較べたのである。蔡邕不レ謬レ賞と奇音在レ爨とは、同一典故から出て居る。蔡邕は音律の妙手で有つた。本傳に曰く。邕の吳に在りしとき、吳人に桐を燒いて以て爨する者が有つた。邕は火の烈ゆる聲を聞いて、其の良木であることを知り、因つて請うて裁つて琴をつくつた所が、果して美音があつた。其の尾の方が焦げたまゝであつたので、當時の人が之を焦尾琴と呼んだ。

爨は爨炊、食物を煮炊する所である。竈に燃ゆる薪の火聲を聞いて、琴を造るに適した良木であるのを知るのは、實に賞を謬らざる者である。伯嗜は蔡邕の字である。

孫陽字は伯樂は、古の善く馬を相する者、馬の良否が一目見たばかりて容易く分るので、妄りに振り返つて再び見直すやうな事は無かつた。

櫪は厩の前の横木、王良は古の馭馬の達人である。

玄鑒とは、幽玄な所に識力の透徹するを謂ふ。

至レ若二老姥一遇二題扇一。初怨而後請。門生獲二書机一。父削而子懊上。知與レ不レ知也。夫士屈二於不一レ知レ己者一。而申二於知一レ己者一。彼不レ知也。曷足レ怪乎。故莊子曰。朝菌不レ知二晦朔一。蟪蛄不レ知二春秋一。老子云。下士聞レ道。大咲レ之。不レ咲レ之。則不レ足二以爲一レ道也。豈可二執レ冰而咎一二夏蟲一哉。

士屈於不知己者、而伸於知己者は、韓詩外傳に見ゆ、晏平仲と主父偃との故事なり。

【大意】 老姥が右軍に其の扇に題書せられて、初めは怒つたが、扇が高價に售れたので、再び書いて下さいと請うたとか、又右軍が其の門弟子の家に行き、書几の面の滑かにして淨いのを見て、眞草相半して書いた筆蹟が神妙言ふばかりなく、門生は大いに喜んで永く家の寶とする心であつたのに、門生が右軍の歸るを送つて郡治まで行いた不在中に其父は之を削り棄てたので、門生は大いに懊いたといふ若きは、知とる知らざるとてある。夫れ士は己を知る者に屈して、己を知らざる者に伸ぶものである。彼の知らざる者は、焉んぞ怪しむに足らんや。相手とするに足らない。故に莊子は曰く。朝菌

は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らずと。老子は曰く。下士は道を聞いて大いに之を唉ふ、之を唉はざれば、以て道とするに足らずと。豈どうして氷を執つて夏蟲の之を知らないのを咎むることが出來ようか。咎むるも無用てある。

【衍談】書を知らない者に向つて書を說くのは、猫に小判てある。狗子に說法てある。知らない者が知らないのは、咎めやうが無いから、緣なき衆生は度し難して、拋つて置くより仕やうがないから、強ひて知らするにも及ばないが、苟くも之を知らうといふ程の志がある人てあるならば、一知半解てなく、徹底するまで知つて貰ひたい。一知半解は却つて邪路に導くもので、生兵法、大傷の本といふやうなもの、趙括が兵法は、秦軍に敗られて、四十萬の軍兵を坑にせらるゝやうな結果となつた。徹底した眼を開いて居ないと、得て斯ういふ結果を生み易い。書を學んても天狗にはなつて貰ひたくない。孫過庭の胸中を忖度したら、斯んなものてあらうか。

申は伸の古文。朝菌はキノコ。晦は月末、朔は月初、朝菌は壽命の極めて短い者で、半月と生存して居ないから、晦も朔も知らない。蟪蛄も蟲の名、半年と生存して居ないから、春とか秋とかいふことを知らない。『夏蟲は冬氷を知らず』といふことも、莊子に出て居る。唉は笑と同字であるが、唉の方が正しいやうてある。

自漢魏已來。論書者多矣。妍蚩雜糅。條目糾紛。或重述舊章。了不殊於既往。或苟興新說。竟無益於將來。徒使繁者彌繁。闕者仍闕。

【大意】漢・魏より以來、書を論じたものは少なくないが、妍蚩雜糅して、條目糾紛、見るに足るべきものは、甚だ乏しい。或は重ねて前人の舊章を述べたものもあるが、既往に殊ならず、舊よりよくなつた所は認められない。或は苟くも新說を興して、大いに通を振り廻したものもあるが、是れとても將來に有益なものとは認められない。徒らに繁なる者は彌〻繁とならしめ、闕けた所言ひ足らぬまゝてある。

【衍談】漢・魏は分つて居るが、以來とは何處までゞあらうか。漢・魏より唐に至るまての書論類似のものは、前に列擧して置いた。孫過庭當時は、まだ〳〵外に傳はつたものが有つたかも知れない。又唐の時代となつても、孫過庭の先輩者の書論類似のものが多く出來て居る。孫過庭は、之をも指して言つて居るのてあらうか。

雜糅の糅は雜飯、マゼ飯といふ字てある。蚩は醜或は無知の義に用ひらる。

今撰爲六篇。分成兩卷。第其工用。名曰書譜。庶使一家後進。奉以規模。四海知音。或存觀省。緘祕之旨。余無取焉。

【大意】今撰して六篇となし、分つて兩卷となし、其の工夫用意を次第して、名づけて書譜と曰ふこと

とにした。庶(コヒネガ)はくは一家の後進をして奉じて規模とせしむることが出來よう。四海の知音者も、或は觀省を存してくれるであらう。祕傳口訣なぞ言つて、自家の體驗體得した所を封緘して人に示さないやうな卑陋なことは、自分の取らない所である。

【衍談】撰して六篇となし、分つて兩卷となした部分は、今傳はらない。故に今存して居る原蹟草藁本の部分と合するときは、三卷となるわけである。本朝現在書目に書譜三卷とあるのは、間違ひであるまい。而して原蹟草藁の初めに書譜上卷とあるから、六篇の分は中下の二卷となるわけである。此の原蹟草藁本を宣和書譜始め序文と認めて居るのは、一寸首肯し難い所が有る。序文としては說明が餘りに詳密過ぐる。今之所レ陳、務裨二學者一以下は、どうしても序文として之を目することは出來ない觀がある。四六駢儷文で書いてある所なぞは、序文らしくもあるが、內容が如何に見ても序文としては受けとれない。

一家之後進とは、猶我家の子弟といふごとき意味であらう。規模は、規矩・模型・猶準則といふごとき意味であらう。觀省は、看覽・省察・猶看顧といふごとき意味であらう。

知音は伯牙鍾子期の故事より出づ。伯牙はよく琴を彈ずる手をもち、鍾子期はよく琴を聞く耳をもつて居たから、鍾子期の存命中は、伯牙も樂しんで琴を彈じて居たが、鍾子期の死後は、音を知る者が無いので、琴を破つて彈ぜなかつたと云ふ。四海は、江湖といふやうな意味、廣い世の中の人を指して言ふ語である。

垂拱三年寫記

【衍談】前に吳郡孫過庭撰とあり、後に垂拱三年寫記とあるのを問題とすれば、唐時代の人の著書に自ら名を署するといふことが有つたかどうかといふことゝなり、又寫記の文字は何の必要が有つたかといふことゝなるのである。過庭が名であつたか、字(アザナ)であつたかといふことも、問題とならぬこともない。虞禮が名で、過庭は字(アザナ)であつたといふ說もある。若し過庭が字(アザナ)で、名ではなかつたとなると、唐の太宗が『過庭小子亂二二王一』と言つたのが怪しくなつて來る。何となれば、字は他から敬意を表して呼ぶ所であるから、君上が其の臣下の少年を呼ぶに、字を以てして敬意を表するといふことは無いことである。又自らの撰著に署するに字を以てするわけも無い。明の張丑は、陳子昂撰の墓誌を見て、虞禮は名で、過庭は字(アザナ)であると明言して居る。併し字(アザナ)を以て行はるゝといふことは、往々有る例であるから、一概には言はれない。現に陳子昂の如きも、字(アザナ)を以て行はれて居た一人である。

自家の撰著に署名するといふことも、絕對に無いとは言はれまい。此れは古鈔本を多く見た人の考定に待つより外は無いのである。寫記の文字は、少々怪しいが、是れも寫は筆寫の意味で、鈔寫の意味ではないと辯護の餘地が無いでもない。寫記といふことは、無用の文字であるとは云へ、他人が鈔寫したものとすれば、當時經生の書寫した書風によつて、眞書若くは行書で以て書かれさうなものであ

るのに、妍麗な草書で書いてあるのが腑に落ちないばかりでなく、文中往々塗抹改竄した所があり、又旁書した所もあつて、草藁本であること疑ないやうな觀が有るのを何と見るべきものであらうか。吾人は兎も角平凡な常識によつて、今の傳ふる所は、自筆の草藁本と認めて置く。

孫過庭書譜衍釋 終

大正拾參年拾壹月廿五日印刷
大正拾參年拾壹月卅日發行

釋衍譜書

著者 樋口勇夫 東京芝區琴平町貳

發行人 井上清秀 四谷東信濃町一六

印刷所 文心堂

發賣所 東京市芝區琴平町貳 晩翠軒

（定價金貳圓也）

有所權版

160
224

160
224